

雲錦隨筆

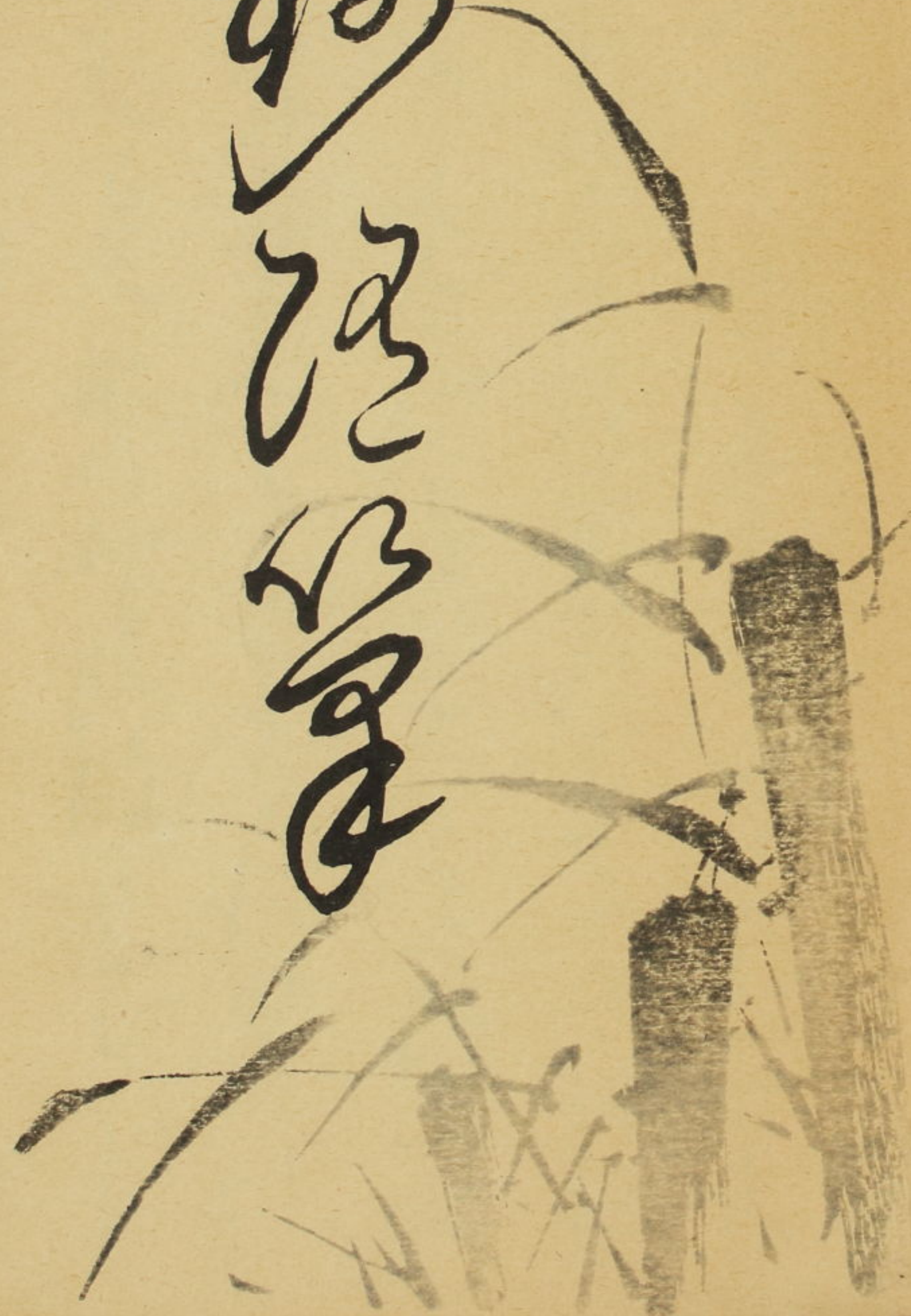
雲錦隨筆 完

贈
5
分



門 僧 5
號 50
卷

雲山禪師



Faint red seal or stamp on the right page.

ともしの記

曉舟に羽ばさしき年とるるのねく昔妻
らりしそる知夫の能世系れとてよめてゆた
ららばつひあし今れふはとさしとてい
何とれと見算ゆらしととと松田海舟
布つてあかへて大船の舟にひととと
とととととととととととととととととと
とととととととととととととととととと
とととととととととととととととととと

ともしの記

ともしの記

とて裁ぬこれと空蟬の甚も度あわて
 取らぬのたれに老てはとさかたむかす
 ぬへ人の世もたれにわが箱はわが世に
 ぬへてはまうたはむらじもたれに先か
 一と白くはらひてはまうたはむらじ
 さしのもを箱よ一とまをたれにわが
 ちよたれにわが一とまをたれにわが
 へてはむらじもたれにわがたれにわが

解案

○木園の海風集 並全圖

巻之二

雪鏡隨筆卷之二

雲錦隨筆總目錄

卷之一

- 木國の御綱葉 並全圖
 - 武藏野の盃 並全圖
 - 職人盡歌の校合 ○淡路國の巫女
 - 兵庫長田の鬼追 ○石清水の臨時祭
 - 京都誓願寺の大佛 ○洛西廣隆寺の御繪傳
 - 御手洗川の生洲 ○象頭山の鯨口 並略圖
 - 四屋敷の於菊蟲 並圖 ○鵲草莖同早贄
 - 摂津国高槻の華蟬 ○同淳江の白牛
 - 龍田佐保山の春秋 ○丹後国犬堂の碑
 - 讃州小豆嶋の四柱堂 ○和州柳本の傘堂
 - 靈佛の汗と出と ○浪華柳巷の櫻 並傾城の道中
 - 東都吉原花魁の諫言 ○花魁醴 並神供の一夜酒
 - 江州の八八日米 ○伊勢兩宮の新嘗祭 並住吉の新嘗祭
- 卷之二
- 大内御能の新奈 ○同御煤の塾壁 並春日田樂
 - 洛北畑枝土器荷の圖 ○和州柿本寺人丸の像彩色勸進狀
 - 人麿の像 並歌塚 ○摂津国五月山望海亭の碑

雲錦隨筆卷之二

- 鞆鼓腰鼓措鼓並古樂の圖
- 信貴山二鼓の筒の圖
- 江州菅山寺菅神の異説
- 美濃国本慶寺の悪僧
- 長命の養生
- 杉本一齋の長壽並農夫段平の説
- 老人無病小誇つと耻辱と蒙る
- 京洛千本の鶴池鷺石並岸氏鶴の写生
- 洛北小町寺卷絹の文臺同縮圖
- 阿波鳴門和布採の海人並福良の灰乾和布
- 江州湖水吹越の洪水並宇治川の渴水同畧圖
- 難波川口修造
- 同入津鱧鮓の大槩
- 菱垣の廻船
- 伊賀国上野の復讐並歌舞妓浄瑠璃の戯作劇場の評判

卷之三

- 祭文誓文の差別
- 歌舞妓狂言作者の盛衰
- 忠臣藏の権輿
- 同操浄瑠璃の戯作並梅幸の名譽
- 義士年回遺墨品具縦観の目録
- 耳鳥齋の戯画
- 大石紋所の説
- 南都大安寺の舊號
- 同女工具の麻浸
- 鄙女の古語
- 和州三輪の茶磨石
- 時鳥の落文
- 南都真福寺の礎石
- 京師妙心寺の明智瓦
- 齋藤内藏助の墳墓
- 真如堂東陽坊の佗數奇
- 京洛掲速の神社死杖祭
- 同獄門町獄門寺の異号

- 朔旦冬至の御祝賀 ○望月の駒迎並御馬献上
- 靈獸騰黃並略圖 ○木綿草綿の二種並木綿の諺
- 駱駝の觀物並畧圖 ○看々踊蛇遣並畧圖
- 踊雛子方衣装の圖 ○朝鮮の片面鼓並圖

卷之四

- 籠細工の觀物並寸尺大畧 ○土瓶塗挂の流言
- 歌舞妓外題宛字 ○浄瑠璃五段の作例
- 勸善懲惡四情の作意 ○野呂松人形の道外並游民の圖
- 操木偶の精密 ○浄瑠璃一夜漬の急作
- 天命の禍福 ○一語萬世の妙言 ○仁不仁の榮枯

- 太宗の慈仁病と愈と ○善惡禍福の同氣同類
- 和州法隆寺の閑辺桶並縮圖 ○僧侶の結夏解夏
- 安居の三時 ○元政法師宇治の三首
- 文覚上人の生死年歴 ○灸の名義並三里の効能
- 満平の長壽並例月の灸數 ○養生平生の心得
- 弥生の鼠麴草 ○資餅の差別 ○椿餅の製
- 嘉定食嘉定菓子 ○伊賀国蓑虫庵雅庭の膳
- 南都春日の擔茶屋同縮圖並火燧燒古代燧金の圖
- 河内国天見炬火茶屋の粽
- 洛北御菩薩池の地藏會並蓴菜舟同圖

○同鞍馬の竹伐並新刀古刀の勝劣

○同賀茂の酸莖 ○洛西佐比の河原

○齊宮齊院の説並道昌僧都の行力

○觀音地藏の縁日 ○阿波國行基庵の來由

○鴻儒の名家並松永貞徳翁の傳

總目錄終

雲錦隨筆卷之一

浪華 曉 晴翁著

○日本紀曰仁徳天皇三十二年秋九月皇后木国小遊行一
 熊野岬小到即其所の御綱葉と取て御舩小載て還りあふ是日
 天皇皇后の不在と伺ひく。八田皇女と娶て宮中小納め小時小皇
 后難波濟小到つくと天皇八田皇女と召めんと因て大恨と其採め
 御綱葉と海小投入と着岬あは故小時人散葉とる海と跣て葉を
 濟とふ又其地と号て御津の前といふ。難波と御津といふ初也云
 按どふ或は三角柏といふ又とくの柏といふ弘仁式あり三葉柏と
 といふ風土記抄小曰是は伊勢の御裳濯川の岸小生る柏あり是と

採く神供とて供へ又占いとて爲なり。又みはの柏といひ三葉かえ
 とりまを云々予近來るの三角柏の葉なりとて親友より得たり
 實ふ介も有づく覺ゆ

三角

柏之圖

大廿圖の

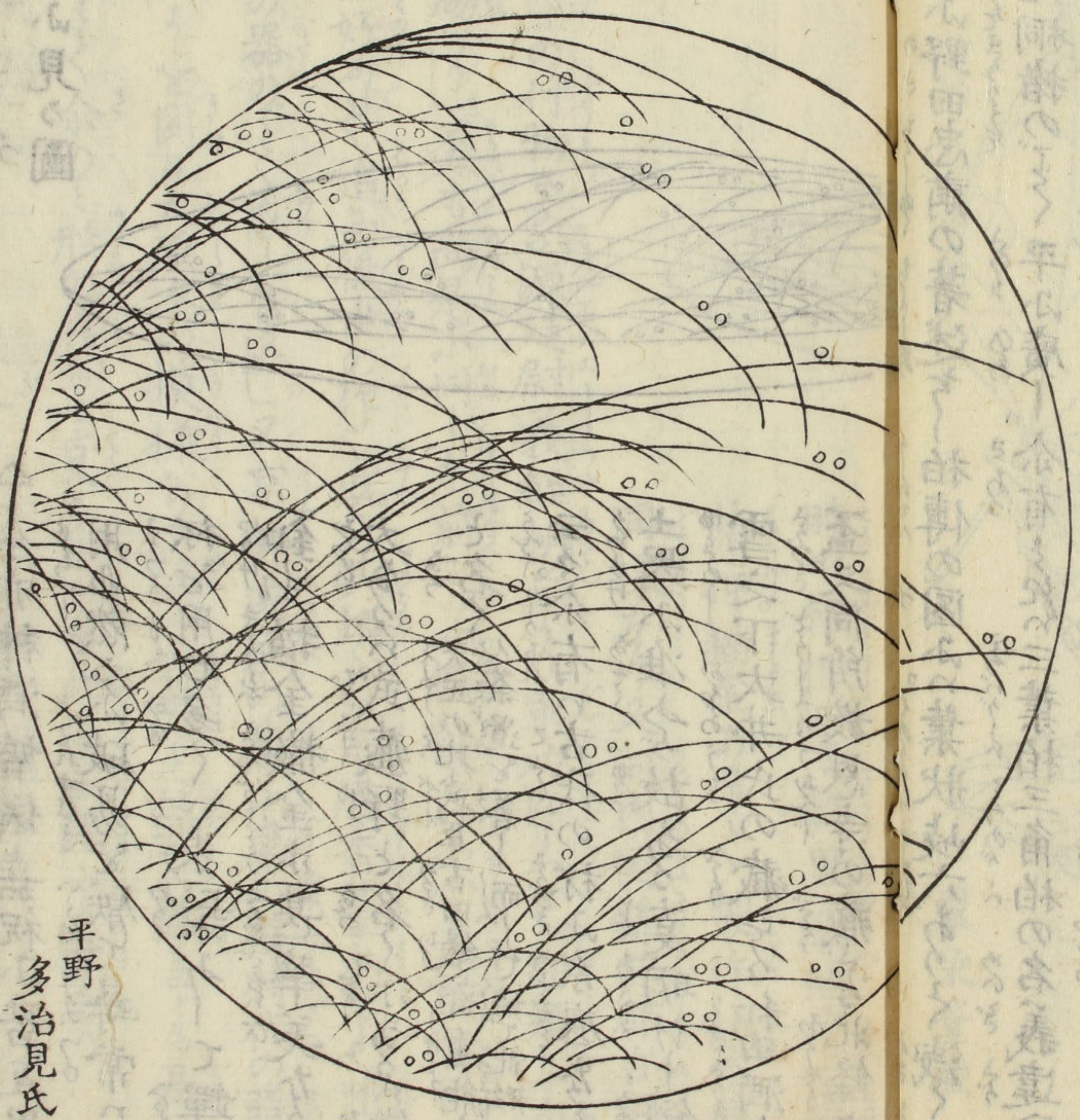


翠榮堂藏

按どるふ野田忠肅の著述に柏傳の圖ふ葉狀岐六ありと淺く七
 葉に凡桐楮のごとく平小廣し介有とて三葉柏三角柏の名義違へり
 ○摂河近郷の方言ふ集會の酒宴圃ふ成既小盃と納んとあふ
 及んで客より主小乞て寂早武藏めと納めめとりのまを例と
 按どるふ古代の作ふ武藏野と号大盃何とて内一面芒の描金と
 書より正しく此武藏野と順盃とて納めめと言と後世略と
 武藏といひ。又其風ひらく今様の盃の大あると出と納の盃と
 あそと武藏と言へふなり。平野の郷あり多治見氏の藏せり
 まつ城爰ふ摸写して左ふ出たり其品頗る名作めと至つと薄く
 輕し尤糸底なり香臺もど附とる總て後世の作あり

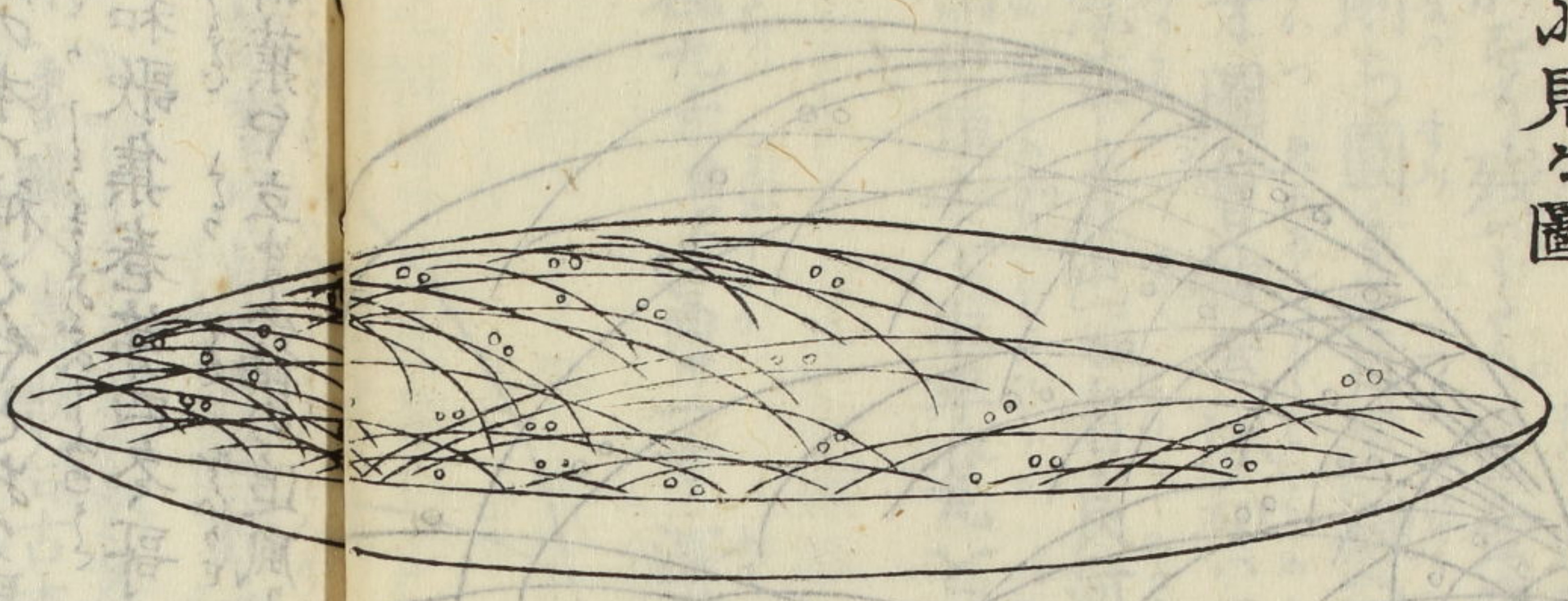
下地黒漆の上惣金箔押しなり時代より摺ぐげ所々小此づ金箔のかき残りなり。芒金時画露錫粉外同箔押し摺禿時繪なり。則ち圓々と月小擬へ武藏野の月の景色を象つたりなり。和漢三才圖會按云。坏初の瓦器と用ゆ故小酒土器と名く。止と都城州深草より出る者良河州龍目之小次日本紀云神武天皇香久山の垣土と取平瓮と作り以て神祇と祭りめ。平瓮の類△

徑九寸 曲尺 高廿一寸 深廿八分



平野 多治見氏藏

斜小見の圖



△今亦神酒婚儀嘉祝小皆瓦器と
 用ゆ然る小破易と厭て尋常の木
 杯と用ひ多く朱髹りて鐸り
 釘し描金撒金亦甚華美なり其
 大なる武藏野と名く小なる織部
 と名く天正の比武臣古田織部重能と云々
 云々余有る古代の杯小糸底者とい
 土器小准が故ある夏明け鎌倉
 雪之下大井氏の藏る和田酒宴
 盃又同所教恩寺の藏る北條泰

金の味焼漆器
 極樂寺の付物より源廷尉義経朝臣より軍功にり。那須与市宗
 高小賜りし盃も尚是小同じ尤前小の織部とい小杯は古田織
 部正の好みと遙く後世の作し既其頃より糸底香臺亦も附く
 今時の器のごく成りあはじ。又京師或家の藏小東山殿時代の時画
 盃のうと岡り大原木の模様ある故に大原と銘を然まども是糸
 底のうと余の形の異ある夏なりと此盃小添る歌あり
 大原木やめせく黒木ささめせ濃も薄くもささめせく

〇七十一番職人尽歌合六十二番右巫女の画の詞書小「神をやは化
まぬるもの」といふ風ふと「けり」其語とあるんば意解せん正しく傳写
の誤あるんと思ひが俣ふ過けり。近來其印本と再板するを板元
乃書肆先板の誤あるんを正さんと欲し池田ある山川正宜小校合
と頼けり」と以て各々を校合せし。此巫女の詞書ある神をやは
けり全く木偏の書落しあり。神をやはけり舞袖の追風ふと
とめ直さしけり夏詳く小解しけり。故ふ今の新板ハ神と改り介程
小古版の本ハ神をやはけり是あり山川氏の發明と賞せり。尤其原ハ
金葉和歌集卷第四冬哥 家経朝臣が桂の山莊のさけりし
神葉や立ち袖の追風ふなけり神ありとぞ思ふ 康資王母

是其詞書の出る所の根元なり

〇七十一番職人盡歌合古本之摸写

神をやはけり
うで乃をい

風よ



かんれ

〇玉篇云事神者在男曰覲

在女曰巫云

巫神子

和名 加牟奈岐

俗云 美古

神子之訓

上畧乎

〇一年淡路国と遊歴す。小彼国に於て神社の守護に多く寺院
 勤め社僧とす。祭祀祀式に女巫ありて其を執行ふ。此女巫といふ
 浪華といふの雇巫女の類なるに歴々の神職ありて。門と構へ傍り
 鳥居と建境内小社壇と宮と家宅も廣く家人も多く召つる
 就中三原郡小掇並村なる真野氏の母を桂子といひ女と繁子と
 号し母子共風流と好む歌俳諧と善し手跡賤し。御多許
 諧行脚の輩必し訪ひて。道の雅談をきこゆ。聽也。桂子同国淺野
 の瀧へ遊ぶ時。歌とて書て予に与へめるといふ。小あふん

外月の浅野小あふん

志野梅子

すももやな浅野の系乃如月よなの書と抄をよめんとしめりつり
 つるもあふもあふもあふもあふもあふもあふもあふもあふもあふも
 夢とや浅野んとと終りまふりまてまろしぬ。さうら山の花を
 白ふ多てりくささるると。あはくまらりはむとを洗ういひらふ
 吾人などたすまて。岩根のむやうふをすも本くの楢山の草
 きもいひあふぬ名もあふぬ名のあふむどはゆらなう
 梅子りく抄野の系乃如月よけ。たまてまぬと洗ふ瀧つて

〇

日向梅子

すももふふあふぬ名もあふぬかろりの神と月をあふゆ
 何ら山如月をふあふり日影ふあふのまらるる
 按ずる小類聚三代格貞觀十年六月廿八日。太政官符曰。

應以女爲祢宜夏

右云々。去天長二年十二月廿六日符傳。兼前之例。諸国小社。或置祝無祢宜。或祢宜祝並置。舊例紛謬。准執無定。加以或国獨置女祝。永主其祭。云云。自今以後祢宜祝並置社者。以女爲祢宜。但先置者。令終其身者。諸国依格。遵來年久。下畧。

然まの今淡路国ある真野氏など。則此女巫の裔孫あり。○撰津国兵庫の津の西小長田の神社と云ふ所。祭神事代主命と云。此社は例年正月十六日の夜亥の刻過うり鬼追といふ夏あり。村中より大男と云ふ。鬼小見立神社の後の森中又土藏あり。

此内より鬼七人。内五人は。何きまうとあり。出て出る鬼面。何きも古作の名器なり。赤鬼青鬼の二ツ。何きも木綿の染る装束あり。最古

風ある打扮なり
頻て社
内をふ
茶師堂
の椽ふ上り



三返廻り。介後鏡破と云。斧あり。餅と破る所作とあり。終とん。如何ある来由や。事實詳なり。具足の鏡。開ハ正月十一日を用て。と刀と持て。とを截と忌む。故小手と以て。槌と以て之と

破りて之を飲て食は是と鏡ひききとらふ。是れ此長田の餅とらふ
芥と以てするは是等の例不據のちんり

○城州石清水八幡宮賀茂神社ホの臨時祭とのり両社隔年
二行せらる。抑此神支の往昔天慶五年辛丑四月廿七日より始

まり然り不享保の後中絶不及びと文化十年癸酉三月十五日
御再興ありせし。御勅使御泰向あり朝五ツ時より御所蛤御門

より御出立ちあり烏丸と松原通夫より西へ西洞院天使屋敷より
御休足其御行粧美々々きと感賞あり恐多う御休息所

五條の天 不於て羈旅の御装束不改めあり頃て油小路と東寺四ツ塚
不出石清水に到りあり翌戌年の鴨の神社上ホ臨時祭行せり

今不至つと両社隔年不行る。其頃御代穩りて豊年うら
つと米の價壹石より銀六拾目上下不定まり者と心得居不近

年米價漸不高直不成て既不當萬延元庚申より冬に至りて
凡二百目余あり及びあり鳴呼時代の轉變あり歎息せり

○京師誓願寺の本尊ハ鳥佛師誓主歟 二人の作りと世不名高
き仏像なり。故不天明七丁末年一山の僧中より不圖言出り本尊

頗大像 豊公大仏建立あり以前まきい ありと火災の砌こまを出り夏
難し如何よりて容易出り奉らん夏と冬願りとと總評のり。

八方車とりふ車に乘奉るは何方まぐも容易自在不引出り奉

其便利なりと僧侶評議一決。同年の冬此車成就。本尊を
 乗奉るに翌天明八年戊申正月晦日午の刻より火災あり。あまふ
 依て即ち八方車あり安々と引出り。寺町通より三條と二丁北
 まどぐ引奉る。夫より後誰とあり多人數集り寺町と北へ御所の
 辺まで引て暫く爰に置奉る然るも益々風烈しく御所も今や火
 移らんと勢ひみど。最危く見へり。尚如来と北へ引奉るとま
 誰となく數人集り今出川まどぐ引上り夫より賀茂の河原まどぐ
 引奉りたる。火鎮つとく此三日許り置奉り。介後誓願寺より
 迎ひの人救群泰して難く。取りあふと。八方車出来て僅ふ廿日
 余経て斯ふ危き大火ある。夏実又奇特の御佛なり。然るも去る

年寺内の觀物小屋より出火し。引出し奉る。つと間あり。空しく
 炎上し。そより夏時節到来き。者ある。つと終つと押しむ。夏
 夏よりん

○太秦廣隆寺の太子御繪傳四幅 画御讚の 筆 御書 者 御書 未詳 を凡七百年を経
 々ふ繪傳なり。然るも四幅の内第二幅目 守屋退治四天王手 りの頃 御建立立ホの巻

欽紛失し 初卷三卷 三幅あり。残念ながら數代と過させらる。文
 化の初年一山住職の御前方の内の叔父君ふあ。せあ。御方禪
 宗建仁寺中何某の院に住職ふあり。せあ。夏なり 藤堂家の一時
 此叔父君太秦へ御出あり。御説話の序此方の寺ふ太子の御
 繪傳一幅あり。い。記とも分らん。後來藤堂家より御所持り

一君侯の仰ふ。軸物と慰と。寺院ふ納じ。命が。顔て自坊へ寄附。語ある。當山の御繪。傳四幅の内。頃より。二幅目紛失。今初三四の巻あり。若や其紛失の巻。非ざるやと答へ。實も有んも計。則ち建仁寺。飯。出。見。豈。人。廣隆寺。紛失の二幅目。藤堂家へ此由。達。改。廣隆寺へ御寄附あり。然る。其折。光格帝。仙洞御所。ち。仁孝帝の御代。古例。皇太子の尊像。天拜。泰内。是。御泰内。三幅の御繪。天覽。入。比度。四幅全。揃。表。修。御像。天覽。奉。愛。此。仙洞御所。入御あり。御繪傳の四幅。御満。悦。思。召。還。御遊。是。吉事の時節。到来。

り

○京師三宅氏

下立賣大官通 西入三宅惣兵衛

所持の屏風。下賀茂十二月の圖。

正月

上。月。並。の。常。信。の。筆。故。人。の。圖。と。写。者。と。其。繪。の。形。勢。按。じ。萬。治。寛。文。年。間。と。覺。ゆ。水。無。月。納。涼。の。所。夏。越。の。神。夏。と。画。御。手。洗。の。團。子。店。女。と。商。ふ。最。古。雅。な。御。手。洗。川。の。辺。所。々。毛。氈。と。敷。男。女。ち。混。じ。酒。宴。の。体。あ。り。是。の。森。中。と。別。小。屋。根。修。理。料。理。家。水。茶。屋。の。

類ひの曾くたり。此酒宴の料理人袴を着魚箸庖刀をもちて
 柵凡にうらむと鯉と料理する体あり。又川の筐ふ鯉鮒其餘種々
 の川魚を生てをんと高ふ男あり。更又調味しと高ふ店に見
 えん按ざるふ料理家とつる者あり。彼生て高ふ魚と求
 めと心のちみく調味しと酒宴せと見えたり。又此筐に生て
 川魚と高ふ者正しく真の生洲あり。今京師浪花ホみく
 生洲と称する者川魚の料理屋あり。只其家号又唱るは
 たり。尤堀兵庫ホみの海魚の生洲ありて平生小諸魚を畜へ生て
 湿氣の時節不漁より共高貴の用と欠ざるの手當と。或は臨
 時の用と達するの手段なり。

○讃州象頭山萬燈堂の椽側小大さなり

鯿口あり凡徑四尺余厚と二尺余も

あはれ其目方幾許あらん哉

知らざるども數貫目なり

余程小宝前小掛と能はる

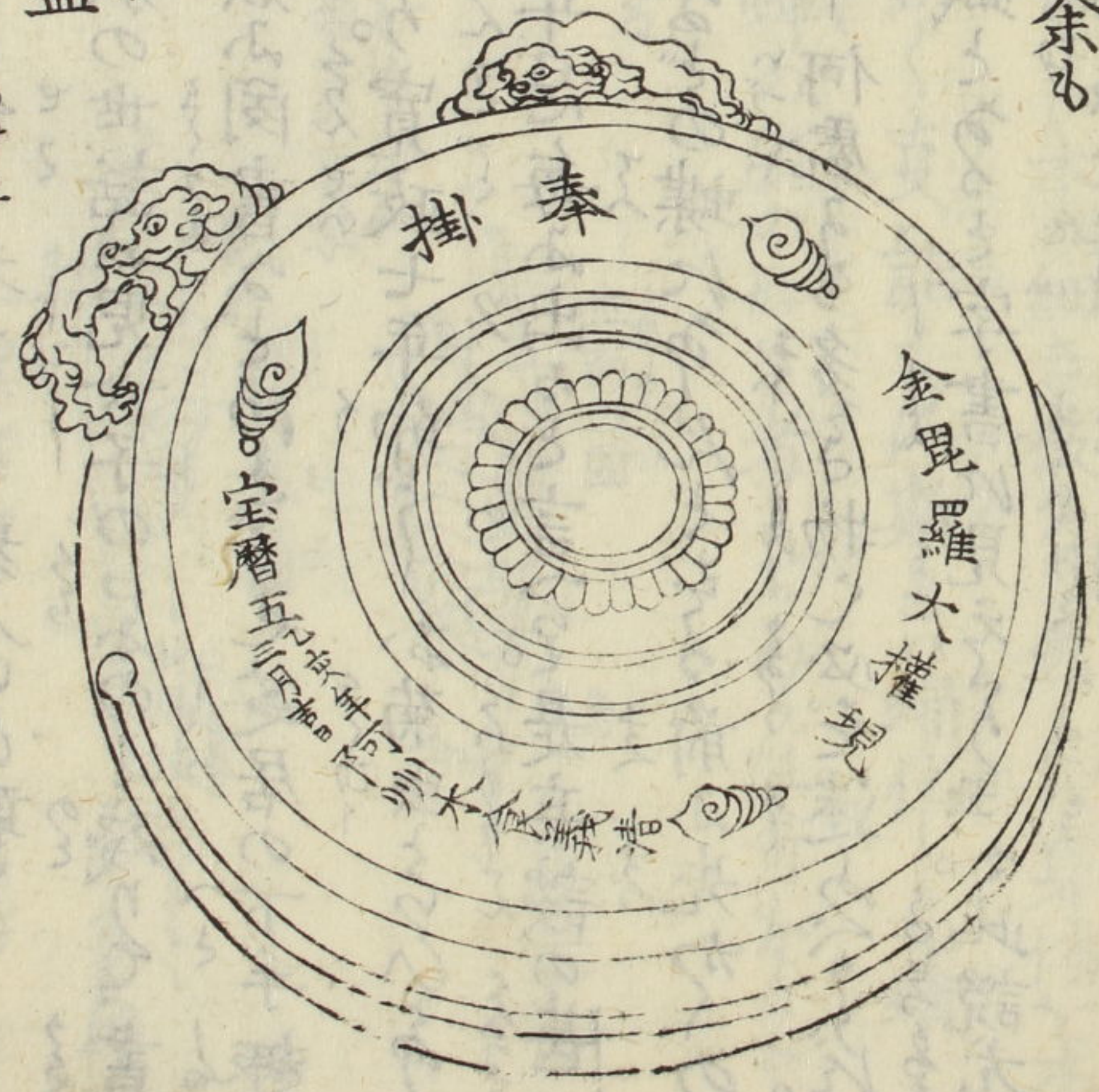
空く此小居り阿州木食

義清と記さる嗚呼いふあり

心願もや亦い木食の名と世

轉らばき術もや何ふまき無益

の支小紫銅と費し且宝前も掛得也



金毘羅大権現

實過げんすま猶あなぢか及や諸しよの謗やうと免まぬんがる者ものなりと衆人しゆじんの取とり

○播州巡覽圖會はつかうせんらんづあひ云いひ皿屋敷ひらやぢの世話せわの兒女子こぢやうしの口くちのそ残りのこりて書か傳つたへる物ものなり。適播州志たふくはつかうしの類るいふ図書ずしょなど所ところまま芝居しばいの下手へた趣そ

向むかふ似にて必かならずて偽作ぎさくとい見みえり。寛政七年卯かんせいしちねうぐぐお菊虫きくちゆうといひあ
もてそやぢり世俗せきよくよお菊きくの年忌ねんぎ毎まふ出いると言いつ。是こゝ妄談まがたんの甚こゝろ

きと漢名かんめいと蛹ようといひと毛虫けちゆうなどの蝶てふにあんとまゐる前まへふ先まへわくの
形かたちふ變かへまる。蚕くわもあまると同おなト何處いづこも多おほき物ものと必かならず迷まよへるは

蠶化くわけと蛹ようとなり。蛹化ようけと蛾がとあると字書じしょに見みえり云々。此説このまう尤
なり。余あまも有ある一ひとちうちゆうぬぬぐ。其蟲そのちゆうと得えと能あ々あ圖ずららふ奇きこととり
も亦また無理むりありん正ただしく女よめの後手のちて又また搦なららき木きふ括くりつつちちりりる

形象けいさうあり。尤とと其背そのせと搦なつつけけららい糸針金いとはりかの如ごとき物ものなり。至いたつて堅か

強つよく葛くわの類るいや詳つめめららん。括くつつ木きの細こき枝えだあり。然しかままば身み體たいと木き

枝えだふ搦なつつ付けららままるるへ全まく動うくく支し能えるる斯すままいい蛹化ようけと蛾がと
ちんと欲あする所ところの形かたちあり。又また蟬せみの脱ぬの如ごとき者ものもああるる奇きなりや

つつも亦また空くうくく播州皿屋敷はつかうひらやぢといふ
淨瑠理じゆるりの元文六年辛酉げんぶんろくにんしんしゆ

七月十五日しちがつじふごにちより豊竹座とよたけざ。○阿菊虫あきくちゆうの眞写まじや
於おて始はて眞行まゆかぢぢと云いふ
淨瑠理じゆるり外が是こゝの往昔むかし江戸番町えどばんちゆう
是こゝの辺へふ何某なになんといふ人ひとの家いへに付つ来き



重宝の皿有り多る。若過りて破りぬる其者の命を取べしと豫て其家の掟なり。其主より人侍女不戀慕し。後がらざる遺恨を悪計を以て皿一枚と破て侍女不罪と課せ終ふ渠を殺し庭の古井に沉めし其幽鬼ありき宗子とありし其女を菊と名づけ由此番町と播州に戲作ちりものと或古写本に見えんども事實詳ならず。又上野国の士人の家不付来重宝の皿二十枚ありて若これと過ち破る者ある時命を断んとの掟あり。然るに侍女過りて一枚破り程命と取りぬると怖きありしを當家の米春男これと因て此女を哀れ終ふ残り十九枚より一時不打破き諸人の難義を救はんやせしぐ主人大に其義氣と感ず。米春の男と執立しとりる説を

戲作ちり由近來發行の積翠閑話小委し見えたり亦も所んり
 ○歌俳諧ふりし鶉の草茎鶉の早贄とりつる者も此お菊虫不類せ
 りのや。蟪蛄蛙の
 類いと草木の
 枝不串し或は
 取つとながる
 乾物不成ふかと
 林中あそく間見の夏
 あり。是と鶉の早贄と
 り。歌林良材不曰く鶉の



雲鏡隨筆卷之一

〇十二

草莖とのめい 鴨やまひんの時鳥ときどりの省縫しやうほうあり有あるが省手しやうてを取とり返かへさざりし
 依よて其代そのしろりて代人だいにん様の物ものと草くさの莖かきふくて挾さめりて云いはれり是こゝを
 鴨やまひんの早贖はやしんとも云いひ。斯こゝの諸説しよせつの證しやうたる本説ほんせつなりと雖なほも
 後人ごにん取用しよひて讀よむ哥かも有あるや藻塩草もしかさ小曰こいひ鴨やまひんのさくまくと云いは
 ると萬よろの草莖くさかきふ生なる虫むしの蛙かと取とりて時鳥ときどりの
 爲なりて我身わがみに隠かくることなり。八雲やぐもの御説おんせつ小説せつあり此説こゝは過あやま
 りと云いは鴨やまひんの時鳥ときどりの省手しやうてと云いはれり今いま四五月しよごごの程ほど奉たてまつらんとて
 賤せんしと隠かくき其料そのりやうとて草莖くさかきのさくまくと郭かく公こうの夫をとこと尋たづねて呼よび
 らることなり。時鳥ときどりの名なを得えることなり。此呼こゝは歩ある時鳥ときどりの本ほんの鴨やまひんは彼
 隱かくきとて歩ある鴨やまひんの本ほんのさくまくと云いはれり按あづかるは此こゝは本のさくま
 時鳥ときどりの異名いみなと省手鳥しやうてどりと云いはれり。一説いっせつ小省手鳥こしやうてどり此鳥こゝ前生ぜんせい小省こしやうと作つ
 つく賣うることなり。鴨やまひん省しやうと買かひて價あらと乞こはることなり。故ゆゑ鴨やまひん此鳥こゝの來きたる時ときの本ほん
 下竹したけの中なかに隠かくきとて見みえぬ

大后百おほのちひひゃく 鴨やまひんの省手しやうて鳴なることなり。夏なつの山辺やまのへあり省手しやうて出いでぬ人ひとの所ところにトカ
 按あづかることなり。此省手こゝとて省しやうの價あらと乞こはることなり。商賣しやうばいの物銀ものぎんと物
 本ほんとの同おなじなり。尤なほ此諸説こゝの往昔いふこゝの風流ふうりゆうより出いで忘説わすれせつあり
 乎や枝えだ小登このぼることなり。死しる者ものの其虫そのむしの死しる期き來きたつと自らみづか草木くさきの
 枝えだ取とりて其その終しやうふ死しる者ものありて鴨やまひんが所業しよごとて有あるべしと云いはれり
 なるべし

○攝津国せつ嶋上郡じやまがひ高槻たかづきの往昔いふこゝ高月たかづきと書いはれ地名ちやうめいと野身のみのみ郷むら高月たかづき

雲錦隨筆卷之一

邑と云。戦国の時々小大木の槻ありと本陣と定めしむ。槻の
 字小改む。城主初め近藤連と云。是と高月殿と称す。然
 然と云。又往古ハ山城国の属邑あり。萬葉集ハ高市連黒
 人の歌小

速来而母見手益物乎。山背高槻村散去奚留鴨

余有ハ高槻の名最古。戦国の時々改む。今尚城内
 野身神社と云。是則延喜式神名帳ハ所謂野身神社也。今
 今牛頭天王と称。大官司敷氏と守護。然る小槻津志ハ
 野身神社。在上田辺村。今称天神祝氏家藏。文治二年。應永九年祭
 野身神社。礼式与下田辺芥川真上共。預祭祀。莊所村有地名上菅原
 按。小野身神社の名。小菅原の号。天神と祭。ホ柳多。高

槻と兩所小此神社ある。夏不審。

或ハ上賀茂下賀茂の兩社の類あり。

又高槻の社頭ハ花蟬と云。蟲あり。

通例の蟬と異り。頭ハ花の如

しのを頂る。土人の云く此地ハ涯り

他所ハ有らば。按。余ハ

本草綱目ハ蟬ハ總名也。救種

皆蟻蝽腹蜻より変じて蟬と成

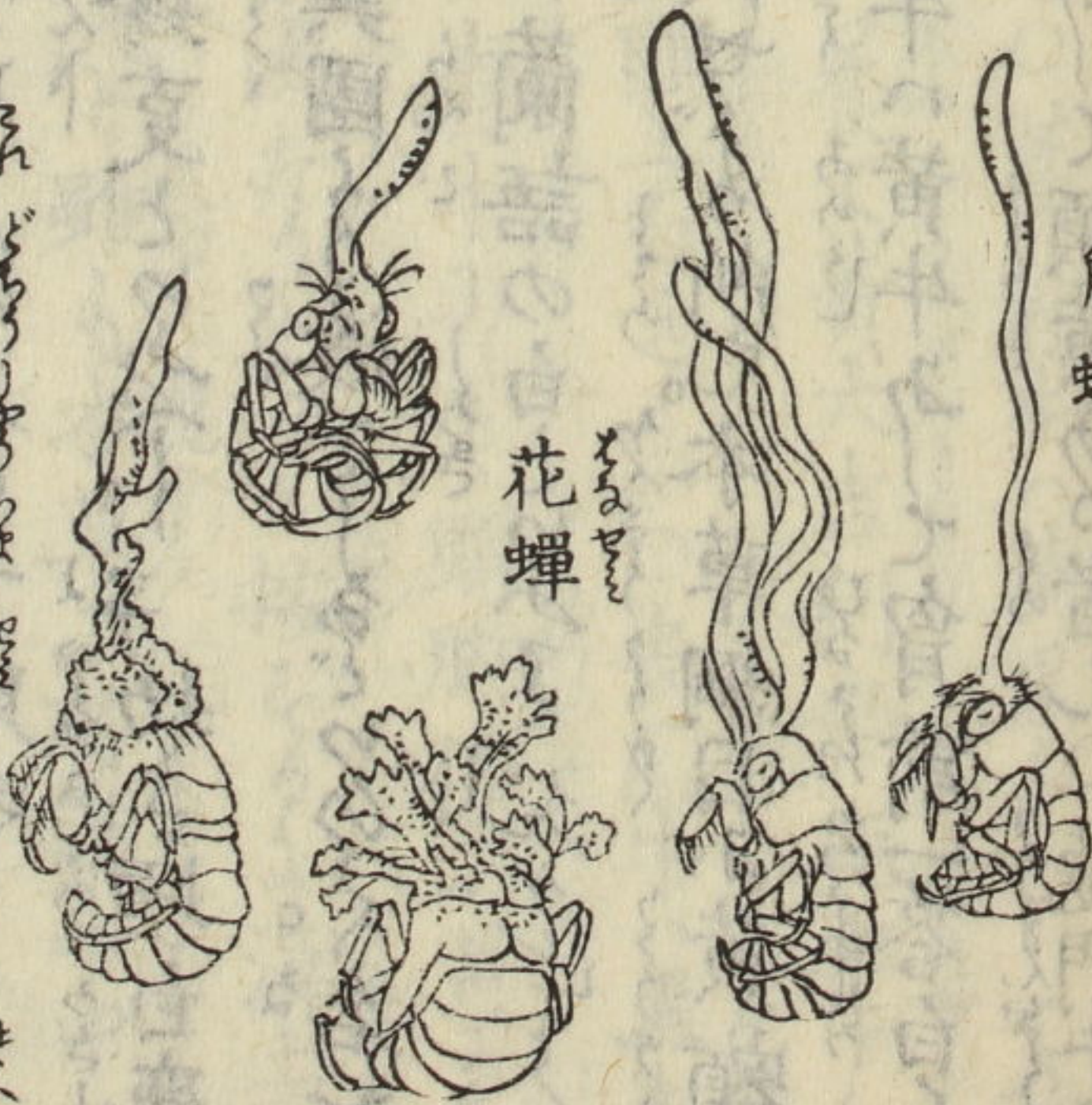
亦蜚娘の轉る所云々。又一種冠蟬と云

一名胡蟬。塘蝸と云。本草綱目ハ頭の上ハ花冠あり。蟬と云々。按。す

角蟬

真写

花蟬



是ハ市中生。未だ蟬と云。今ハ以前
 變化して如斯花の形。或ハ角の如き
 もの生ず。里俗云々。蟬茸と云

詩大雅曰如蜩如蟪（こゝろ）之言也。蓋蜩ハ尋常の蟬也。蟪ハ即冠蟬也。是正
く彼高槐（たかね）小生也。所の華蟬也。

○撰州東生郡滓江村の農家小文化五年戊辰四月白牛出生（しらう）一

みより其評判四方に高く殊更ニ物見高き浪花の貴賤我もくと
彼地小到（こ）群集する夏野（なつ）。古今の珍夏といふべし。予幼き頃白鹿

白猪ホハ觀物とて見たり。白猪ハ異國より渡りてきたりて名を

「宰ツトハルケ」といふ。按ずるふ「宰ツト」ハ蘭語の白といふこと「ハルケ」とハ

猪の蘭語也。然まども白牛ハ未だ見聞せざる所也。本草綱目ハ黄額

牛ハ額上ハ一花黄ある者なり。○白胸牛ハ黄牛ありて胸前一答白く

掌の大きなる者あり。○牛中王ハ白牛ありて頭黄ある者也。○龍門牛ハ

角の潤さ相去と一尺是亦牛中の王也。○蒿背牛ハ黄黒色ありて背

上ハ當つて一條の白色あり。以上五品の養て皆大吉也。鹿斑牛ハ

有斑鹿の紋の如くある者也。孝頭牛ハ頭上白く。○喪門牛ハ黒牛

みと頭と尾と白き者也。黄幡牛ハ青牛ありて頭脚俱ハ黄きを

角白者以上四品いこれと養めと並ふ函なりと云々。按ずるは滓上江

村ハ生ごハ全体白くして頭ハ黄あり。雖も本草ハ所謂牛中の

王なる者小遠りざれば吉兆といふべきなり。

○車僧と銘どハ花器ハ其名世小高くして形と見一人ありしが或

侯の江戸より御相傳の由ありて手づから切せしむるを撰州天王寺の

寺町壬生山浄春寺へ下さるなり。此道執心の人年久しく諸方を

尋し不圖當寺へ寄附ありしを傳へて拜見せり。
世上は隠しあり成りしを

○春の神と佐保姫との秋の神と立田姫との佐保山の名
生花大全と見書小見たり。序文の終は曰く保八年癸卯季秋重陽河州丹南郡野中村觀水庵とあり

山号と佐保山とらふ禁の立田も山の名
立田山和州平群郡あり

東西ふあり。東と春と西と秋と
平群郡あり

○丹後国與謝郡宮津より程近き小犬の堂とらふ小堂あり。往昔

九世戸の智恩寺と波治村の海岸寺とふ畜養一犬の菩提の爲

建る所とて海邊の小坂の上の堂内小標石あり。林道春の碑文あり

丹後国九世戸文珠堂近辺有寺曰海岸傳秘昔海岸寺僧兼管文

珠堂其僧畜養一犬愛之此犬毎日自海岸寺往來文珠堂累年犬

死僧憐之建一宇吊祭之號犬堂嗚呼猶慕其寺主之愛僧亦思及

□□之物不亦奇乎爾來星霜既舊堂宇毀壞非無懷古之感今興

土木之事成斧斤之功乃記其趣以爲後證

延寶六戊午月日

當國宮津城大江姓尚長立

弘文院林學士誌

○讚州良の海中ある小豆嶋
讚州良川郡は屬を

何々九二間或は三間許四方四隅に柱ありて壁あり。床板を張詰或は

椽何々亦は椽ありて何々尤棟は四方あり。瓦葺ありて堂内の一

方の正中ふ小く仏間と設け左右を打抜ありて圍あり。其用は庚

申待廿三夜待りて小農民寄集りて供養あり。通夜して

和州柳本傘堂の圖

心柱の上圖の如



酒宴と催を平生の農業の休息所と暴雨と凌ぐの便と尤
 是は此地に限らば諸国にも有べし是所謂亭の類あり和漢三
 才圖會に亭和名阿婆良也といふ道路舎る所と亭といふ釈名
 云亭人の停集る所也今なき自ら亭主と稱する人早下謙退
 の詞如し他の主と呼で亭主とらる失敬あり

○大和國城上郡柳本村の北の端も右小類を堂あり然まども
 是は中央小太き柱一本立ちり故に土人傘堂と号し心柱の上小額
 の如く縁と取る物を四方より囲とり土人の傳説種々ありといふ
 とも審みしに按じると往昔金口山長岳寺
 美景の寺境廣しし時の堂宇の遺跡ありん中心に柱ありと思

若くは宝塔なる古趾ありん歎

○世小靈仏の汗して善悪の兆と示しあふ夏少くは生駒山般

若窟の不動尊の汗しあふ夏少くは豫め災禍と示しあふ亦相州大

山の不動尊大少汗しあふ大地震ありて人多く死しり靈験

あつて成尊像より何きの尊といふ夏少くは汗しあふ夏あまも。不

動尊の額小水波の皺あまも六道と憂念しあふ相あまも智真阿

闍梨の孝思と感得て其病苦と代りて涙を流しあふ今衆生

の苦惱と愍みあふ汗しあふ夏少くは有るに夏あまもや播

州明石郡大山寺の薬師の靈像も国家に災ある時大少汗して

豫め告示し給ふとや但し高野山奥院の汗し地蔵の毎日己の

刻ふ必だ汗しにあふ何の故とり夏知りて。近來堺の近村をふ

廢寺の本尊頻る涙と流し夏あり予が知音の尼僧種々心配と

あつて弟子の尼僧と入り守らせり夏何と

○浪華新町の廓九軒町小櫻樹と植初し文政二年己卯の春小

して三月廿二日より太夫の道中ありて。同廿六日廿八日四月朔日等

四箇度ふ及べし其賑ひ言も尽しげ。夫より年々花の頃へ殊更

繁昌と増す。其時の花魁あひ

扇屋粧山

司

離路

小式部

名亭

壽山

瀨川

- 引舟若葉
- カノカ彦
- 早咲
- 浅妻
- 梅野
- 幾野
- 梅松
- 瀨川
- 富三
- 菊川
- 龜松
- 瀨山
- つる松
- 瀨山
- 瀨川

折屋花の戸

日 早枝

歌姫

日 幾の

千代菊

日 正木

千代花

日 金咲

花月

日 沢田

扇屋千代雀

日 瀬川

初花

日 小蝶

雛鶴

日 松山

東雲

日 中川

花頂

日 千鳥

萬

日 瀨山

錦繪

日 繁山

萬壽

日 岩

瓜生野

日 岩

西扇屋初紫

日 官城

嬉野

日 大音

唐衣

日 戸

室君

日 外山

花紫

日 梅松

粧

日 尾上

植屋大淀

日 戸

琴雀

日 せつ

櫻戸

日 女

紅藍

日 小雀

世々花

日 松江

櫻木

日 龜

以上 右のりつとも全盛の傾城なり

○江州瀬田の住人若氣の至りて身と放埒小持崩し。兩親を

差おとす家と出関東下り江戸小落着此彼小奉ス一終吉

原の廓小入あも或娼家の下男と成て勤めらるが此家の抱への花魁

心操正直あふ何某とやつらつらと。彼下男小對て生国を尋

つ且兩親ありやと問ふ。いふも兩親より存命あるを故郷小捨

おと。當地へ来りて如此くと語ら終つ花魁の云く我亦いそまよ

引く。親の爲小身と賣らる。憂川竹の勤と爲ども。年の明を待

つ。故郷へ飯りあべ。父母小仕へて孝行と尽し。念願をあふ

足下ハ親々と遠き国に捨おと。斯る吾妻小取とけく賤と廓の奉

ひしく親の無く按じ續けく忘る隙にあぶる。何卒心と改めて

疾く親達の心と安め家業と専らて孝養と竭さるべし則
 其身の爲めりと種々と説諭せしむ彼下男も心づき実辱き
 御異見のやど骨髄徹し鳴呼誤り今迄の放逸小身と持
 親の心と苦めし度數後悔せしむと花魁の諫めと悦び是より
 直小身の隙と乞て路銀の用意し急ぎ江州へ飯り兩親の氣と
 易め孝心と盡し家業と怠らざり勤め年と重給り家も栄へ妻
 子と設けく何れも暮せる内愛度兩親を見送り相續せ
 ぐ是全く吉原あり花魁の教訓を預り故なき如何も此
 此恩と謝せんと思慮せし先年吉原へ在り時彼花魁一首の歌
 と詠出し扇書て貫しと所持せし是幸いと額ふはらり。

石山寺の觀世音小奉納。花魁の息災延命と祈らるる。然る
 報恩をんうと頻て程く額小製へ大悲の宝前小納めり。然る
 彼吉原の花魁へ年来誠実の行状天恩ひあらし青雲よして
 富家の客小請出さし侍女婢下僕と召つて畿内見物小上り。
 石山寺小参詣したる小思ひをよらば我前うと認め扇の地紙
 と繪馬小作りて奉納しり。是は不審と支あを何人の斯物
 ぞと熟くと眺むる願主江州勢田何某とわらるるに是より
 瀬田小到らば尋ねし其名所と委く書とめ頻て勢田に到
 りて如此々と尋ねる直ら小分り其家小案内し主人小
 對面をらるる。豈とらん往昔傾城たりと記。吉原の花街に於て

雲錦隨筆卷之一

九

下僕らし者ありて互小無事と悦び見苦しき住居ありども。
 今夜一宿ありき。御礼も申上りと種々と饗應し。女
 房も俱小出と其えたるの御支を毎々申出し悦び居らまはし
 ども。遙小隔し吾妻の支尋奉らんも程遠く思ふは任ざん鬼や
 角月日を送り小不圖御目ふかる支偏小石山寺の大悲の導せ
 めの所ありと夫婦ありとも歡びと數恩義を謝しとんとと実や
 諫めを用ひと本心と成し者も異見を加し傾城も五常の道
 合ひ故小天道善小福し双方富貴の身と有りたる有がし
 ○榮枯浮沈の世のありはやく因縁果報の爲所とありて享
 和三亥年の夏其始浪華新町廓あり。櫻木太夫と稔し全盛の



花魁體
店と出を

左々良木

傾城^{きんぎょ}の^{りし}が薄命^{うすめい}ありと世^よ小零落^{せうじやうらく}大川の^{さんだい}三大橋^{さんだい}の^{なな}難波^{なんば}の^の南詰^{なんせつ}の^く納涼^{なすやう}の^{あじ}床^{あじ}を^あ賣^うて^て活業^{かつぎ}と^せせ^りが。其^{その}成^{なり}行^ゆ世^よ隱^{いん}ち^の誰^{たれ}の^いふ^もも^く太夫^{たふ}甘酒^{あまざけ}と^な名^なづけ^け。殊^{ことごと}更^{さら}小^{せう}繁昌^{はんじやう}の^も或^{ある}俳師^{はいし}の^く句^く小^{せう}花^{はな}の^むひ^の名^なの^{さくら}櫻木^{さくらぎ}の^い一夜^{いっや}づ^け。

公事^{こうじ}根源^{げんげん}小^{せう}曰^い一夜^{いっや}酒^{しゆ}とい^ふも^もは^はく^くま^まの^あ聖^{せい}の^く供^{くわう}も^もく^く一夜^{いっや}と^へ經^へる^る。

竹葉^{ちくえつ}の^さ酒^{しゆ}も^もは^はく^くま^まの^あ一夜^{いっや}酒^{しゆ}と^い申^{まを}す^る。一夜^{いっや}酒^{しゆ}又^{また}と^いふ^もも^もく^くは^はく^くま^まの^あ是^{これ}則^{すなは}ち^は。

甘酒^{あまざけ}の^さ支^しあり^り日本^{にっぽん}紀^き曰^いく。應^{おう}神^{しん}天皇^{てんかう}十九^{じゅう}年^{ねん}冬^{ふゆ}十^{じゅう}月^{げつ}戊^{つちの}戌^{いぬ}朔^{しやく}吉^{きち}野宮^{ののみや}に^き幸^{ゆき}に^し時^{とき}小^{せう}国^{くに}栖^す人^{ひと}朝^{あさ}に^き来^きる^る之^の又^{また}因^よて^て醴酒^{れいしゆ}と^いて^て天^{てん}白^{はく}王^{おう}り^り献^{けん}と^い云^い々^々。往^い古^こより^{より}祭酒^{さいしゆ}の^い多^{おほ}く^く醴^{れい}と^い用^{もち}也^{なり}且^{かつ}每^{ごと}六^む月^{げつ}朔^{しやく}日^{にち}天^{てん}子^し醴酒^{れいしゆ}と^い献^{けん}る^る支^しあり^り。

幾度^{いくた}も^も絶^たど^ど備^ひん^ん水^{みづ}無^な月^{げつ}の^のの^のみ^みも^も君^{きみ}が^がま^まふ^ふ前^{まへ}大^{だい}納^{なつ}言^{ごん}浪華^{なみの}の^の良^{りやう}賤^{せん}と^と始^{はじめ}。近^{ちか}郷^{きやう}の家^{いへ}每^{ごと}九^く月^{げつ}生^{なま}土^{つち}の^の神^{かみ}支^しの^の醴^{れい}と^と醸^かく^く神^{かみ}小^{せう}供^{くわう}。来^き客^{きやく}も^も勸^{すす}め^め家^{いへ}内^{うち}の^の上^{かみ}下^{しも}を^を祝^{いわ}ひ^ひく^く飲^のと^と風^{かぜ}と^と故^ゆ祭^{まつり}俗^{しやく}小^{せう}醴^{れい}祭^{まつり}と^と又^{また}浪華^{なみの}へ^へ渡^{わた}海^{うみ}の^の船^{ふね}船^{ふね}極^{ごく}月^{げつ}湊^{みなと}小^{せう}泊^{とまり}と^と越^こ年^{ねん}も^も者^{もの}多^{おほ}く^く醴^{れい}と^と造^{つく}て^て歳^{とし}首^{くび}小^{せう}船^{ふね}玉^{たま}神^{かみ}へ^へ供^{くわう}と^とく^くと^と祭^{まつり}と^と祭^{まつり}と^と風^{かぜ}と^とは^は一夜^{いっや}酒^{しゆ}と^と用^{もち}て^て神^{かみ}小^{せう}供^{くわう}と^とる^る支^しの^の例^{れい}久^く遠^{とほ}ある^る支^しの^の支^しあり^り。

○早苗^{さなほ}植^うつけ^けと^とより^{より}六^む十^{じゅう}四^し日^{にち}あり^りて^て米^{こめ}と^とある^ると^と八^や八^{はち}日^{にち}米^{こめ}と^と号^{ごう}に^に江^{かう}州^{しゅう}高^{かう}嶋^{じま}郡^{ぐん}より^{より}大^{だい}津^つの^の問^{もん}屋^やへ^へ出^いる^る。問^{もん}屋^やより^{より}大^{だい}内^{ない}の^の味^{あじ}噌^{そう}調^{てう}進^{しん}所^{しよ}出^い水^{みづ}西^{せい}洞^{どう}へ^へと^と連^つを^を當^{あた}家^{いへ}小^{せう}於^おて^て麴^{こう}小^{せう}製^{せい}衣^い。禁^{きん}裏^りへ^へ献^{けん}上^{じやう}と^と則^{すなは}ち^は院^{いん}東^{とう}へ^へ入^いる^る。へ^へと^と連^つを^を當^{あた}家^{いへ}小^{せう}於^おて^て麴^{こう}小^{せう}製^{せい}衣^い。禁^{きん}裏^りへ^へ献^{けん}上^{じやう}と^と則^{すなは}ち^は禁^{きん}中^{ちゆう}あり^り甘^{あま}酒^{しゆ}小^{せう}製^{せい}ら^らせ^せあ^あひ^ひ先^ま人^{ひと}磨^まへ^へ供^{くわう}と^とく^くと^と介^{かい}後^ご主^{しゆ}上^{じやう}あり^り。

雲錦隨筆卷之一

召上させめふとぞ

○伊勢の御祭祀の例年九月ありて外宮の十六日内宮の十七日し。
 禁裡より奉幣の御勅使御参向あり是と例幣使と称は是の
 當年の早稲と禁庭より兩宮へ奉らせめふ新嘗の御祭故小
 早稲米の御祭ともつて一年友人伊藤某此御祭祀小泰詣し。
 勢州一身田ありて昼飯の支度とて茶店小入る火ぐあくと食用
 の物ありとて断る支四五軒も及びぬる幾ど困らまうが稍り
 火ぐせざる家ありとて是を食支と調へ其火ぐの子細と問ふ當
 十四日小火ぐとて平日の火と新ふ更め家内小塩とうち清
 淨み。飯と焚て甘酒と醸り十六日小太神は供ト奉る尤宮川が
 向へ越べ別と火と正くすると嚴重ありて通用の清酒と神り
 供ざる事とぞ。彼京師の古風の所ありても甘酒と神供と
 するもの。浪花の九月祭は甘酒と醸つて神小供ざるい全く古
 風の存する所なりと感心とす。

○摂津国住吉神社の新嘗祭は十一月丑の日より始まる潔齋一
 七ケ日なり。此神事を侍者御前俗よかりの小於て神官甘酒を
 醸しと大神小奉る。二月祈年穀祭と當新嘗祭とて天下安泰國
 家静謐五穀成就の大祭ありとぞ。

雲錦隨筆卷之一終

雲錦隨筆卷之一

つて了

雲錦隨筆卷之二

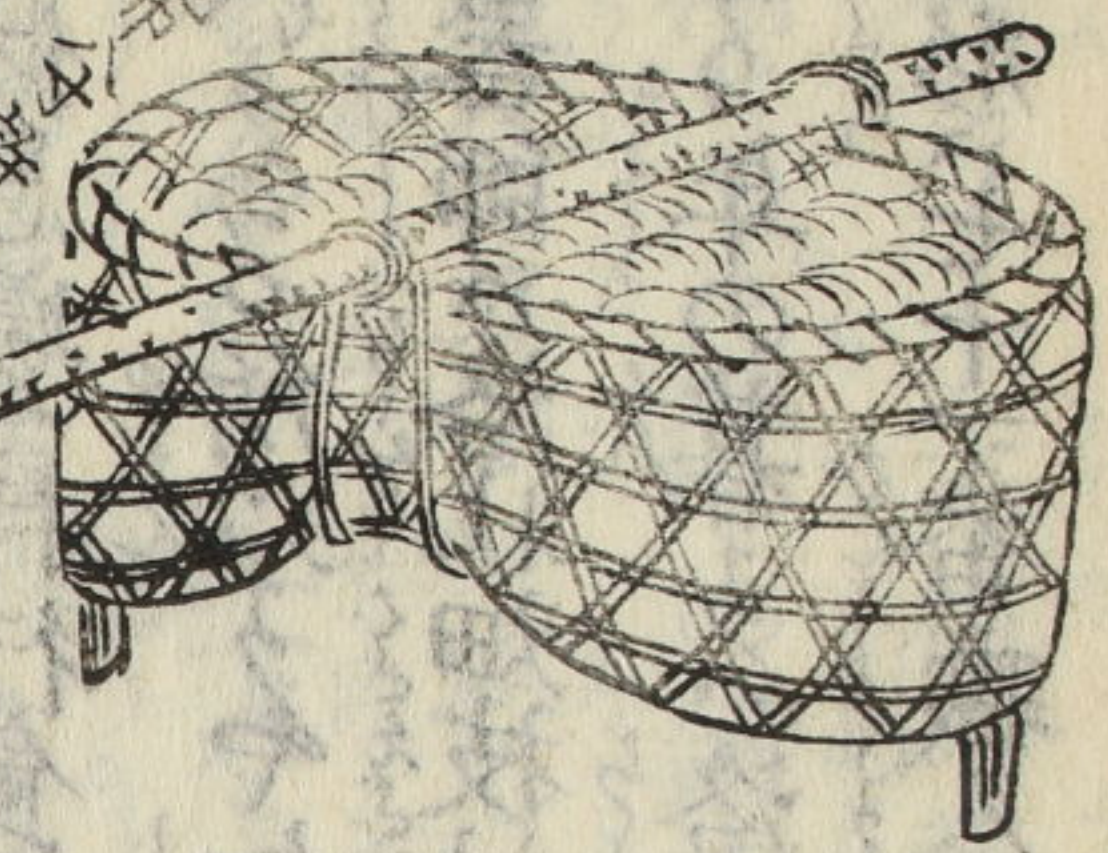
浪華 曉晴翁著

○大内の御能小出勤と願ふを初参と号し其願書の文言の赴意
 の家元四座の者をして御座あり候と申上る者あり其師匠を
 者奥印して差上る御用済ありて御能毎小出勤のせは銀六
 下さる御樂屋武家玄関より奥の長板間の半小疊としき
 幕と打わりて幕の外に京兆尹御通行也飯の朝昼夕三度下され間
 赤飯紙つ川端御菓子檜葉焼の大饅頭小判二一条虎屋暮前より御酒と
 下され泰内刃の刻御用御上りの折々蒼木とくゆじあめ。夜小入の御燭
 と藏人持出る枕折々蠟燭藏人の帝より賜る所の御衣と着せや也

あん ちりぬ くらうご ちりぬい ちりぬい ちりぬい ちりぬい
按どろ小六位の藏人四人重代の諸大夫の中器量ある人入り
補どろ地下の諸大夫多く之を以て先途とん五位以後とん共
藏人の五位を以て規模とする故也藏人の老少小依ど當泰の
次弟を以て上下を定む凡六位の藏人禁中細々公事朝夕の御膳
等の支を奉行を之と日下臈と称を四人日と分て奉行せしむる
故也六位の職事も亦禁色を聽さる極臈に至て麴塵の袍を
着て是御服と申下もの儀也晴の時下臈とい共之を着はと云々
○例歳極月十三日の禁中の御煤取し是を御煤とい此日御
祝して末々の者小至まど熱壁といけと下る御臺所前ある
庭上小鐵輪円と居大金とる白豆腐とる白味噌の摺て美

たまうと上よりうめりて是を熱うべと号は豆腐とて
末々の者御役人より切手と下る此切手と以て土器師
出勤の場所へ行て是を渡を土器師の切手と受取土器一枚と渡は
此土器を以て豆腐方へ行て差出を豆腐方土器小豆腐と入渡も
夫より味噌方小行て差出を味噌方味噌とつけて渡を是と貴て
銘々休息場持行食を御上より青竹の串とに田樂ありと口上らと
と云いある所以や知らざ最古風ある御事ども
土器師の洛北畑枝村小住一皆太夫名と号る御用の御土器師
たり年の暮る洛中に出初春の祝の土器を賣ある其荷箇
の形七十一番職人尽歌合小圖一より小違とん頗る古雅小覚ゆ

此長廿二尺若



畑枝村

土器荷之圖

但一寸法又

定例なり

其人々の好

意をとり

七十二番職人及歌合



かきつけはらり

あつらひも

やうに

かきつけはらり

因小云煤拂小豆腐と食むるごとく古と例もや南都春日若宮

の煤拂例年十二月廿二日小若宮の前ある溝小木葉と掻集めく豆腐を

串小に塩焼あり社人神酒と配分一是と看とて宴に此

豆腐と名づけく春日田樂とり當日御供所の大黒の像と開

扉あり里人群泰してあまを拜と

○大和国添上郡標本村小治道山柄本寺といへる寺院あり當寺

に人磨の木像あり長九一尺五寸余頗る古物なり沙門慶範自

筆の柄本像緑色勸進状あり云々

沙門慶範敬白

殊小十方檀那の御助成とて大和国添上郡治道の柄本寺人丸の堂を修造
一並ひは彼木像とありての緑色せんとも勸進の状

夫柳本人丸の歌林の聖あり蓋文武天皇の御宇君臣合躰の
 徳と顕へざるに由りて御書所の預り紀貫之が古今假名の序り
 られを載り所謂龍田川の紅葉と御門御目小錦と見ゆ
 吉野山の櫻とい人丸が心小雲とあん見たる奇哉や風雅頌の
 ころりねと道ありと宗因喩のありと所理と顕るる夏りの万
 葉集に入らんる歌その教とあはれ終ふ正三位の高と位小進め
 上られり入唐の夏拾遺集小見たり天とあや雁の使の言の
 葉と残り帰泉のころい石見国とつるいも山の岩根におる我身
 と悲めり余いあまども人丸の墓所柿本の明神と称る播磨国明石
 の浦小有とるや是と思へ朝霧小嶋とせ金玉のひびきと末世り

傳んが事好む者の業うや余まども清輔朝臣の詠あり寂
 蓮法師が歌あり昨日夕の夏あはれ抑大和国治道の
 杜小丸の堂ある是と実の舊跡ともいべき如何といふ唐土小
 の詞小奈良の都小あはれと中む夏と願ひ臨終の時の歌
 小あはれと妹が待らんと詠り若故郷小非ぞ其うと無へ何
 にくる草の跡と残りひや人丸の影中頃修理大夫顯季郷の
 供養とんと藤原敦光小讚の詞あはれとより世間と弘まる
 今治道の堂小彼影あり星霜重つと草堂敗壞と竹雨露小
 犯されて木像の綵色分明あはれ是ふとと十方の檀那と勧め
 諸人の助縁とより再興と致さんとと欲ふ一紙とも輕ととと

半錢とて此ありとどん微塵も重ぬまは山とけり小水も積ば
 海とあり故あり敷寫の道小心と掛ん筆へ目の前にその縁をむ
 ちび御法の岸小到人と願ふ者も耳の外小聞夏あられ大和哥
 日本の隋羅尼ありと古より是と言傳り是ふよりて和光同
 塵の神明も此道と捨ありて入重玄門の薩埵も其情を残り
 ありと若諸人の奉加ふよりて修造功ありて楢の葉の名ふお
 古寺も二び新とまり緑色ふととえく。柿本の聖の道も昔の
 面影ふ立久くとりみ夏あうり。勸進の赴き大概くれば

文明八年卯月日

右柿本寺は東の方小人磨墳あり正面小歌塚と書に
此二字は山村四照
 寺尼宮の樹葉に

柿本講式曰 壬生二位藤原
 家隆卿撰

青陽の春花は花小無常の雲二び
 覆ひ黄壤の秋の露小別離の嵐
 長く吹て大和国添上郡石上寺の辺
 治道の森の中に一の草堂と建て爰
 柿本と葬ん身竜門のま埋と雖も
 詞の鳳闕の室とあり可惜可悲云
藤原清輔朝臣家集
 中興のふいそのうゝむん
 大和国石上柿本寺とり所の
 前小人磨の塚ありと聞て卒

柿本人磨之像

長一尺五寸余



都婆小柿本人丸の塚とありつとて傍小此哥とあり書付る

玉葉 世を経くも逢ぐりる契を苔の下も朽とぐりる

鴨長明無名抄小曰人丸の墓大和国小あり初瀬へ泰る道あり人

丸塚といふと尋る小い知る人は彼所より歌塚といふある云々

按ずる人丸石見国に於て死亡せしむるも其屍と和州小移る乎

其例多しといふ近世の釋顯昭の説小曰人丸石見より終らほ夏分

明小諸書小見へり然れども柿本寺歌墳の夏清輔とて小筆

記とて後世の附會小有べ人丸石見より没とて遺

骸と大和へり葬りありといふ又此歌塚といふ名は人丸の哥小

秀らほと給るるありと彼清輔が卒都婆と立て和哥を

書付置はしと見て里人等の言ありせり名ありしと雅嘉の説也

右哥塚碑陰記山城国天王山佛國禪寺嗣祖沙門百拙元養撰并書

享保龍集壬子年春三月十八日柿本寺僧森宗範等立とあり碑文略之

○摂州豊嶋郡池田の郷小五月山といふあり此山腹小大廣寺と号す

曹洞派の禪刹あり往昔池田筑後守克正の草創と此人の法号と大廣

寺玉堂金公禪定門といふ文明十四年十月廿四日小卒に墓碑あり

其文曰 清曉朝天眩色微 新雲先動袞龍衣

千官拜舞金巒殿 携得香烟滿袖歸

昔此山中小池あり潮の満干ありと海水の如し然るに當寺

創建の時池と埋り其舊蹟と遺りて山号と鹽増山といふ又此山頂小

望海亭と稱する樓あり。最眺望絶景あり。後年廢して其名のみ存り。余有と邑人山川氏其名勝の趾と失くんと惜む。往昔の記と写し。石を勒して近き天保の末年山頂小建れり。其碑面云

望海亭記

攝津池田村有寺曰大廣前總持祥山禪師主之師目視雲霄機吞佛祖曹洞下老尊宿也論其俗譜則日本国管領畠山源君之葭葦也可謂華矣池田筑後守藤元正夙欽師風相攸創基此寺是也負山瀕海殿宇翼如而置亭山頂扁曰望海先是余居等持官寺師以某人爲介求作亭記夫望海樓者白傳於

唐東坡於宋惟肖於本朝文以振焉詩以張焉千古佳話也余未嘗身歷而目擊之縱雖髣髴其萬一而小杜賦阿房也可笑隨求隨辭有年于茲矣庚子之夏師適以事入洛一日訪余小補斗室話次又及亭記求而不已於是就審亭之所以爲望海也亭面於南南乃滄海也而天王之浮圖層出雲間任吉之松風鼓動波底跨東南者三州曰紀曰泉曰河襟帶於斯咽喉於斯吳綾蜀錦鹽鐵銜艦相逐者商賈往來也官租軍給粟麥連播不絕者行使運漕也紅粧翠盖盃盤狼藉青箬綠簑煙雨勃窣大守張水嬉也

漁翁下釣瀨也野老謳歌而水田漠漠市人言語而
城府潭潭攝人之樂其樂也至若沙鷗翔兮岸柳暗
宿雁驚兮渚蓮飛夜潮吹月銀山鐵壁粉碎乎前海
市映雪珠宮貝闕涌現乎上亭上四時也亭上朝暮
也翫之欄檻上接之社席間盖偉觀也余聞師所說
不移寸步優遊此亭紅塵為萬頃滄波耶滄波為十
丈紅塵邪不得而知耳余有一說洞上有寂上乘禪
名曰寶鏡三昧嗚呼水天無際一波不起滄海豈非
一面寶鏡乎此亭豈非一箇鏡臺乎海中所有色像
豈非胡來胡現漢來漢現乎師入此三昧應機接物
遠取曹山洞水近取永平峨山五位功勳三種滌漏
皆從鏡中流出而盖天盖地使四來學者弄此光影
同證三昧不亦大乎言未既師起歛衽曰亭記成矣
文明十二年六月吉旦書前等持橫川叟景三
望海亭廢既久矣而記亦失其原本星霜再移則
名勝無復由傳焉故據舊圖求故趾建石勒記以
要不朽云

以尔志倍迺美耶麻乃以保迺安止乎之毛
知與万泥美与登能古寸伊志布三

天保十二年辛丑六月

邑人 山川正宣誌

大坂 吳 策 書

○世俗腰小佩セゾクウて打鼓ウチカと鞞鼓カウカといふ。鞞鼓カウカの腰小帶ウサる物モノあり。腰ウサり佩カウカて撃ウチの腰鼓ウサカといふ和名ワナ久礼豆々美クニタマと云イハ既ス小能狂言コノウキヤンも腰ウサ鼓カウカと以モて鞞鼓カウカとよぶ。然シカまシ古コく誤アヤりスるト見ミえス鞞鼓カウカの臺イハありテ下シ置ケ二ニ桴ウラと以モてシと撃ウチるト腰鼓ウサカの腰小佩ウサて二ニの桴ウラと以モてシと撃ウチ者モノ和名抄ワナシラ小腰鼓コウサカ今イマ吳樂ウキガク小用コヨウゆる所トコロの是也コトと云々ト程小吳鼓コウキカといふ成ナべ。事物紀源モノトコトノキリ云イハ鞞鼓カウカの本

胡戎の樂器コウジウノガクキ鞞カウカ乃ナラ胡戎コウジウの號ナメ故コトふ之ノと名ナく善トク

とんと撃ウチ。又唐玄宗皇帝テウセンツウノミカド有時アルトキ

春寒ハルサムイゆキ花ハナのハ遅オソ。

玄宗樓テウセンロウ小登コトノボリつク鞞鼓カウカ

とろと而シと花ハナと

催メと百花一時ヒャクハナイツク

感カンとと閑ヒラくク之ノと鞞カウカ

鼓樓カウカロウとといハ云々ト。又腰ウサ

鼓カウカの桴ウラをテ手先テノサキあとく打ウチるト。

古樂コガクのハ置ケるハ首カビにテ手テをテ撃ウチるト。次ツギは摸モは

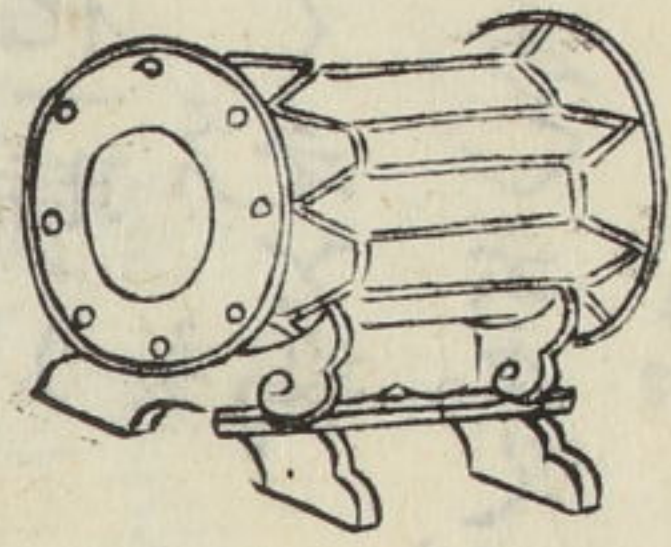


○古樂之圖摸写

○鞞鼓

和漢三才圖會樂器の部は出と所の圖

鞞こづ鼓こづ



古樂の圖こづ

出る腰鼓の圖こづ



措鼓 和名 須利都々美此亦古の樂器なり

○大和国信貴山朝護国孫子寺の什物小

鼓の筒あり惣て牡丹唐草

の模様彩色あり尤古

代の物と見へく彩色

數脱り筒の左右

鑲あり按じらふ是

るん腰鼓の筒あり

乎古樂の圖の首ふく多

くろと見と思ひ合せふ次は圖を

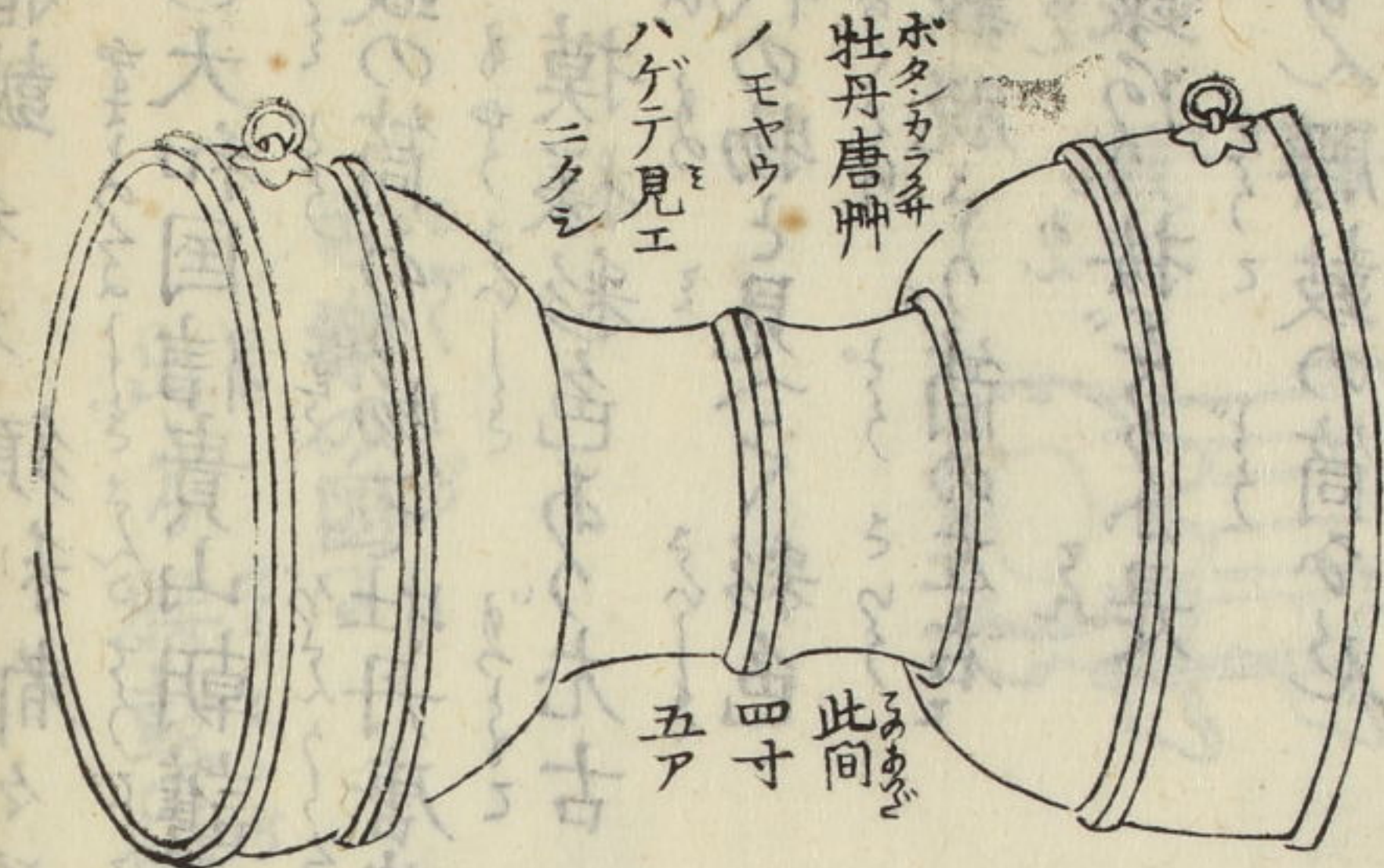
○古樂の圖中ふ出

措鼓之圖



鑲の作り付めて動する座六葉

徑九寸八分許



牡丹唐冊

ハゲテ見え

ニクシ

此間

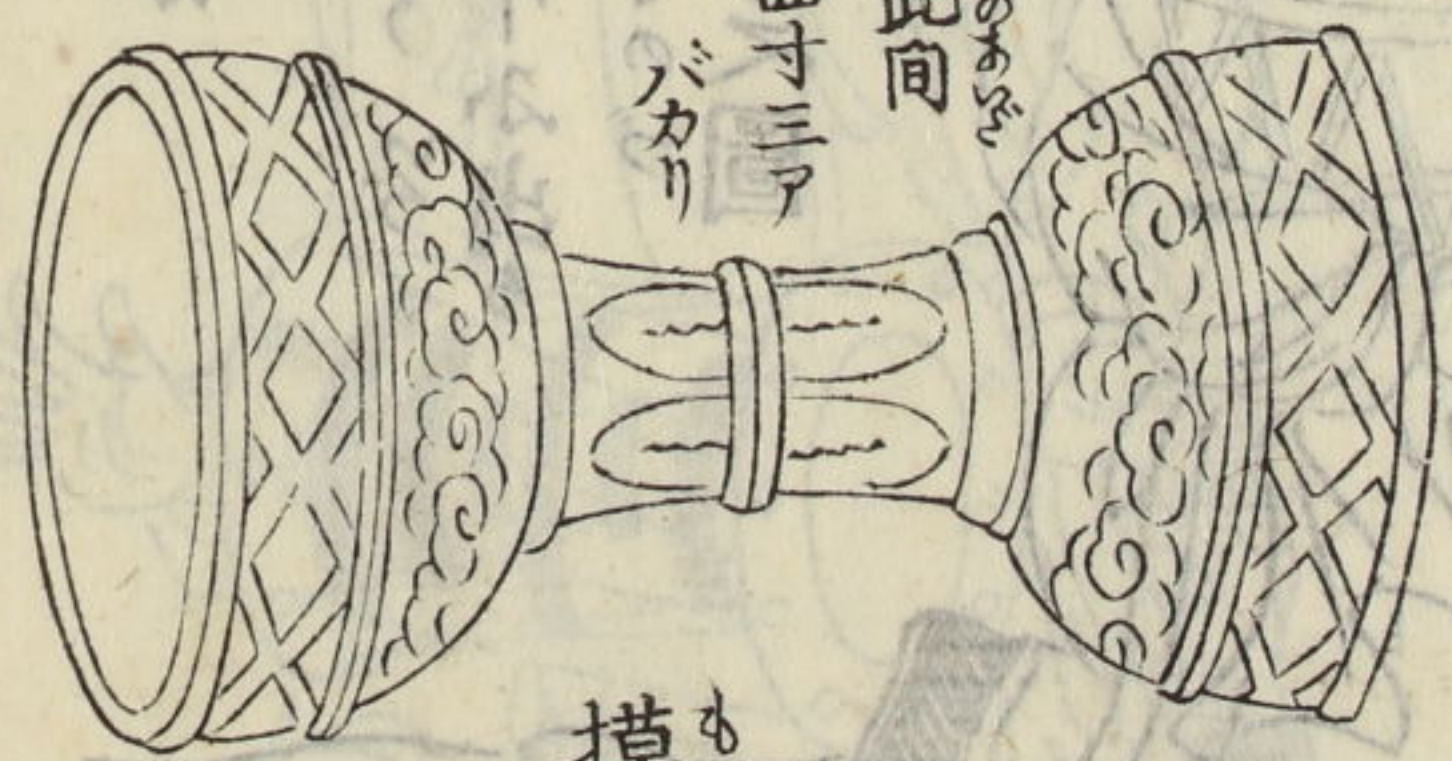
四寸

五ア

惣長サ 一尺四寸余

按どろふ是の所謂腰鼓の筈ある

又一ツハ少く小くして鑲を按どろふ是ハ羯鼓の筒ある



此間

四寸三ア

バカリ

總長 一尺二寸余

模様 牡丹唐草 彩色

徑六寸

○近江国伊香郡餘呉の庄大箕山菅山寺といへる佛刹あり。當院は菅公御直作の御像あり。世小有るは尊影。其由来と尋ぬ。小菅公の御出生。此余呉の庄湖水の辺。父は其地の首長。とて桐島大夫といふ母。天女あり。とて。其御子あり。天稟雅麗。して尋常の人小異あり。一時當山の信寂坊の尊元和尚桐島大夫の家に入。童子に壇度と授く。時小童子尊元を見。とて。其睦とて。恰も舊識の如。既。和尚山。飯る童子。後。来。つ。と。數。の。地。小。止。り。修。学。に。性。智。敏。聡。あ。り。と。更。に。八。耳。と。等。十一。歳。の。時。賦。一。と。曰。月。耀。如。晴。雪。梅。花。似。照。星。可。憐。金。鏡。轉。庭。上。玉。芳。馨。と。小。菅。原。是。善。卿。桐。島。の。家。小。来。と。と。此。童。子。と。見。て。其。九。あ。ら。と。知。り。則。ち。請。て。養。子。と。し。め。介。後。

是善卿余具の湖小遊びぬく詠トあふ和歌小曰余具の海とほ
 馴多むし女子が天の羽衣なりけむやま余後人王五十九代宇多矣
 皇御宇寛平元年菅公中興の修造と加あふ菅神の御像の自ら彫
 刻しあふ所なりて當寺小納め者し菅公常小寄宿の坊舎信寂坊と
 号し尤當寺其始竜頭山大箕寺と称しと菅公改めく大箕山菅山
 寺と号し寺記 右の由来の世小流布の説と異ありと以てこれに出せ
 ○美濃国多藝郡養老の滝の麓小露村といふ所あり此村小本慶寺
 といふ一向宗の寺あり此坊主幼少あり父小離と無智強悪よく平日は終
 生と好て止ざりぬれ諸人これと制して種々と諫めぬれも我等が宗は
 終生が慈悲と總て畜類の佛躰と請ふ人間小食うとして助らんと願ふ

者なりといひく少も用ひざ十九歳まど猶終生せり余程小寛
 永二十年十月十三日の夜戌刻分小彼寺に檀家三三人集り家内の男女
 と四面八方の説話とけ焼火にありて居りしが家の破風ゆりくと
 鳴といひく家内光りぬと大の入道二人来りて當寺の悪坊主の西の
 腋小座に人皆肝とけり逃退小則り二人の大入道坊主の西乃手と引立破
 風より出て町の上と飛行し本慶寺坊主の徒者と連て行を再び婆
 婆にへまぐらと高声小三度まど呼りて何地へ連行せん定めく
 生身の地獄小墮しあはしと因果物語小見へり劉宋の文帝の好んで
 鶏の卵と煮て食しあふ或時鼎の中より観音の宝号と唱へて
 頻り小悲を傷む声あり依て帝小奏せり小人とて見きりぬあは

偽いつはり小こあはれは是こゝよりこゝ長くながく鶏卵けいらんと食くることを制とがりぬ又また唐たうの
 文宗ぶんそうの蛤蜊かきと好このむこと常つね小こ御膳ごぜん小こ調進てうじんをめめめ故ゆゑ小こ東南とうなんの海うみ辺べ
 より日々ひひ運うぶこと民たみの辛くるしみ苦く言ことも尽つくしげ或ある時とき大おほきし蛤蜊かきと破やぶれしたり
 閑ひまがら終つひ小こ打うちく能よ々よ見みまら中ちゆう小こ觀音くわんおんの灵れい像ざうありし帝てい大たいり
 愕おどろきめの梅うめ檀だん香かう木ぼくと以もつては盒はこと作つくりし金かねをか飾かりし厚あつくし信しん小こ蛤蜊かき
 と断つめし天下てんかの寺院じやういん小こ勅ちやくしては皆みな觀音くわんおんの佛ぶつ像ざうと安あん置ちをめめし
 又また南なん天てん竺ぢく執しやく師し子し国こくの南なん海かいの中ちゆう小こ一いつ嶋じまありしくは五ご百ひやく余よ家けの住ぢゆう處ちよありし此
 民たみ更さら小こ佛ぶつ法ぽうの名字なづなとも知しらぬ常つね小こ好このんでは魚うしよとら食くとら或ある時とき
 救すく千せんの大たい魚ぎよ海かいの渚しよ小こ集あつりし一いつ々つ人ひとの語ことと作つくては南なん無む阿あ弥あ陀だ仏ぶつと唱なふこと諸しよ人にん
 其その意いの悟ごらぬもも学まなびし習なひし同おなくは南なん无む阿あ弥あ陀だ仏ぶつと唱なふこともも諸しよ人にん其

佛ぶつ名なと聞きて悦よろこぶこと程ほど小こ只ただ管くだに念ねん仏ぶつと唱なふこと魚うしよと捕とら喰くひし後のち小こ佛ぶつ
 名なと多おほくは唱なへし者ものハ魚うしよも多おほくとれ其その味あじハ美うまくは唱なふこと者ものの捕とらること
 魚うしよハ少すくくは其その味あじ辛からくは苦くくは依よりし諸しよ人にん勤こゝろめし多おほくは唱なふこと中ちゆう小こ仏ぶつ名なと
 多おほくは唱なへし人ひと死ししては浄じやう土ど小こ往かう生じやう。三さん月げつののち後のち小こ紫し雲うん小こ乘じやう小こ来らいつて
 諸しよ人にん小こ告こぐこと曰いくは我われハ是こゝ魚うしよと捕とらること者ものありし今いまハ極ごく樂らく世せ界かいに往かう生じやうせしること
 阿あ弥あ陀だ如にょ來らい忝とんくは大たい魚ぎよの身みと現あらわす我われ等らと濟さい度どハあること余あま有あること實まこと
 の魚うしよハ非あやまらしき變へん化げの魚うしよハ若ごと疑ぎハ其その魚うしよの骨ほねと捨すてること所ところと見みよし夫おのれ
 切き無な常じやう速すみ小こ惡あくと止とどめし善ぜんと修しゆ。浄じやう土ど小こ往かう生じやうと種しゆ々つ説せつ法ぽうと去さ
 ぬ諸しよ人にん驚おどろきし捨すてること骨ほねと見みること悉しつくは蓮れん華げハあること皆みな忽たちちに殺ころ生じやう
 を止とどめし念ねん仏ぶつ三さん昧まいと修しゆ。浄じやう土ど小こ往かう生じやうとらりし佛ぶつ楞らう嚴げん涅ねつ槃ぱんに於おて

肉食と断じ戒めあふ介前小聲聞の人小三種の淨肉と免しあふ皆
寔化の肉と云り。さん菩薩戒の初頓小肉食戒と製して肉と食す
者の大慈悲の佛性種子と断と説く。阿弥陀仏の寔化の肉と云は蓮
華あるも理なり

○士農工商より小身上と稼ぐ者ハ身一養生とて長命と本とて
短命とて何程の功もなき昔道三といへる名医養生ハ有るものと松虫
と七年飼わざと人小見とれとて又人の無事ある時と悦び一生
の浮沉寔小従いつつを知らざ難儀小及ぶ是世界の常なり

○浪花堂嶋弥左門町。医師杉本一齋翁ハ去ぬる天保十二年辛丑百
七十七歳あり至く壯健し友人と談話の形勢頗る元氣あり。最記臆

強く眼齒ともいよく手足とも達者よく日々医療り出る小常人の六

十歳ぐゝののじ。備前国船坂の産のより名と義玄といふ其妻四十

歳藤江といふ娘辰十七歳男子三藏十五歳義玄翁正徳五年乙

未七月十五日の誕生といふ或人の携へたる扇小此翁の手跡と見る小

吾是醉中翁と書り書風筆勢更小老筆といふ見えん去ぬる

天保十一年子の春。公へ召出さる御扶持と賜りし聞ゆ

○奥州白石近在の農夫段平といへる老人文政十二年己丑の春六百

七十二歳あり。尼ヶ崎廣徳寺といへる禪刹の俗縁の由りて彼寺に

暫く滞留し。且京摂の名所舊跡と見物とて浪花に來り博勞

町二丁目大喜といへる旅舎に止宿するは傳聞り予直小面會せんが事實

詳ならず

○日野後一位資枝卿前權大納言の御哥の御門人小地下の官人、壯健ある老人あり。御前小罷出、くわくわくの御物語の上より、老人のつらも壯健と仰あはれ、老人の有、くわくわく若冠の頃より、當年まぐ未だ服菜仕、夏無之、申上る、卿の完介とて、夫で、名歌の詠、咄、答と宣ひ、老人の前、無病、誇り、と、數耻入りと也。

○近衛院御宇仁平三年四月、京洛東三條の森の方より、黒雲一村立、来て、御殿の上、覆へ、必、帝劫をせ、め、い、たり、頼政鳴絃の術を以て、其怪鳥を退治、御感と蒙り、より、平家物語、見、さ、り、此東三條乃杜の古跡と、く、下岡寄南の端西一町許、田圃の中、一堆の丘あり、と、俗、

鶴塚といふ、又、其怪鳥と射落、地、今、千本屋敷京兆尹の内、夜池と称する、所、往古、御池の跡、と、其、辺、小三尺余の石あり、と、を、鶴石といふ、石垣と、以、く、周廻と、囲、ふ、天正十五年、豊臣秀吉公、聚樂の城と、築、こ、め、ふ、其、頃、中川修理大夫、清秀の屋敷の傍、あり、と、も、鶴石、小障、ま、ば、必、で、崇、り、は、し、り、く、其、地、と、易、り、更、あ、り、と、今、小遺り、と、是、の、大、内裏の古跡、と、い、ふ、又、此怪鳥、正、く、鶴、と、い、ふ、非、ど、啼、音、鶴、小、彷彿、と、い、ふ、倭名抄、小唐韻、と、載、て、云、鶴、の、性、鳥、也、按、じ、る、よ、俗、或、は、鶴、の、字、と、用、ゆ、此鳥、昼伏、夜出、故、小然、焉、と、云、々、和漢三才圖會の按、小、云、今、世、小、鶴、と、称、する、もの、性、鳥、非、ど、洛東、及、び、處、々、の、深山、小、多、く、と、れ、あり、大、鳩、の、如、く、黄赤色、黒、彫、鳩、小、似、く、昼伏、夜出、と、木、の、抄、小、啖、其、背、上、

皇朝御記卷之二

黒く下黄く鳴く。後竅るれ小應ど聲休戯と曰が如し。脚黄赤色なり。伊藤氏の云一年山城醍醐の山中に見馴る鳥の降居しと拾ひ者ありと種々と評議や。何とも分明あるは何事も珍き鳥あれはとて醍醐の御殿へ献覧入るまは是れ鶴ありや見究あらく。画師岸雅樂助小命にて写させられぬ。其形いづれりや知らんぞ。

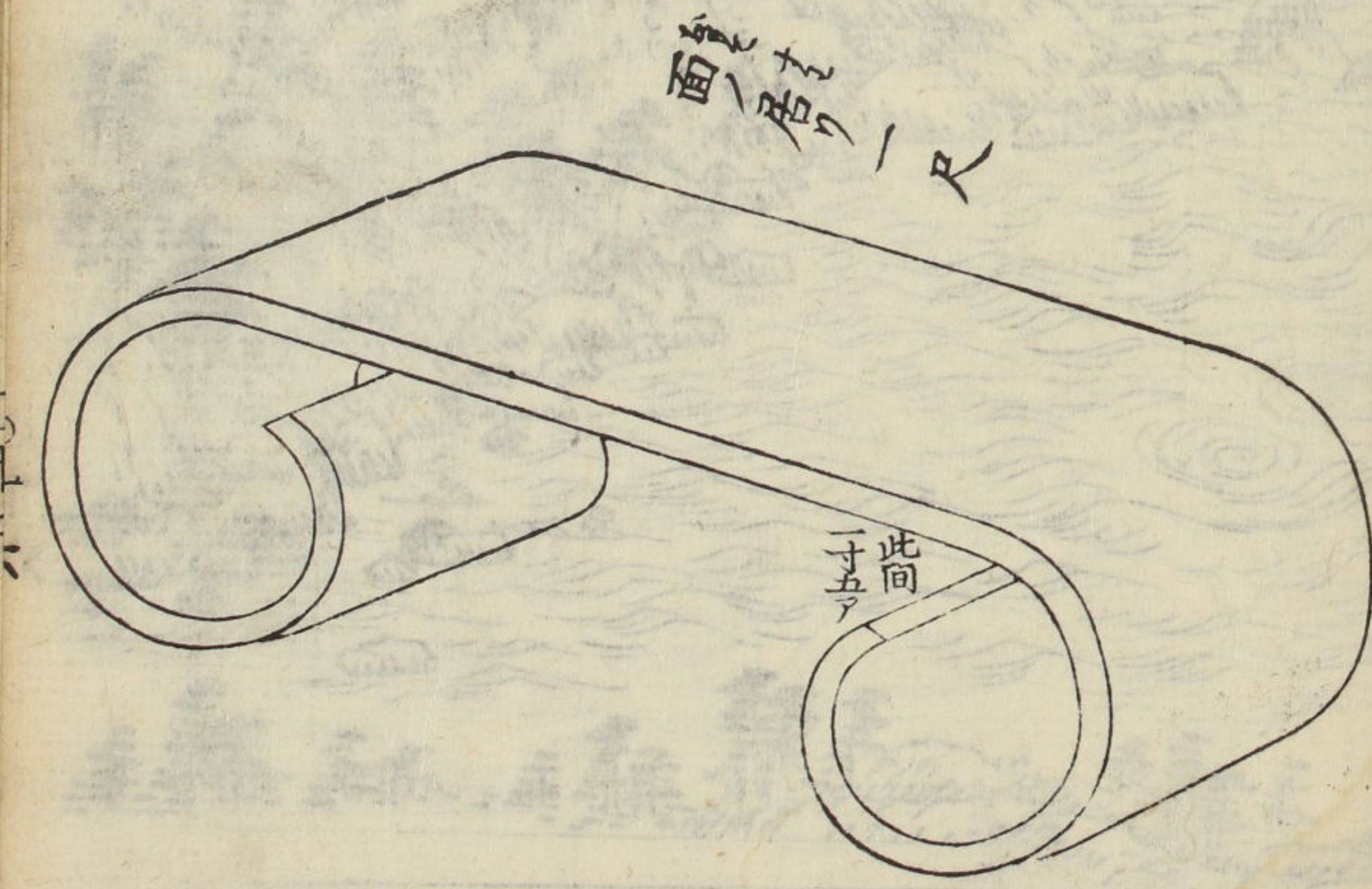
〇洛北市原の普陀洛寺 俗小町寺と云ふ 小野小町の巻絹の文臺といふ有木山桐と以て作りたり。尤生地みく甚古く蠹入り。其余小町所持の硯あり。庭小野小町四位の少將の墓あり。當寺へ往昔清原の深養父の幽棲あり。遺跡あり。舊地は是より良の方にて堂の谷と云ふ。後白河上皇大原の女院を訪ひぬ。此所を通り普陀洛寺は御幸

の夏わり平家物語小見えり

〇巻絹文臺之圖

高サ曲尺 五寸二分
板幅九寸
横胴長サ一尺八寸五分

今世小花臺なる
作りしを見ら夏あき
尤寸法違へどもあまり
准りく作ふりのなるべし

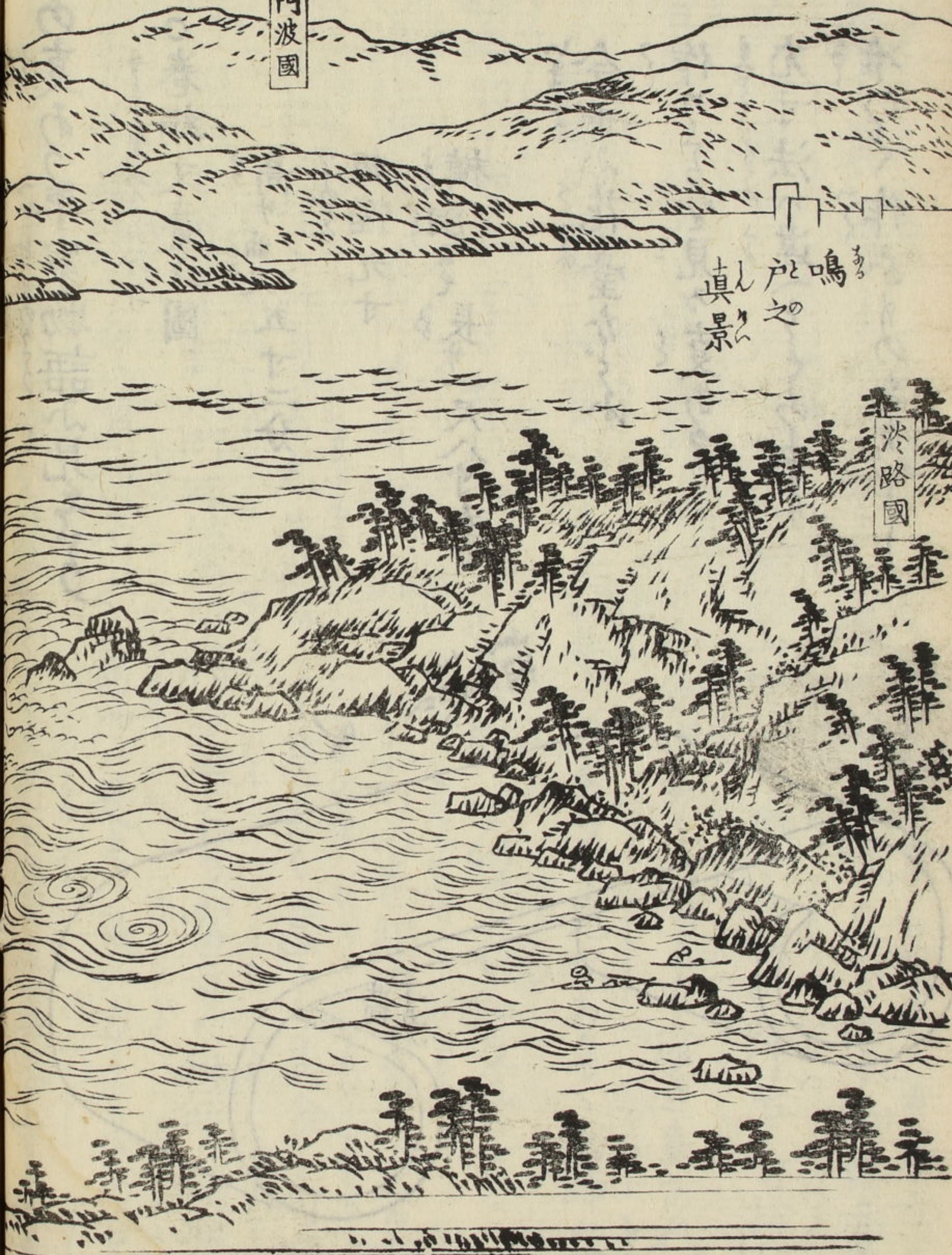


雲錦隨筆卷之二

雲錦道在卷之三



阿波國



鳴戸之真景

淡路國

雲錦道在卷之三

〇十六

わりのうらと

あいのまよひのいひごう

あつちのまよひごう

○阿波鳴戸とり合阿波国板東郡の端と淡路国三原郡牟岐鳴戸と双方相迫りく海と夾む故小水最深く淵の如く盤渦波濤高鳴戸通船容易くは所謂迫門に常小鳴と以て鳴門といふ其間遠ら鳴戸らば中小銚子口摺落し裸島中瀬木の難所あり船過つ時渦小巻鳴戸まきく海底小沈む夏間多し故又往返と禁せし然まども又潮鳴戸満る時海上平ゆと穩し淡路の海人小舟小乗て和布と採る鳴戸夏常ゆと恐る夏たり大船鳴戸沈むと再び浮むをいとも漁船鳴戸小舟の渦巻あまを沈とらども又頓と浮上ると故心得る海人の鳴戸既と渦小巻るを退る夏と得る時舟梁と取つと繩を以て自ら鳴戸我體を搦つと息と詰と成す随ふ一旦海底ふちつと頓て自然鳴戸

浮上ると待と道まゆ飯るとりる淡路の福良の浦小老人の海人

りく云く我若とさう鳴門の渦小まられ海底小沈む夏既り三

回小及ぶと然まども各道まきく今に壮健と物語る実心得難

を避るの術も有のぞ因云和布の当地の名産あり鳴門和布と

り是と採る灰小模し干乾と灰干の和布と号に幾許の年と重共

湿るとりく用ゆる時熱湯とかくま忽ち和ふなり色く味うらば

美く福良の浦人多く製衣と名物とん

○寛政九年丁巳の夏天気大小早魁し江州の湖水涸と宇治川乃

流と渴き水底の奇石怪巖ありり出て古今の珍事と然まば

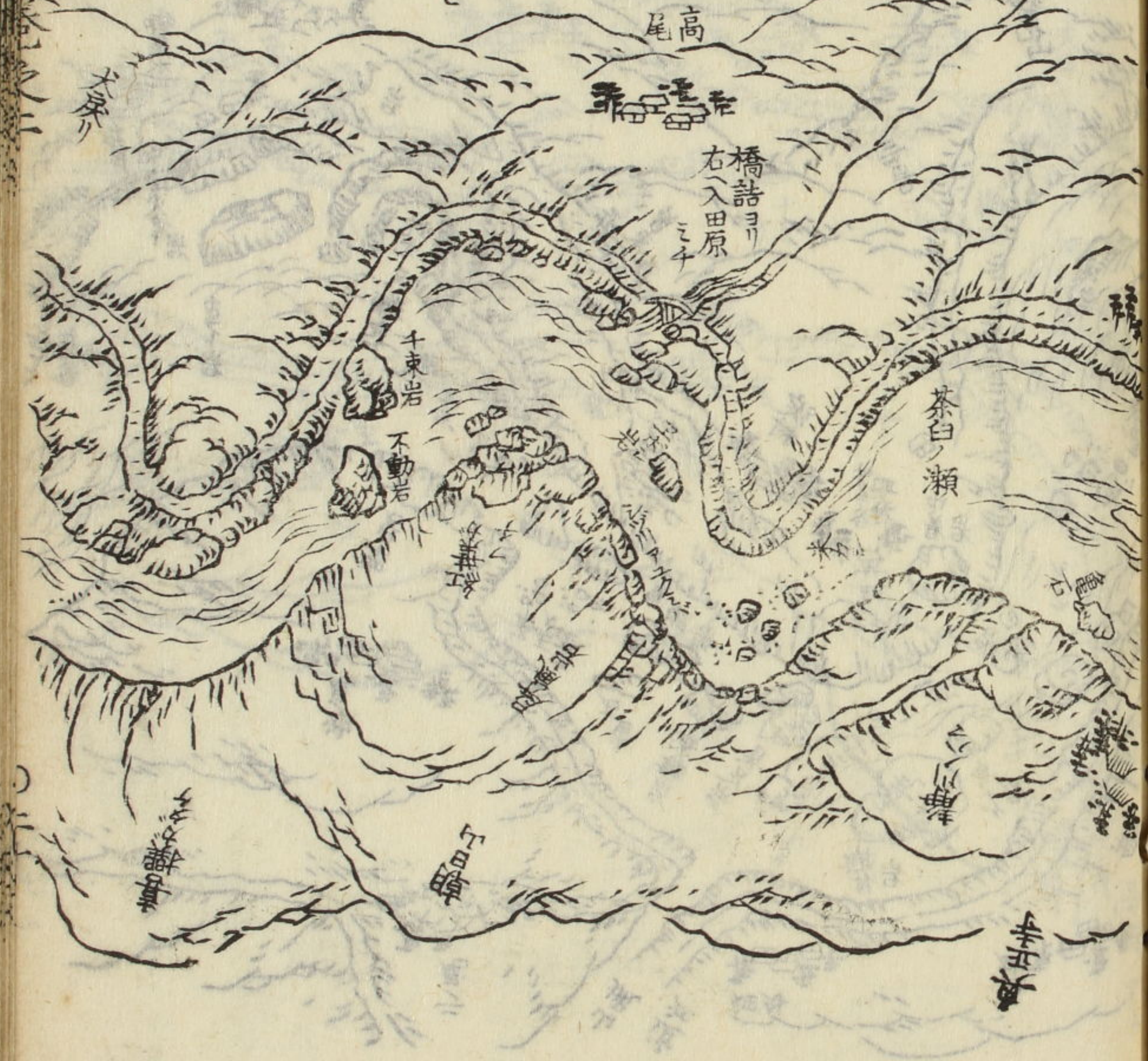
又享和二年壬戌の六七月大雨日と重糸と東国筋洪水摂河兩國

最甚く浪華玉造より東暗峠まぐ一圓の白海と有り。又文化四年丁卯五月中旬より大雨續き江州の湖水吹く。同廿三日より洪水もく守山草津流き淀堤大切二箇所小切七八ヶ所鳥羽街道大切三所守治川槇嶋大切小倉堤二ヶ所桂川近辺残らざりて流き河州より八番堤六十間余切込摂州東生細嶋大長寺の後の方と熊と切て満水と抜く手段あり京師の白河洪水と悲田院より二條新地り切あり加茂川白川一所小なり。五條辺りより加茂川高瀬川一所小成伏見淀の町小水溢り入八幡楠葉一切込尚六月朔日より三日まぐ大雨もく水増大坂玉造より東の山際まぐ享和二年の如く一圓の湖水とあり浪華市中より玉造伏見坂町同新町平野口町

同中町大川辺の備前嶋町野田町天満川崎池田町女夫池町中之嶋もく九町堂嶋曾根崎新地三町合羽嶋福島大仁梅田傳法海老江野田九條富嶋薩摩堀幸町江の子嶋雜喉場安治川難波嶋前垂嶋木津難波高津新地堀江阿波座堀立賣堀鐵町高橋町西濱山本就中。新町の郭中へ越後町吉原町ホへ水込入て傾城遊女の送迎もく小舟小棹もく之と建と実小前代未因と謂つぞ。斯ら花街の形勢と見て或客の戯も小曰く浮河竹の流きの身早ふ引もくもく遣もくもく能地口とりぞ。実や天地の轉變恐るも尚余りあり夏ふも

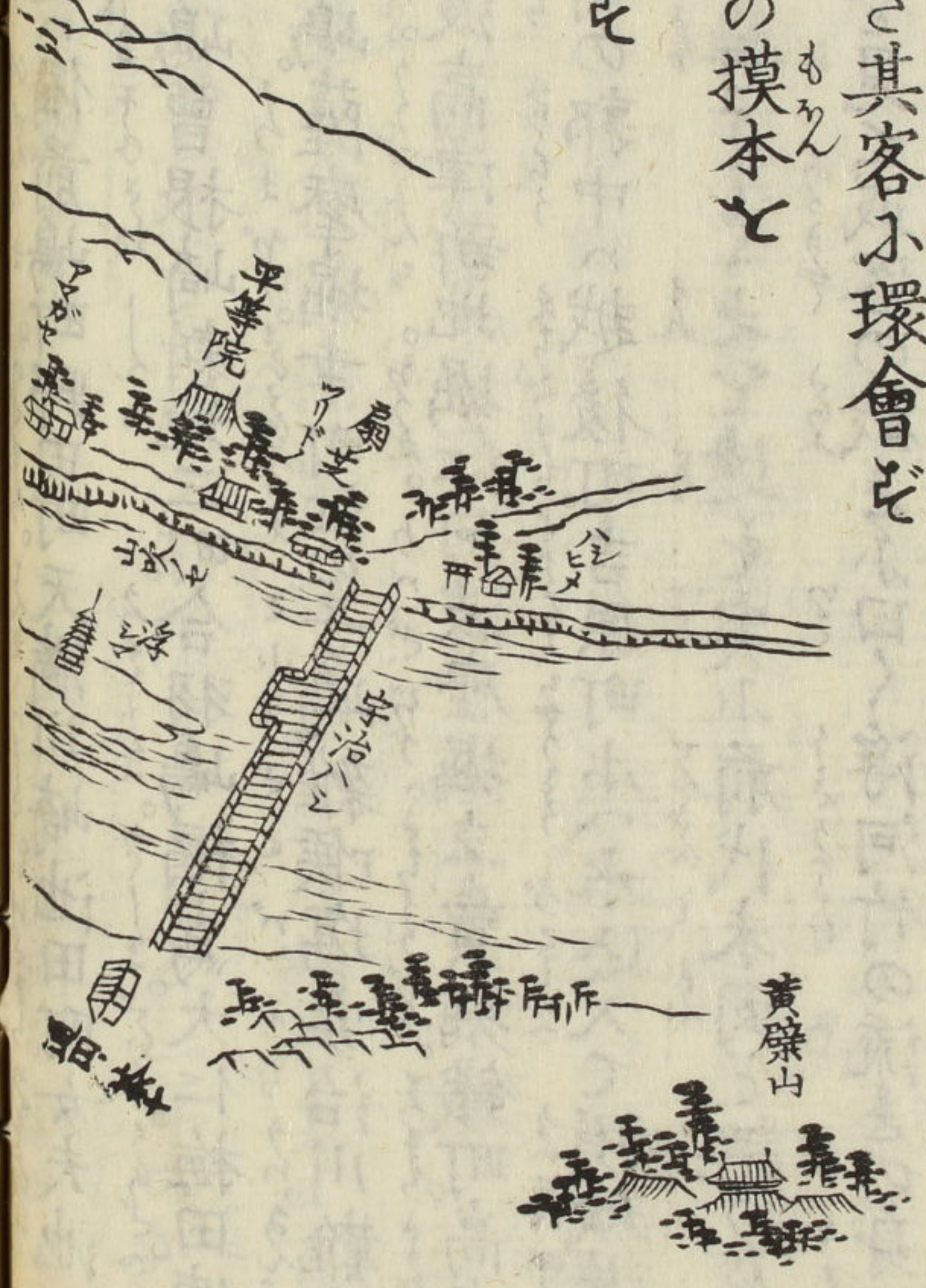
時小又去ぬ嘉永六年癸丑の夏往昔寛政己年の如く早打續て

宇治橋
 伏見
 豊後橋
 まぐと宇
 治川とらふ豊
 後橋より大
 坂天満橋迄と
 淀川とらふ天
 満橋より
 大川と



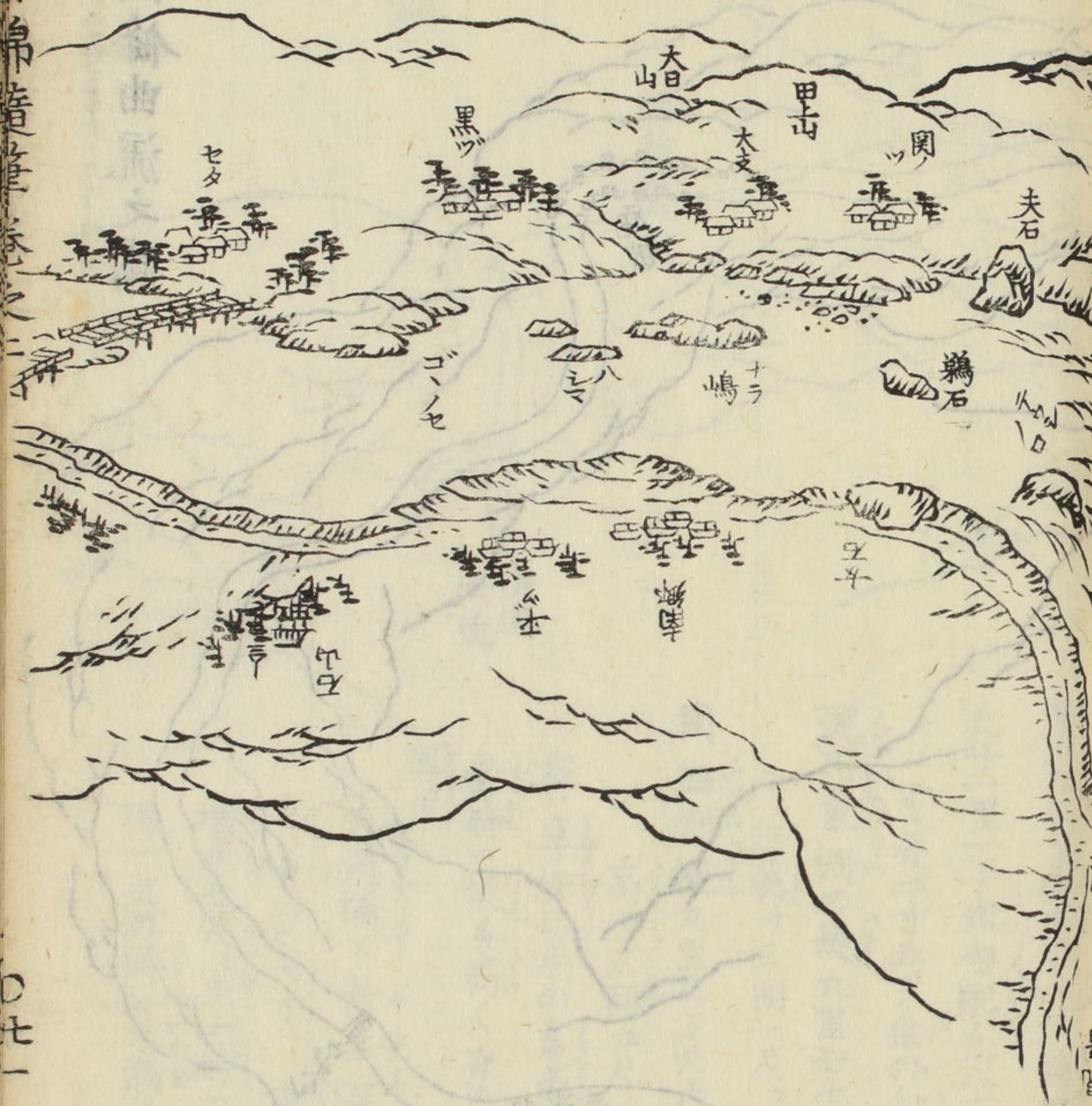
湖水くま菟道河燥くく川の底と頭を以て小京撰の騷人墨客
 彼奇石と見んと彼所不到る更引も切らん予據あると更ありと
 往ざりふより定めく其形勢と摸写し人あふ請て一覽え
 と思へども未だ其客小環會と
 故小漸踈畧の摸本と
 得てあふ出と

〇瀬田より宇治
 橋の上まぐと
 瀬田川より



雲錦堂

〇七一

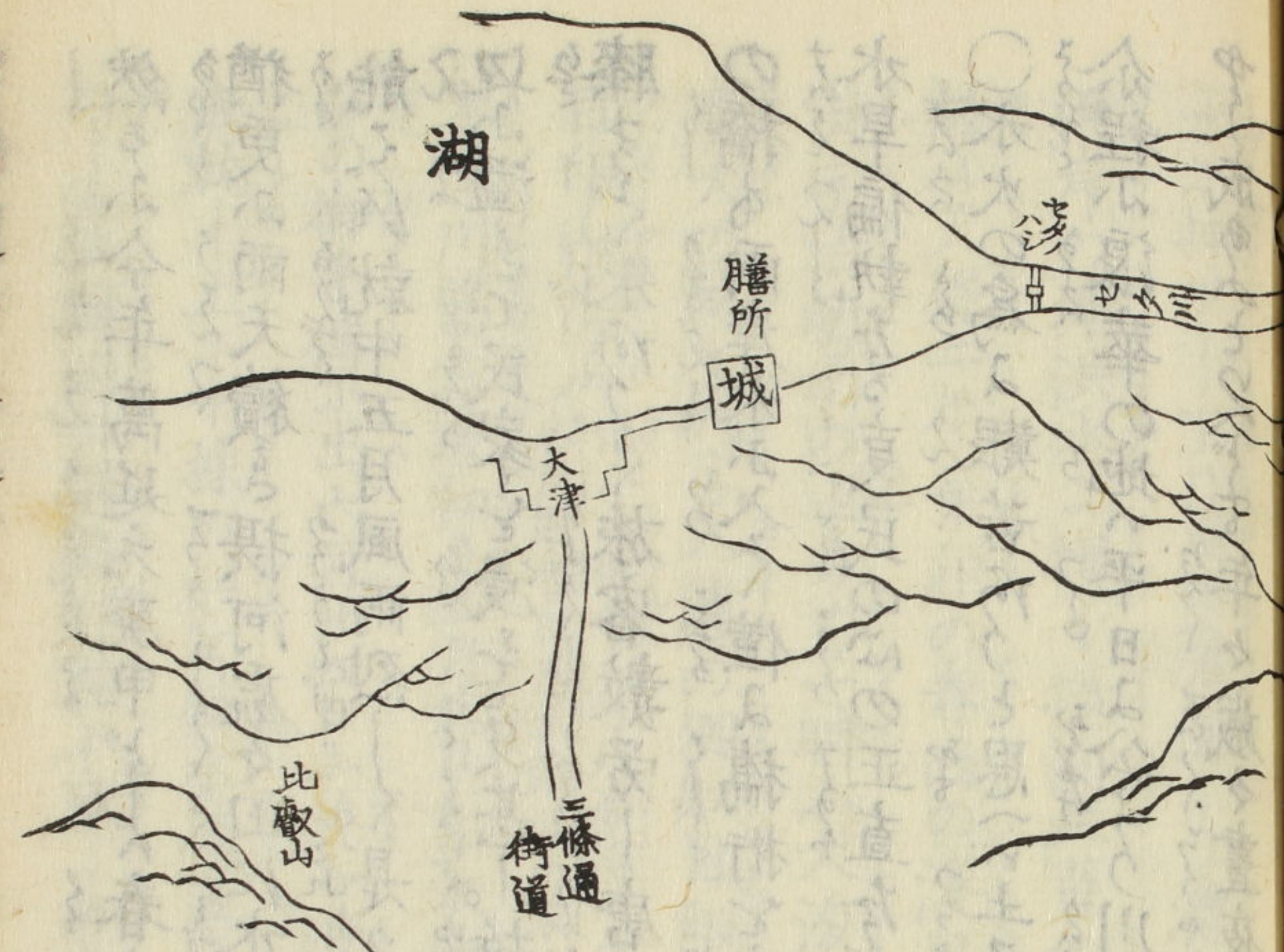


西と 安治 川と

雲錦堂



河條曲流之圖



淀川の長さ伏見より天満橋まで

九十一里二丁余。勾配九八丈四尺五寸余

一丁付二寸五ア余の勾配ふあると云

淀川東側の堤九里七十四間

高サ三間一尺ヨリ四尺迄

同西側堤九里三丁六六間

高サ三間二尺ヨリ五尺迄

右い享保三年の書由なり

當時の堤も高くなり哉を以

因云 天満橋下常水深四尺九寸

中二尺六寸 淺一尺九寸

増水七尺及が時外嶋田畑の

同一丈の時天満水のみと云

皇金陸軍卷之二

七二

然る小今年萬延元庚申より春より雨繁く。五月小及び
 猶更小雨天續と摂河處々田に水溜りて引ぐまひ早苗と植る事
 能く就中五月風雨烈しく是が爲小江州の湖上水嵩増り湖
 辺小溢きて民家と浸を甚し。故又大津石場の辺より行人の
 膝まぐ水何うと旅客數劣し唐寄の松も水中より現る勢田
 の橋も兩岸水小入と僅に橋桁と出ととらる。嗚呼いなる夏もや
 水旱偏執なる夏民の心の正直なる故乎

○水火の爲は艱苦なりと思へ土又流まて支てく民の愁を生ぞ
 介程小浪華の地へ平日は公より川々の土砂と浚へ通船の滞らざり
 中成めのとらんと年々歳々晝夜と別だん上り大河の甚強く張る

水小押下し下い遙の滄海より濤小海上通船の煩ひ少く且淀川
 兩岸の塘洪水と損り摂河三百余箇村の農民是と愁る夏數
 故又天保二年辛卯の春西の湊口より市中の川々中津川神崎川及
 淀宇治勢田の辺まで一時小大浚わらせり其土砂を以て新より
 廣大の地と開き入津の廻船目印の爲とく高阜と築らせめ是と
 目印山といふ俗小天保山と号し委くい予が著る天保山天保三年壬辰春より
 木津川筋大浚初り五月廿日より木津川筋小掛まる船手の徒土砂運
 びの御手傳小出六月廿四日小終る波戸の總長と八百七十間余御築立
 成就し上小千株の松と植水崎より方角の石と建廻船出入小任せ兩川
 口とも諸国の通路自在小成しめめ夏偏小 御仁惠深く有や

雲錦 實錄 卷之二

所仰ぎて尚尊ぶとみ右波戸惣長と凡十有五町ごうの

間土堤の分五百八十間余高サ二間許 敷五間許上土ありて石墻の分長さ二百間余

高サ二間許 敷九間許丸石ありて築立の分六十五間高サ二間半 敷九間許俗小津川の千本松

とふ十番の水尾木より 三番四番の間小徑右木津川口石波戸御築立土砂運御手傳小治と

長堀高橋町なる高橋屋吉兵衛といふ老人生質正直篤実の人よく

渡世北国廻船の船借と称する活業よく海船入津の速ありえ

との深き御恩澤と歎び其始より御成就まく丹誠と抽で日毎り

出勤して怠る夏多く波戸の崎は方角石と建る夏と発起塘の上は

救株の松と植緑木橋波戸の本の小川の詰は一建立あり道ちまの石と立り

石の頭小鷹の象と彫刻し其臺小海鷹安全の文字と勒は海鷹は

則ち船の異名も且千株の松小因て鶴と置たり按むる小波戸の正

字詳なり和漢三才圖會小云水塘陂塘共太女以則ち陂畜水也塘

猶堰築土過水也陂必有塘故謂水塘陂塘云々當津の石波戸

も水と抱へ蓄ふ為あり陂塘の字能是小合へると俗小迫門と瀬戸

鳴門と鳴戸と書風あまは波戸と書も其例無ありも非ざり又海塘

或は石堤と書べと者乎

○諸国より浪花の津小積上る品類奉て扱めり追あはれ就中鮓

鮓鮓節の類四時より小来り物有り又春秋小限る物あり尤遠近の

津々浦々より運送する所筆端小尽し難しといふも先多分入津の

其大概と見図せり

○鯉節 極上品土佐上品熊野あまの又阿波あまの ○生節 上品熊野 肥前の五島豊後

○鯖 上品紀州土佐長門 鯨 身から皮から煎粉り上品土佐紀州 其外九州辺の製も多し

○鮪 血切上品對州長州同洗上品 鮪 冬長州より来る 刺鯖 上品雲州長州 石見但馬

○鮪子羽鯉末黒 目方上品紀州長州豊伊豫 刺鯖 長州干鯨も来る 豊後對馬

○干鯖 長州石州 其餘所々 鯨 上品紀州豫州多く来る 鯨 對馬五嶋 其餘所々

○大鯛小鯛 上品對馬次五島長門ホ其餘 鯛 對馬五嶋 其餘所々

○方頭魚 一名甘鯛 干鯛 鹽鮓 日向其餘如々 阿波土佐伊豫

○干潤眼鯛 五島紀州土佐 生干潤眼鯛 紀州阿波 干鮓 伊豫讚岐

○鯧 備前 海蛇 肥前 連柔魚 長州 釵鋒明鯊 肥前豊後 伊豫

○鯧 備前 海蛇 肥前 連柔魚 長州 釵鋒明鯊 肥前豊後 伊豫

○鯧 備前 海蛇 肥前 連柔魚 長州 釵鋒明鯊 肥前豊後 伊豫

○鯧 備前 海蛇 肥前 連柔魚 長州 釵鋒明鯊 肥前豊後 伊豫

○鯧 備前 海蛇 肥前 連柔魚 長州 釵鋒明鯊 肥前豊後 伊豫

○鯧 備前 海蛇 肥前 連柔魚 長州 釵鋒明鯊 肥前豊後 伊豫

○鯧 備前 海蛇 肥前 連柔魚 長州 釵鋒明鯊 肥前豊後 伊豫

○鯧 備前 海蛇 肥前 連柔魚 長州 釵鋒明鯊 肥前豊後 伊豫

○鯧 備前 海蛇 肥前 連柔魚 長州 釵鋒明鯊 肥前豊後 伊豫

○鯧 備前 海蛇 肥前 連柔魚 長州 釵鋒明鯊 肥前豊後 伊豫

○鯧 備前 海蛇 肥前 連柔魚 長州 釵鋒明鯊 肥前豊後 伊豫

○鯧 備前 海蛇 肥前 連柔魚 長州 釵鋒明鯊 肥前豊後 伊豫

○鯧 備前 海蛇 肥前 連柔魚 長州 釵鋒明鯊 肥前豊後 伊豫

○鯧 備前 海蛇 肥前 連柔魚 長州 釵鋒明鯊 肥前豊後 伊豫

○鯧 備前 海蛇 肥前 連柔魚 長州 釵鋒明鯊 肥前豊後 伊豫

-2 181 33 890" data-label="Text">

○鯧 備前 海蛇 肥前 連柔魚 長州 釵鋒明鯊 肥前豊後 伊豫

○肥物の類。鮎粉。鱈滓。羽鮎。鯧鱈屑。松前より 鮎榨滓。豊後いよ 長門其餘

西国筋 ○干鯛の類。関東より 尚此余畧之

鱈魚の浪花の江西海部堀の永代濱より許多の藏ありと云九と云ふ藏めり市と爲て支夥し。塩魚乾魚の類ひの新鞆町と始め新天満町

ホは問屋商店軒と列糸平生小交易繁昌なり

○大坂より江戸へ諸色と積て運送する大船を菱垣と号し年中東

武小上下あの中小十月小到り新綿と積て下ろを規模と一番二番三

番と江戸小着岸の遅速を勵む尤前後にうろ損益ありと云めて大勝負を争ふ支なり。是と番船と云何きも千石以上の大船あり。世り

名高き兼名屋徳藏松右門と云ふ此菱垣の船頭なり。今云

帆木綿と云ふ織帆此松右門の工夫より始まりし。故小是と松

右門帆と云ふ往昔の葛延を以て帆と云と後世木綿を用ひ綾線と

以て之と刺縫て裂敷きざる爲と云是と刺帆と云當時の刺帆織帆

の両品と用ゆ海へ天雨常小降り萬川流入とも更小海水増減なり。

按ざるふ天文の書小云地球へ胡桃の如く凸凹あり其凸なるもの山

みと十分の三あり凹ある者海めて十分の六あり残り一分即ち

平地なり而も地中より皆水と含む凡そ土肉のどく水は猶血の如し

氣小隨て能分り降る支休む而して天の雨水川の流き人の渡あり

何ある物ぞや共小一源の海水あり故小嘗て増減と見ざる支は自然の

定理なり

雲錦道筆卷之二

○一年伊賀国と遊歴し阿拜郡上野小到りて彼渡邊荒木の
 の兩雄の復讐と遂に古跡と尋めり小縁て因傳て上野の
 都城西の入口より第二街目馬若勞町鍵屋の辻とて所則ち國
 諍の地をなす何れ西より入ると東へ行ゆるの街なり鍵屋と
 ついに西南角の蕎麥麴店 畿内
 ありと軒端は彼復讐の形勢と
 繪きしは招牌と掲げりま
 近辺の家は復讐の実録とて画
 入の板行と販り求むる家土産と
 たりしなり其始末世傳あり

御城

御城

○かぎや

西

大同小異の言どもありて原来親の敵も非ど舍弟の讎敵なりは
 見へり于時寛永十一年甲戌 萬延元年庚申迄 十月七日の早天の夏
 して始め備前岡山の家の中川合又五郎聊の遺恨に依て東都於て
 傍輩渡邊靱負が三男同名小才治といふ者と討て立退き暫く江
 府小湊に後京都小上り又南都に蟄居る小渡邊靱負が嫡子
 渡邊數馬舍弟の讐を報ぜん暇を願ひて備前と退去種々
 艱難と凌ぎ姉婿荒木又右門と頼りて諸方と尋廻り此又
 右門へ原来伊賀国阿拜郡荒木村の出生りて劍術の達人故大
 和国郡山に抱へり居るが助太刀の爲に主君小暇と乞ひ數馬と
 俱小癸足り荒木の家隸川合武右門渡邊の家隸本林孫右門へ

雲錦道筆卷之二

の七一

俱は伊賀の出生あり忠義の志深く辛苦と厭ふは始終附従ひ
 誠心と竭く又五郎が方にも伯父櫻井甚左門又五郎が妹婿櫻井
 半兵衛より小仕官の身あり主家へ暇と乞ひ浪人しく又五郎と
 身継ぐる者亦渡辺荒木の両士へ縁て又五郎が在處と求んと京都
 に登り尋ぐる早南都へ赴くと因り直ち小彼地小走ゆと伺ふ
 十一月六日南都と立ち伊賀越前守伊勢の地へ赴く由因へ是
 偏小神仏の加護ありと悦び勇む敵の面々の其夜の伊賀の鳥ヶ
 原南都より七里小宿を是にゆり渡辺方も同所一夜を明し鳴ヶ原
 と未明小立上野の西の入口鍵屋の辻まぐ先へ行ち是究竟の
 地たりと見極め敵遅りと待りけり鳴ヶ原より上數馬の定紋付の

小袖小縞の裁着とたれ又右門も黒茶の小袖小裁着とたれ王後四人
 より小鎖くびく鎖頭巾と着し又右門下知しく武右衛門孫右門乃
 兩人櫻井半兵衛と討べ甚左門の某最初小討べ又五郎の當の敵
 あり數馬受取て是は對ふ先敵の家隸一人切つけ騒ぐ所附込で
 討くると示し合せ今や来ると待り小敵と近く見へ各力
 紙と咬めく勇む仇敵の方第一番に大坂の町人虎屋九左衛門
 又五郎が遠見の役とく先小進んぐり二番の櫻井半兵衛三番川合
 又五郎四番櫻井甚左門の五番も乘掛めく若黨家僕小主後十二人
 打つと来る又五郎の何心あり鍵屋の辻と押廻ると武右門孫右衛門
 立出く家来一人と切捨ぐり斯る所へ又右門飛で出二尺七寸来金道

の新刀をく甚左門しんざもんに飛とる。馬上まじやうと横よこをふ切きつけり。甚左門しんざもん手てを刀やいばと抜ひき馬うまより飛と下くだんとせし。又右門みぎもん先まへととれ心こころせくまま鞍くらの不足あそくかを俯うつむ臥ふし落おちりる。又右門みぎもんづけく二刀ふたやいば斬きつけり。余あまりは強く討うちまそや刀やいばと手て小持こもちあぐ倒たふれし時とき小行こぎ年とし四十一よんじゅういち才さいとや。まに數馬かずうまは又五郎ごろうと目めざし詞ことばとゆめと討うちて掛かまひ。又五郎ごろう心得こころえりりと馬うまより飛と下くだり鎗やり抄しやう取とり數馬かずうまが胸板むねいたと突つきりとも。薄手うすてなまひ。夏なつともさ。直ただ小踏こふみあし切付きりつけるまひ。又五郎ごろうも鎗やりととて刀やいばと抜ひき數馬かずうまが頭かぶへ切付きりつけり。余あまりども鎖頭くわづかん巾きんとて切きり。双方ふたう切結きりむすひ數馬かずうまは右みぎの手ての指ゆびと切落きりおちるまひ。又五郎ごろうも深手あて數かずヶ所ところふ及およびり半兵衛はんべゑの先まへ騎のりあまひ。余あまり程ほど先まへへ行いく。るが後あとの騷さわふ見み歸かへり。鎗やりと取とり

とる所ところと武右門ぶさうもん孫右門まごさうもん討うちてか。孫右門まごさうもん跳はり後あとより切付きりつける。馬上まじやうも溜ためり得えど町家ちやうやの軒下のきの下へ落おちりる。此時このとき半兵衛はんべゑが鎗やり持もつ孫右門まごさうもんが腹はらと鎗やりと突つ通とれ。けうとまが鎗やり持もつ右みぎの腕うでと切落きりおちせ。鎗やりと捨すて逃にげ行ゆぬ。此こゝに於ありて孫右門まごさうもんの主人しゆじん數馬かずうま又五郎ごろうと討うち合あひ見て。かき添そんと立たふ。飯いまどと深手あてあまひ。心こころざり。りる。働はたらく夏なつ叶はひ町家ちやうやの戸口とぐち小腰ここしうちけ。苦くるき息いきと繼居つぎぬり。諸もろ亦また武右門ぶさうもんの半兵衛はんべゑと討うちとせし時とき半兵衛はんべゑが若黨わかしやう溝ぞう口ぐち八左門やさもん夫おとこと見みる。捨する鎗やりと取とり。早くはやく武右門ぶさうもんに突つき。此こゝ方も剛弼ごうしやく相手あひてと嫌きらむ。八方やっほうは切きり。鎗やりの柄えも切付きりつける。是こゝに叶はひ。八左門やさもんの手て負おなぐ。小逃こにげま。る。卑ひ怯おそめと追おひ。又右門みぎもんの甚左門しんざもんと討うち。ま。彼あ長ながが。と打振うちふて。

一ノ御々奮賔の威いくくも廻り敵の徒と後横無尽に難まじ立たりて
容子ようしと見みまご數馬かずま又五郎ごろうが勝負しやうぶいまご決きまん又右みぎ門かどけ寄より
又五郎ごろうが頭かぶと横よこ小切付せうせつけ痛手いたであまの上うへあまい何なにらん以もつて溜ためる
き後のちへうらくとと凌とら倒たる所ところと數馬かずまの踊おど上あつく乗のりるを思おもひまり
切伏きりふり又五郎ごろう行年かうね廿四歳にじゅうよんさい數馬かずまも手てとおいつ勞つらと氣いきと失うはなれし少時せうじ其
如ごとく打臥うちふり又右みぎ門かどの始終しじゆううと手ても負おりし又五郎ごろうと切付せうせつけ
時とき猛力まうりき烈れつく新刀あたらの刀やをりるも鏝つば元もとよりりとと折飛よりし備
半兵衛はんべゑの軒下ののりより漸お首くびと上あげる水みづと乞こる程ほど若黨わかつぐ八左門はっさもんと腕うでと
切きりし鎗持やぶらと二人ふにんと介抱けいぶ息いきも絶たるも勞つらりしとと坂さかの方かた
へ退ひきぬ虎屋とらや九左門くさもんの甚じ左門さもんの下部しもぶと打うつと本町西ほんまちにしの大手おほて追お走はり

夫おより二の町逃まちにげのびるも此由城このよし中ちゆうへいるも後目のちめの諸士しよしが追々お馳は着つ
て嚴重げんじゆうに警固けいこあり頻しばしばて渡辺わたべ主後しゆご四人よにん小田村福壽庵おだむらふくじゆあんへ入いりし休やすまり死し
川合方かわがはたの徒たて同町金傳寺どうちゆうきんでんじへ入いりし其後渡辺のち荒木あらの御本丸ごほんまるの屋舖やぐらへ
預あけあふ川合方かわがはたも後のちより上野寺町万福寺うののてらまふくじへ預あけあるも櫻井半兵衛うら若
黨わかつぐ二人ふにん養生叶やうじやうりして没なすも渡辺わたべ荒木あらの故ゆあつくも上野うの止とまるも五箇
年ねん小及おびし寛永十五年戊寅かんえいじゅうごねんの八月終つひ小備前おびぜん小送り遣おのち其行粧そのあやう
殊こと小美お々びく最嚴重さいげんじゆうに岡山おかやまより大船おほぶねと飾かりし立浪た花はな泊とまりりし迎むかひし
人々ひとの伏見ふしまごく来きりしとと請取うけとらしまるととんも此時數馬このとき廿六歳にじゅうろくさい又
右衛門えもん廿六歳にじゅうろくさいと因よゆも然しかまい復讐ふせうの砌か數馬かずま廿二歳にじゅうにさい又右門みぎかど廿三歳にじゅうさんさい
○因よゆも右みぎの復讐ふせうと戯場あそびば狂言きやうげん作者しやうしや奈河龜助ながかめすけ元祖もとすけ安永六酉年あんえいむつねん

伊賀越乘
掛合羽
歌舞妓
雜劇之圖

按どろふ嵐吉三郎
伊勢古市の芝居小
於く春田内記の役と



春田内記

勤めといひ寛政十二年

の頃を以て初代吉三郎の
俳名と里環といふ下寺町遊
行寺小墓碑あり。二代目吉三郎
里環と号しと寛政六年
文字を改め李冠とん後
享和三年又改めと文字と
璃寛と書り中頃の俳優小
く名物男といふ



唐木要右衛門

流光齋門人
松好高半玄漱畫
幕緒

戲作しく伊賀越乘掛合羽と題し名と憚りく和田志津馬唐木
 政右門家来い石留武助池添孫八と敵い澤井股五郎接田林左門
 などと変名しく出さる名作あり大當りとなり今小至つて廢らば
 尤其年の二の替りあり中の芝居小於ての真行なり役割の大略ハ唐
 木政右門小中山文七元祖世は黒谷文七と云 譽田内記佐々木丹右門二役中山
 来助黒谷文七の弟 二代目新九郎 沢井城五郎馬士銅々の大八二役中村歌七加賀歌七と云
 則梅玉哥澤井の父 澤井股五郎奥山佐内母鳴見三役淺尾爲十郎實悪の名人 錢屋奥山と云 此
 歌舞妓大當なり故後浄瑠璃にその伶語り更みなり又介後
 天明三年近松半治院本あり伊賀越道中双六と出は是亦大當り
 也故がごさうも取立とる更といはまなり此二狂言と小歌舞妓院本

兼つる名狂言なり故小今小残つて時々真行を又寛政年間二代目
 嵐吉三郎俳名李冠家号岡島屋今の嵐吉三郎ハ李冠の凡嵐 猪三郎の子ありと李冠の甥と云 若輩の時伊勢古
 市の芝居あり市川團藏俳名市紅家号三河屋當時團藏より三代以前 淺尾
 爲十郎俳名奥山家号錢屋今より 関三十郎俳名小太家号尾張屋今より三代
 其始め嵐宗太郎と云り中村歌右門の弟子と云り中村歌助と号は後り関の養
 子となり三十郎と云るは小太の三十郎ハ後りあり三右門と改名なり
 並小嵐吉三郎ホの座組なり此時の狂言則ち伊賀越乘掛合羽
 極り夫々中通りの役割とて團藏政右門三十郎譽田内記爲
 十郎股五郎と実小役割動りたる所然る小團藏の云く斯る不座
 なる時より関三丈の内記に當まへり面白く内記に李冠に云
 ぐと頭取も大小困りたる此時分の李冠未だ若輩あり中々前

より名人老功の勤めし役あり何とく若年の吉三郎いづら勤る
 づと思へども相手の團藏の指圖ゆゑ方あり。吉三郎（此由と
 告し）是も思ひがけあり。大駭。前々より老分の勤免
 らし。役よりい殊更座頭の相手に生若き我亦実以て不都合
 と。連て辞退し。團藏、故是非あり。役と銘々
 誓古ふかるふ。李冠、一し身と入と。誓古とんと毎日團藏の宿へ
 行し。唯せりふの言合せのそめと。鎗の立廻りのついで夫
 ゆ。李冠も大よ心と痛め。終つ。物惣誓古にあり。舞臺へか
 段々。頻て鎗の傳授ふ成て立合ふ。所めて爰よりト云く。
 荒々と口立して。李冠、一圓合点ゆ。大事の場故夜

寐どく左や右と案ト煩ひ。其夜團藏方より使と以て作り
 中。矢張貴公の年齢もく然る。と言。ゆえ翌初日其詞
 小隨ひ持まへの年齢の作あり。若殿の形勢一向若輩。儲茶屋場
 成て稍て傳授あり。李冠鎗と構へ。團藏、飛をり平伏して先
 大殿様。鎗術の秘笈。残らば御傳授申上置ま。若殿
 様。御傳授申上。御免下。ト立上り。夫より鎗と扇の立
 廻り。李冠、是ま。誓古もせん。唯口立の笈あり。何の差別もなく
 突て行と團藏、是と握り。又扇を。初々。き様なる。李冠、
 ま。手と持。ぬ。の團藏の仕打小手の利や。李冠、
 追ふ。役と勤。若殿のあり。原来若年の笈あり。其取合

兩個の立まゝり。実小傳授をるが如く見へく見物一統小感心して
大評判あゝ古今の當と取りとど。後小團藏の云く尤奥儀と
言あぐ。摺るぐの大殿に今まぐ傳授ぢぬといふ殿が柔弱悪
くつ不器量りの様小見ゆる故岡島屋が若年より不圖あり付
たりと。是理屈らうり非ど人と選とく舞臺の模様と付る發
明といふべし。近來中村歌右門 三代目俳名芝翫後梅玉と号し又
下とく内記の役と勤め一時若殿小はらり大當とと取又大坂へ
飯りてと同く此役と勤め大評判より原此度を岡及び故
の度なりとと

右の復讐の始末小抱りし度あり縁ど。思ひ出さるまき此小出と

因小云其打扮と變て當とと取り度昔より少くは東都の中村

仲藏 俳名秀崔天明 志賀山一流の三番叟と始め名人なり一時

江戸あゝ御家人の俄雨ふあひ蛇の目傘の破まゝととぐり走

見より不圖ありひつと忠臣藏の定九郎 尤是は丹前りの打扮と

黒羽重の紋附の申尅頃あゝ朱鞘の大小蛇の目傘の破まゝとと差

て出より小見物一統感心し。今に至りて誰とと此格と成をり。

中古佐野の舩橋 有職録 小市川鯨十郎 始め市藏と名 三浦荒次郎

尤是まぐ赤 大名の若殿づらり色白く上品あゝ其うつとと。大當

とと取り。又同く鯨十郎信仰記の山口九郎次郎 尤是も剃下鬢の

燕ん 白作あゝ大當あゝ。其後の誰も皆此打扮と

かりり其頃の梅玉の歌右門壮みと鍛十郎と心と一致めて勤
め時ゆ定めて歌右門の好みと斯い為者あり。又其作
轉どく誤り菅原の判官代輝国の役市川團藏先の三河屋市紅
今より三代前
中村慶子富十郎菅相丞の時道明寺の場より輝国の打扮を思入
りく。陣笠小禪衣より出しうの場より輝国と出さぬんとの鎗の
入。故市紅も是でいト翌日直小挑色の素袍小龍頭巻より花々
まき出覚壽の前へ手をつけて御詞小隨ひ衣装相改め泰上侍
まきより未ト言しう昨日の評判打てく場も棧敷もゆき計よ
うありとあん。又京都の芝居より忠臣藏の由良之助と勤め後
者片岡名と忘
げりと思入より茶屋場より大八丈鳴の上下對乃

着附小緋紋縮緬の繻伴と脱りぬ是は如何も馬鹿と尽すわ
そとら思入と見えり由良鬼まふ手の鳴方へくといふ立端を
出しと後中々由良之助とい見へど後寺岡平右門の詞ありて
歎討の御供といのを言けし是く貴さぬ足輕で無てくハ口
がらトやチ率頭とあまぬんトといふれは場よりお前あまぬんト云
しうば場も棧敷も一統にうと笑ひくうあり出。暫時狂言と潰
たり是ホ思入の過ちといふ。又昔東鑑御狩卷の朝比奈と大
名の子息あま定例の姿い甚意味小違へらとて義秀閑居の場
あく黒羽二重又霍の丸の紋付小頭の太鬚の大名風より出しう見
物一向兼知より夫ゆ失張前々の通る大の霍の丸附より丹前り。

頭の巻立神酒徳利の口の如く紙と左右へ出しく出まれば老若共
 悦しとぞ。余りふ理屈詰り成が。道具も峨々たる山谷
 宮殿樓閣とらう七間の舞臺小飴る夏る。是非な。囃子鳴物
 あくも太功記の本能寺此禪囃子の宗旨小違ふ。太鼓拍子木
 とのき題目も幕明く人あお七吉三が吉祥院と思ひん是亦
 狂言綺語の逸道とりあへ

雲錦隨筆卷之二終

雲錦隨筆卷之三

浪華 曉 晴翁著

○近來市川海老藏七代目團十郎太閤記の世思ろく。明智光秀の役を
 勤し時本能寺小於く小田春永と討く。次幕妙心寺の場ろく正面に
 卓と飾り春永の切首とのどめ香華と手向拜し。祭文と讀ま。
 後小花道の半途小至る時春永の首目とひ。光秀と白眼光秀
 身体ろく自由なる容子目新く大評判より。春永へ市川團
 藏ろく正真の首と出しく白眼見へ。是は寛政元酉年中の芝居の
 二の替よ。北国曙小嵐雛助珉獅後小玉と稱す柴田勝重の役ろく
 小谷の城落城に及び勝重の切首と卓の上り置泰の文花齋焼香を

雲錦隨筆卷之三

是則雛助正真の首と出しその赴向し全く是の本づき者也。時小光秀が讀上る所の祭文の見物誰有く慥小聞者好故予その根本と借て写し取り其文ふりて

奉捧祭文

愚臣適義兵ヲ起スコト何ゾ家ノ利ノ為ニ致サズ玉体ヲ安シ四海ノ礼ヲ乱サズ民ノ塗炭ヲ救ヒ天ニ伐テ道ヲ行フ苟モ光秀源家ノ正統實ニ不得止故也仰願ハ尊靈怒ヲ鎮メ廣ク国民ヲ撫テ五穀豊入タラニ於テハ一字ノ大伽藍ヲ建テ永ク供養ヲ尽スコト可俾勿依祭文如件

于時天正十壬午年六月二日

土岐伯耆守末葉

源光秀

敬白

右大臣春永公 御靈前

友人来つて是と見く大小笑く曰狂言綺語とい言へども此文余小拙し尤首尾の文体祭文又非ど拙言文なり戲ま是と添削せし先初の奉捧と除きて祭文とて書べし又愚臣の愚と取じ且玉躰と宸襟とを並し。正統と末葉と轉じ終の姓名と伯耆守後胤と。御靈前と尊靈前とを可ならん乎。但五穀豊饒ハ神祇小祈るべき事也。豊饒と豊入と書らるる芝居ゆゑ入の

字と用ひ、支聞えり。然まども豊入と書て、無入と聞えま。ふふふと讀て、不吉とつべ。尚亦玉躰と安んじと有ども。総見院殿の上小専ら忠と盡し。宸襟と安んじ奉りぬ。武將たり。天小代とつくとつる。聞えり。光秀右府の無道と怒り。殷の紂王。小比して軍と起し。自ら周の武王乃義と唱へり。故小本国龜。山の辺の山と周山と号し。支軍談りも見えり。斯のどく評。て後拙あつたども。予祭文と書べ左のどく作べし。と頼て。記さる文小云。

臣源光秀恐惶モ 右大臣春永公ノ靈前ニ申テ曰臣
ウダイジンハルナガコウ レイゼン マラシ マヤクシ
 今遽ニ義兵ヲ起ス支敢テ身ノ爲家ノ爲ニ非ス偏ニ
イマニワカ ギヘイ オコ コトアヘ ミ タメイヘ タメ マラ ヒト

天下ノ政道ヲ正クシ万民ノ塗炭ヲ救シガ爲天ニ代テ
チカバツ オコチ トコロ シテミツヒデカクテナク
 誅伐ヲ行フ所ニ而光秀辱モ
セイワケンジ バツエウ マコトニモツテニル シヒサル ミナリ
 清和源氏ノ末葉タリ實以視ニ不忍ノ故也仰冀ハ君幸ニ
コレ キヨシメシイカリ ナタメ シカイ セイ ヒツ マモリ
 是ヲ聞召怒ヲ宥テ四海ノ静謐ヲ護玉臣更ニ二字
ガラン コソリウ ナガ ボダイ トブラ タタラ 己トキニテニヤウ
 ノ伽藍ヲ建立シテ永ク菩提ヲ弔ヒ奉ニ維時天正十年
ミツクマ トキハウキノカミヨリサダノカウインヒウガノカミニモツヒツヒデ
 壬午六月二日土岐伯耆守頼貞後胤日向守源光秀
ツシニヤマツマヌ

謹敬白

實余も有べ。狂言綺語といふも決しと疎畧といふも非べ。往昔の作者達の遺稿とよそそ心得べ。外題の當字など毛古の面白く今ハ拙し。流行芝居ハ外題うと諺ふら不違は

光秀春永の靈
前小祭文と讀圖



○往古の歌舞妓狂言の作者をる者如く一座集りて何々と
 世界と定む狂言の筋と尤此世界小四ありと一小王代とふ是は禁中
 公卿とて堂上のをと終るといふ浄苗理うとい大友真鳥妹脊
 山の類歌舞妓とて伊勢物語ありは某種御供の類二も時代
 とふ是は北條足利菊池大友の軍記小りてとて武將歴代の名を
 假ると三小御家といふ是は一国の騷動時代ふは世話ふは
 中庸と用い仙代萩鏡山伊賀越忠臣藏の赴向と第四小世話物
 とて男達角力取又い心中情死の狂言とて何きも農工商小係に
 をい此世界の中も御家と騷動と復讐と二種小分り世話も
 侠客情死の二種あり。諸其昔は此狂言の筋を極め誰い何役彼

此役と配當さしあてとく。詞ことばの互小言合あひまじりせとく。打囃子うちばしも其場そのばとく休座やすま乃者もののはためと正徳しょうとくの頃ころ京師きやうし小橋良平こはしらのうへいとて外療ぐわいりやうの医師いしありと此人このひと戲場げばうと好このころと目めに見物けんぶつ。都万みやま太夫座たふざの役者やくしやと熟じやく鬼おに小成せうせいし。一座いざの衆中しゆちゆう良平らのうへいと頼たのみて狂言きやうげんと作つくらしむ。謝物しゃぶつとて役者やくしやよのつゝ衣類いらい調度てうどと贈おくり。座本ざほんより家内けないの雜費ざつひと運とこびあつて師し父ちちの如ごとく尊敬そんかうとがしつ。謝儀しゃぎと作料さくりやう金かねと納たくめり。夏なつ小せうあはし。程ほど小せう後ごとく作者さくしやと役者やくしやの朋友ともだちの如ごとくあはし。是こゝは依よて今時いまときの識し者ものより最賤さいせんとく夏なつとくぬき。然しかども明和めいわ安永あんえいの頃ころより寛かん政せいの末享まつかう和わの頃ころまど。作者さくしやの名人めいじん数多かずおほし。漸しづ小せう没ぼつして文ぶん化くわの初はつめ僅わずか一兩いちらう輩ばいも残りのこり居ゐりしが其後そのちゆう一人ひとりもぬ。大方おほいに狂言きやうげん方かた

とく拍子木はしりを敲たた者のものとあつて嗚呼おゝがめく番附ばんつけより名なと載のると畢はつも其身そのみ不肖ふせうなりと立者たちもの役者やくしや小せう諂てんひ奴隸ぬれいの如ごとく成行なりゆきぞ淺猿あさざるとて夏なつと故ゆゑ西澤さいざく一鳳いつほうの語ことばらまぬ。○世よ小せう専せんら行ゆく忠臣藏ちゆうしんざうの権輿けんいの外題ぐわいだいといは評林ひやうりんとて元禄げんろく十六じゅうろく未まど東武とうぶある俳諧はいかい師し富晋齋ふしんさい其角そのかくの許ゆるう浪華なみぎはの何某なにがし来きて書翰しよわんの文中ぶんちゆうより上畧じやうりやく。此程このほどの一件いっけんも二月にがつ四日よっぴ小せう片付かたづけひとく甚こゝろ噂うわさとく花はなやうゆる説せつも多おほく。無上むじやう忠臣ちゆうしんとの取沙汰とりさた此こゝ節せつ其その夏なつづつ。堀町ほりまち勘三座かんさんざとて十六日じゅうろくにちより曾我夜討そがよらちうふ。はく十郎兵衛じゅうらうべゑ長五郎ちやうごらうふ。是こゝは當時たうじの夏なつ遠慮えんりよもあふ。とて三日さんじつとて相止あひやひと云いふ。是こゝぞ趣向しゆきやうの始はつめりて大坂おほさか

うくへ宝永七寅年元禄十六年より 八年後なり 篠塚庄松座小於て吾妻三八

作あく。篠塚治郎左門大岸宮内 佐野川萬菊大岸カ 後大岸カ 於て救回真行の

舞妓狂言うく真行の始め此狂言 介後京大坂小於て救回真行の

内延享四卯年京都中村条太郎座うく大夫救四十七本と題く。

澤村宗十郎大岸の役うく六月朔日より初日うく大當く其評判芳

に高く大坂も同じ外題うく市山助五郎大岸宮内の役勤めうく介後寓

曆十一年己十一月廿二日より大坂角の芝居中山文七座うく泰平

は行列明和八年京四條北側西の芝居尾上条助座うく小袖藏

いろは配安永六酉年十二月八日より大坂角の芝居小川吉太郎座

あく。日本花赤穂塩竈うく追く出く各當りと取るとりへ

鬼角忠臣藏出て後此狂言と第一うく仕内も是亦不工夫物好と

加へ漸小委く成りぬ

○操浄苗理狂言うく其頃近松門左衛門の作うく宝永二年戊五

月五日より竹本座を兼好法師物見車とて切不基盤太平記と外

題く此趣向と出く尤此浄苗璃うへ高師直塩谷判官大星由

良之助と名と附く近松門左衛門がうへ 又豊竹座あく享保八

丑年十月朔日より忠臣金短冊と外題と出き。是へ小栗横山の時代

うく大岸由良之助と名付く其後寛延元辰年八月十四日初日して

竹本座うく始めく假名手本忠臣藏と題く大當りうく評判高

是へ竹田出雲並木千柳の合作ぬくを介有へ此狂言の誉言と強

是は竹田出雲並木千柳の合作ぬくを介有へ此狂言の誉言と強

始の大岸宮内の名は是より消え以後は大星由良之助に傳
 改まらる。吉田文三郎此大星の木偶を遣ふ先評より澤村宗
 十郎が風儀と摸しく大評判を取し又並木千柳の作意も七目
 の歌舞妓の伶より用ひらる。翌寛延二年己の春江戸本林田座小
 於此狂言と歌舞妓より真行も二月六日より初日より大繁昌せ
 り。由良之助の山本京四郎勤むと時小市村座の五月五日より真行中村
 座の續々と六月十一日小初日三座より小假名手本忠臣藏づも評
 判より頗る賑ふ。京都より同年三月十五日より中村松兵衛座小
 て真行大坂の嵐三五郎座より十二月朔日より初日と出より其後三
 都より不及だ。諸国のより芝居より忠臣藏と出より夏年々歳々

此繪ハ

菊五郎

當り狂言尾上

梅幸ありみまげ

とらる草双紙お出せ

圖に尚此並ぶ嵐吉三郎

の寺岡平右門役坂東

岩五郎の芥子太夫

ホの圖あり畧之

是は安永三年の役割なり



い
 の本の武士のかごとくきりぎりす
 紋着るみのおうけりよるれど

おの
 菊五郎

古画模寫

其救擧と救へば就中古今無類の大當りとする。由良之助の最上
 と稱する尾上梅幸にともり安永三年午の十二月三日より大坂中の
 芝居より真行尾上菊五郎由良之助後天明三年卯正月十五日より同中の芝
 居あり真行尾上菊五郎由良之助後

梅幸集明和二酉年江戸市村座の條云

此秋冬がより。京都より相談あり。江戸一統小殘念げが無程
 談合極まり暇乞狂言の假名手本忠臣藏より由良之助と本藏女
 房とあせとの二役が彼殘念が狂言の仕内と近年めくくと
 沙汰くぬり爲程のことと云々と合体しての大入のす
 とあせとの喻りありの程の夏原來此由良之助狂言の去ぬふ

寛延二己年江戸森田座(山下京四郎能名下り来て此狂言大當り

しが始し其以前故沢村宗十郎大岸宮内あり此仕内ありと京ふ
 て此人の狂言と出さく其仕内を能覚へ大坂操芝居竹本
 座あり木偶小名を取り吉田文三郎此忠臣藏と綴る彼助高屋
 の姿とく写活ひしを芝居好見功者のく覚へ褒美と夏
 其頃の江戸中村座小彼納子住居より大坂より可中森田座へ来て
 此假名手本より大當りを取りより根元の納子小此狂言とせ
 る當りを取り極め夏あま張合て同一狂言と出さくと員負連
 中のとめより一座一決しと出さく其時小至り市村座小古薪
 珍よりとて此座も相談極りく江戸一統此假名手本より三座

勤し原より薪水由良之助役へ少く堅き所なり
 模様と工夫。此由良之助狂言の坂東彦三郎小團扇と上り
 此は
 二役なり。然れども納子の和らみは理屈あり薪水の堅き中風情と
 可中の醉中の仕内小差別あり。此三と合射し梅幸いよく
 工夫と疑し今十七八年後ふりきとらに身を合と勿論人品は拙と
 得狂言の映合もよく。原来以前の持前の女形は屋敷風俗の
 けに取合もよく今此時小至り。此梅幸が狂言も成程の夏
 りく九月節句より十月廿日前まぐい十日も前小場の吟味とされ
 見物のあぬと見ゆと耻とら言ひて首尾よく大入つて
 連中の見立もまじく賑い。大手柄く。中略。明和五年三の

替り小忠臣藏と出て彼暇乞の時乃二役の俣よく大ふ當りと
 納子より姿見うとて京とを同取沙汰と云く
 所謂三ツの津の大立者。且此人常小天満宮と信仰して京とて
 北野江戸の亀井戸大坂の天満ホへ参詣怠らざり。其利益
 ちや管丞相と勤る毎小諸人感心し。りと言ひ。尤其身の行状
 樂屋入の行美い言ふ及ぶ見物の客と見舞との疎畧ある。夏惣
 稽古足揃と下袴と着。他人の藝と見たりも謹で寒暑姿
 と崩る。其廉直ある。夏雙の。尚亦平生は諸藝と学び鞠田碁
 將碁おび茶石州流と学び乱舞の勿論誹諧と嗜み手跡も拙
 也。天明三年卯十二月廿日没。行年六十七歳。江戸出勤乃

或家の藏小忠臣藏の
始終と字どり画巻物あり
其中刃傷の圖小同朋の
常持する形勢あり目
新らきと以てそり
模写ん



世に圓山應舉
の画なりといひ
けふ左も有べ
秋実小名画
なり

小井刀ハ二尺三寸の名刀
大原実盛の作



其文云上畧 短慮ゆ之堪
小井刀と抜打ふとぞんれども烏帽子の金輪よ
當り浅さゆへ二の刀よく肩先と切る是もとどれも又振上る所と
梶川與三兵衛抱らる依之五百石御加増下され都合千二百石なり
御掃除坊主閑休和常とくと刀と打落と後小銀靴扱下さる 下畧

年教中村座小三年森田座小二年市村座小廿五年都合卅年なり其
 始古薪水の聲とあり後大谷廣治俳名の娘小縁と組じ是小依と
 此兩個の縁は随ひ東武小於て日蓮宗旨とく淺草大東寺小妻と
 俱小逆修の石碑と建おろし此法号は還慶院永持日實と聞えり
 尤京都の故郷とく宮川町音羽屋半兵衛の子とく若女形尾上左門
 の弟子とく享保十五年戌の冬若衆形とく京柵山座小出しが初舞臺
 なり夫より若女形とく盛んありが宝曆二年申の霜月江戸市村座とて
 立役とめり故は京小在住の間は親音羽屋半兵衛の宗旨とめり浄土
 宗と守りたる則ち故郷小於て没せりとて法号解脱院清譽淨薰
 信士とめり其生質の直あるとてと想像べし

- 義士百五十年忌追薦の爲とて嘉永四年亥三月十七日京師寺
 町聖光寺小於て四十七士の遺墨品具と綴觀あり目錄と左小出と
 但し百五十回忌の正當の翌子年二月四日あれと故とく取越とありと
- 淺野内匠頭和歌短冊 攝留山川氏藏
- 大石内藏助扇面画 吉田兼亮賛 同上
- 同主税の書翰 同上
- 堀部弥兵衛色紙 同上
- 大高源吾詩短尺 同上
- 同内藏助書翰 有哥城南村岡氏藏
- 堀部弥兵衛所持鎗 同上
- 小野寺十内書翰 同上
- 大石内藏助画 同上
- 同初午詣圖 北村岡氏藏
- 大石内藏助團扇賣圖 同上
- 間十治郎書翰 南村岡氏藏
- 大石内藏助書翰 異名浪花中井氏藏
- 呼子笛 同上

- 同山科居住證券三通 浪花並河氏藏
- 潮田又之丞書翰 同上
- 神寄与五郎所持半弓 平安神谷氏藏
- 同自作矢筒 同上
- 大石内藏助書翰 同奥田氏藏
- 岡野金右衛門書翰 同上
- 奥田貞右衛門書翰 同上
- 神崎与五郎書翰 同上
- 横川勘平書翰 同上
- 萱野三平書翰 同上
- 大石内藏助假名文 異處村藏
- 原惣右衛門書翰 庄村氏藏
- 堀部弥兵衛短尺 同上
- 大石内藏助壽星圖 平田氏藏
- 同書翰 有哥浅井氏藏
- 同二通 大村氏藏
- 同横笛 泉德寺藏
- 同短尺 萩野氏藏
- 同所持茶入 平井氏藏
- 小野寺十内詠草 神戸氏藏
- 同所持短刀 佐々木夢庵所傳 同上
- 大石内藏助書月一字 枳東園藏
- 小野寺十内和歌 同上

- 堀部弥兵衛短尺 藤井氏取次
- 潮田又之丞書翰 同上
- 天野屋利兵衛書翰 同上
- 大石内藏助書翰二通 寺村氏藏
- 大石内藏助證券 平田氏藏
- 義士遺墨類屏風
- 小野寺十内書翰 有哥中江氏藏
- 義士各名書翰写横卷 十方院藏
- 小野寺十内和歌 城西中川氏藏
- 同 大倉氏藏
- 同内室和歌 同上
- 同幸右衛門書翰 同上
- 大石堀部書翰横卷 高橋氏藏
- 大石着用羽織 天野氏藏
- 同書翰 有哥松原氏藏
- 同二通 三村氏藏
- 大高原五短尺 三村氏藏
- 大石内藏助書翰 官井氏藏
- 小野寺十内書翰 官井氏藏
- 寺坂吉右衛門書翰 同上
- 吉田澤右衛門書翰 同上
- 岡嶋八十右衛門書翰 同上

○義士書翰類三卷 同上 ○大石内藏助書翰 向入浦井氏藏

○吉田忠左衛門書翰 同上 ○不破數右衛門書翰 同上

○堀部弥兵衛書翰 同上

以上

○同翌嘉永五年壬子二月四日義士百五十年忌正當小依て追薦の爲

浪萃谷町條天王寺寺町萬松山吉祥寺に於て四十七士遺墨品目と縦

觀せし當寺に則ち淺野家の菩提所あり表門小掲萬松山の額の

内匠頭長矩侯の自筆也且石塔義士の塔婆亦あり縦觀の目錄左小

○大石良雄書牘 並河氏藏 ○同 愛名同上 ○同山科移住證書三通 同上

○呼子笛 並間光興笛圖 同上 ○大石氏故宅瓦二 並河氏紹介

○大高忠雄書牘 同上 ○原元辰書牘 同上 ○岡嶋常樹書牘 同上

○和田喜六書牘 同上 原元辰弟也 ○矢頭教兼鎗 同上 ○大石頼母書牘 同上

○大石良雄假名文 同上 ○吉田兼亮執言書 同上 ○早水滿亮鎗 同上

○大石良雄書 森川氏藏 ○大高忠雄書牘 同上 ○大石良雄画 服部氏藏

○小野寺秀和賃房契 丸山氏藏 ○淺野家故邸瓦 江戸堀四丁目町中藏

○大高忠雄書牘 藤田氏藏 ○淺野家翠簾鉤 吉本氏藏

○大石良雄印籠 吉本氏藏 ○大石良雄書牘 永井氏藏 ○同一葉園藏

○同 松月堂藏 ○同 岡村氏藏 ○神寄則休書牘 葛城氏藏

○菅谷正利書牘 同上 ○勝田武亮書牘 同上 ○天野直之和歌 辻本氏藏

○大石良雄自作茶七 中井氏藏 ○萱野重實連歌裂 富森大高神津田氏藏

○萱野重實假名文 同上 ○大石良雄画 平井氏藏 ○大高忠雄詠草 上

○萱野重實拜領袴裂 山西氏藏 ○同連歌裂 吉田氏藏

○大石良雄自作古瓦硯 俵氏藏 ○同扇面画間光與禊 岡本氏藏

○秀和妻丹子和歌 以文堂藏 ○小野寺秀和和歌短尺 奥田氏藏

○大石良雄画 岡嶋氏藏 ○同邸古瓦 同上 ○天野直之書牘 藤井氏藏

○千馬光忠鎗 江川氏藏 ○中村正辰書 油屋の撥帳 藤田氏藏

○大高忠雄書牘 多治見氏藏 ○不破正種長刀 石村氏藏

○大石良雄画 平井氏藏 ○同書牘 同上 ○原元辰書牘 同上

○石束氏来書集卷 並河氏紹介 ○大石信清書牘 同上

○萱野重實佩刀 同上 ○吉田妻假名文 伊藤氏藏

○大石良雄書牘 頼朝卿の書添 藤岡氏藏 ○萱野常成書牘 鹿田氏藏

○横川宗利書牘 曉氏藏 ○矢頭教照書牘 同上

○冷光院殿和歌短尺 山川氏藏 ○大石良雄書牘 同上

○大石良雄扇面画 吉田兼亮賛 同上 ○同画原元辰賛 同上

○大石良金書牘 同上 ○堀部金丸發句 同上 ○大高忠雄詩 同上

○大石良雄自作茶七 松月堂藏 ○同自画盃摸寫 同上

○義士書牘集卷 岡嶋氏藏 義士姓名 大石良雄 奥田行高 中村正辰 奥田重盛

小野寺秀和 同 光與 勝田武堯 村松秀直 以上

吉田兼貞 前原宗房 大石信清 菅谷政利 神崎則休 片岡高房 茅野常成 倉橋武幸

○同書牘帖 伊嶋氏藏 義士姓名 早水滿堯 村松高直 吉田兼亮 同 光延

似元辰 三村包常 赤埴重賢 同 光胤 横川宗利 大石良雄下知狀 以上

野寺秀和 岡嶋常樹 貝賀友信 堀部金丸 前原宗房

雲錦隨筆卷之三

十四

○大石良雄所植五葉松

右の朝士牧系氏の意ありて大石良雄若年の時武州松戸のころ南家又止宿の御り
は松戸と求め奉りてくもつてくまは松戸にありて松戸にありて松戸にありて松戸にありて
松戸にありて松戸にありて松戸にありて松戸にありて松戸にありて松戸にありて松戸にありて
松戸にありて松戸にありて松戸にありて松戸にありて松戸にありて松戸にありて松戸にありて

當後観の補助人々

山川正宣 藤田早起 松川半山 奥田耕處
安部貞昌 鹿田山水 伊藤栢庵 曉 鐘成 後改晴翁 亦あり

○備後福山の藩中寺戸氏

俗称順右門和歌と善に
雅号しつの屋より樹 當時義士の追悼

小手向らまゝ長歌ありとて不出と

あやうしよとて 大石良雄字とて 免義士の百六十年

あまのけのためふようめ歌

あまのけのためふようめ歌。あまのけのためふようめ歌。あまのけのためふようめ歌。

あまのけのためふようめ歌。あまのけのためふようめ歌。あまのけのためふようめ歌。

あまのけのためふようめ歌。あまのけのためふようめ歌。あまのけのためふようめ歌。

あまのけのためふようめ歌。あまのけのためふようめ歌。あまのけのためふようめ歌。

あまのけのためふようめ歌。あまのけのためふようめ歌。あまのけのためふようめ歌。

あまのけのためふようめ歌。あまのけのためふようめ歌。あまのけのためふようめ歌。

あまのけのためふようめ歌。あまのけのためふようめ歌。あまのけのためふようめ歌。

あまのけのためふようめ歌。あまのけのためふようめ歌。あまのけのためふようめ歌。

あまのけのためふようめ歌。あまのけのためふようめ歌。あまのけのためふようめ歌。

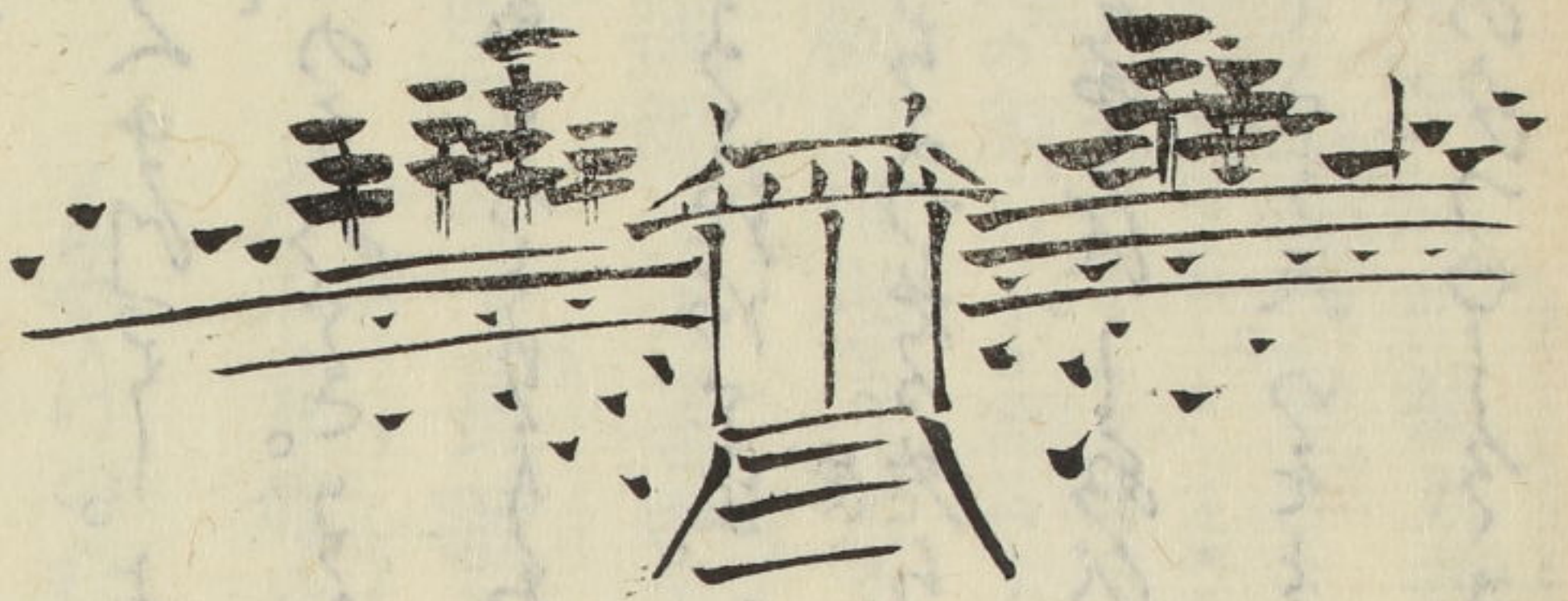
あまのけのためふようめ歌。あまのけのためふようめ歌。あまのけのためふようめ歌。

あまのけのためふようめ歌。あまのけのためふようめ歌。あまのけのためふようめ歌。

あまのけのためふようめ歌。あまのけのためふようめ歌。あまのけのためふようめ歌。

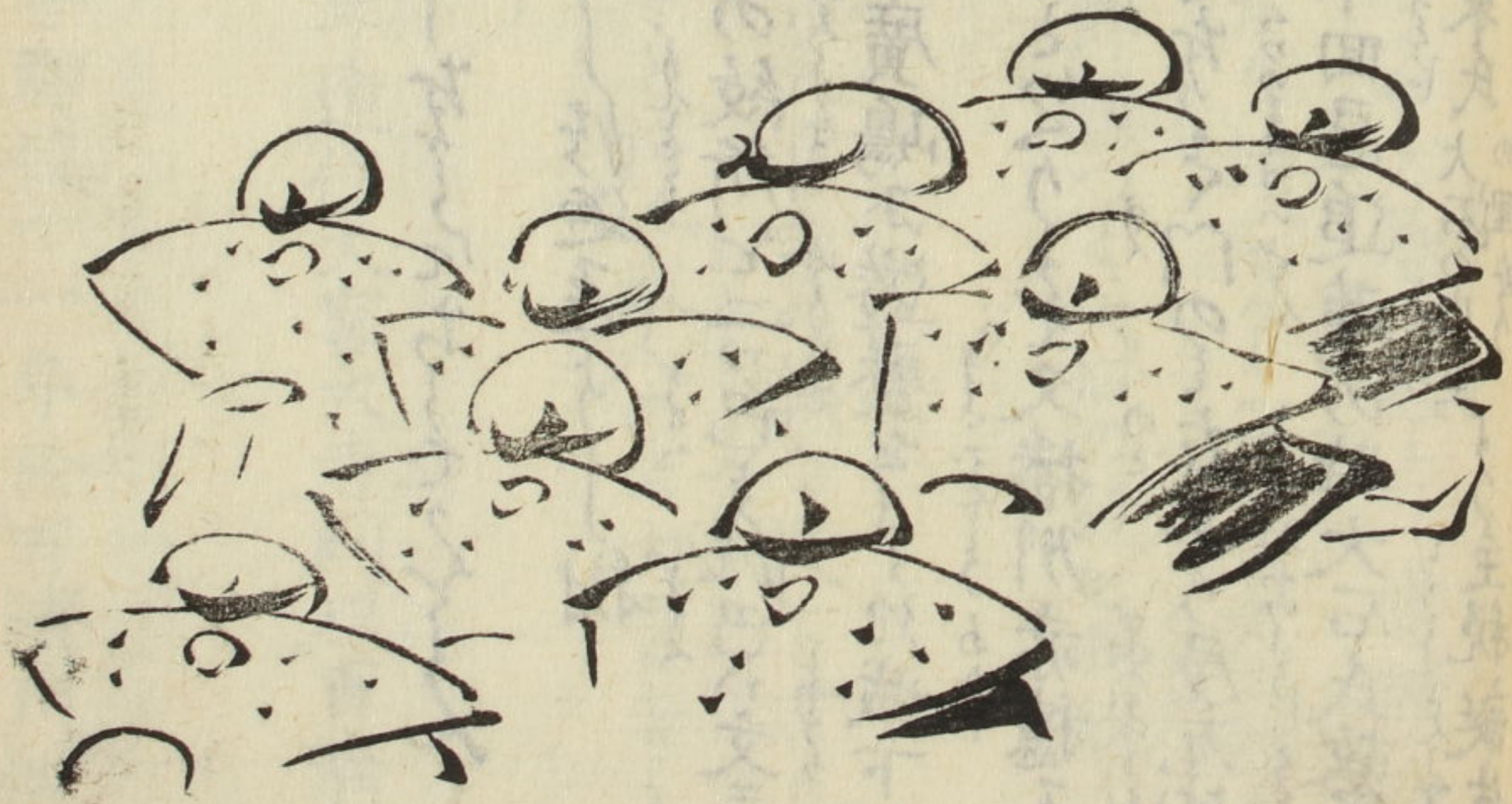
あまのけのためふようめ歌。あまのけのためふようめ歌。あまのけのためふようめ歌。

あまのけのためふようめ歌。あまのけのためふようめ歌。あまのけのためふようめ歌。



耳鳥齋筆
忠臣藏重冬物暮

右軍
筆跡
鋒無
於
彼名
手存
卷目
本



まゝりうへいな

の傍一紙

はたあふ山さうをのりまきまじりなうらちうでうとん

一法通屋より樹

〇一説ふ木偶つゝの吉田文三郎由良之助の紋所と二色と三巴の文三
 定紋なりといふ味一友人往年藝州廣嶋に遊歴せしに城下の
 人民大石氏の通行の三巴を見て其人と知るといふを又播州赤穂の
 遊行の人あり大石氏の故宅今ハ荒墟となりて門の存する屋瓦皆
 二色といふ。尤先年吉祥寺に於て百五十回忌追薦の時大石氏故宅
 の瓦と兩三家より出されり各二巴也又石東氏の内室より主税誕生

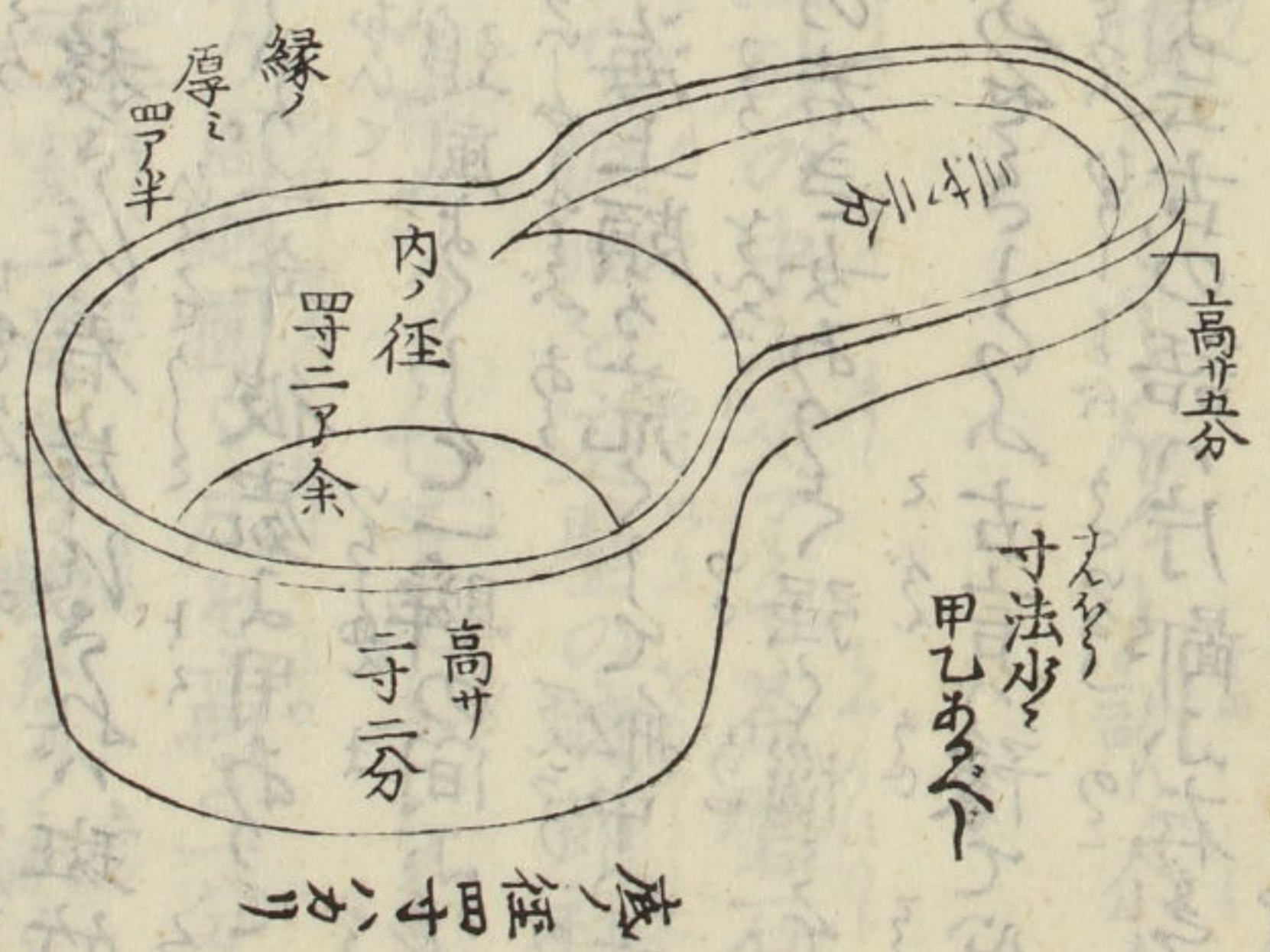
の砌産衣と贈らんとて紋所の三巴左と右と尋ね越き書牘を
 右縦観ふ出されぬるめく其実否明白なり。按らるる原来文三郎も
 二巴の紋とありや。又ハ此時よりハ文三郎謀つて大石の紋と我紋と
 奪ひしや知べし

〇南都の大安寺の旧号と大官寺といふ大官寺の誤なりと云ふ
 大安寺縁起菅原相の筆作といふ今奈良般若寺あり大官寺といふ或人の云大官寺と
 りのる有べし今奈良般若寺あり全く大官寺の誤なり

日本紀舒明天皇十一年秋七月詔曰今年造作大宮大寺。則以百濟
 川側爲宮處是以西民造宮東民作寺
 大安寺資財帳天平十六年牒 田村皇子即位十一年於百濟川側

子部社乎切排而。号曰百濟大寺淨御原天皇二年自百濟地移高市
 地六年改高市大寺号大宮大寺云云
 三代實錄 元慶四年大安寺三綱牒云飛鳥岡本天皇建十市郡百
 濟川邊号曰百濟大寺天武天皇遷高市郡夜部号高市大官寺云云
 右三代實錄及び大安寺縁起より大官寺と有るより其是非と定免
 り。める。小塙本の日本靈異記と見る。小巻下小平城官野寺云々
 と書る所あり。其本の跋云 符谷 望之 如其書体一依二古本 高野本 古人筆跡
 自有淵源不可妄改也。余る時。いつ。小宮と官とも書る。夏明白く
 故。大安寺流記改高市大寺号大宮寺の文。小據て平。大宮寺
 たり。夏發明より

○曝布ハクフの和州奈良より出ると上品と云故小奈良曝と云世小名高タカ。余
 程小南都の近在近郷の田舎の婦女の
 かのく此曝地の布と織と手業と其
 麻と粘水ネリのひひして苧環スズク小緑巻キナよ粘
 水ミヅと入る土器あり是と麻浸アサヒと号く俗と
 舌出シツデの形カタチはようて 尤素焼ソウヤキの土器ツクリし
 其地そのちより珍めづしうんとつとも形かたちの異
 あると以て好夏こうげの客茶碗きやくちawan薬くすりとつけて
 酒宴しゆえんの盃cup洗せんる。小用ちひよゆ一友人ひとの歌うたふ
 賤しんの女めが細布こぼ織オリある麻あさびう。浅あさ海うみのかき。るもあぞ



麻浸之圖

雲錦隨筆卷之三

〇十七

○櫻洲兵庫の津より浪花へ渡海の通船は日毎に在て其便利よき
 支隣を訪ふ均し衣風小順ひき時を移るば着岸はふが斑竹が
 句小涼しきやつい大坂へ一走り吟どり一年彼處又用あつて下り
 余後此通船に乗て飯坂まで時しも追風よく一瞬の間小浪華
 着るり然れども風強り程小濤高く海上頗る荒くして船中の乗合
 の男女酔る者半に過り其中に田舎の若き女ありと強く惱もた
 りせのくとの言て泣居り実よびせささるる古言の豫て心得
 せども眼前小人のくろく未因ざり諺よ云古の語は片鄙小存するとい
 斯る言ふを感心きり和哥具竹集つせくつせくもあつたり妹り
 わいどと詠りる心元あそ言し女の文あそ小書も其心うや又あそ

しきやうある言も云つて云く斯有田舎の女の言の船ゆれて
 昔く且海上の荒きをおそく思ひくつみせひと言るる長し文
 字よくの悒憤と書り悒へうまふ憤へつとるると訓り余まを
 又つとるとの意をんり
 ○大和国城上郡三輪明神の社頭の土砂の中小交を茶磨石とい
 へ小石あり。雲根志不見へるを以て彼地を遊歴の時節社家
 便て此言を尋しが幸ひ豫て拾ひ得る石ありとて予に与へらるり
 其色白く茶磨の如くうて上下平なり周廻圓く凡そ高さ一分半
 ゆり一分半の丸うて正中小穴あり。実小奇ある物なり永く所
 持しが近來画師松川半山子に譲りよめ

茶磨石

○讚岐国阿野郡白峰山より崇徳天皇の御廟御陵亦ありと六條判官爲義鎮西八郎爲朝の石塔左右小列七寺と綾松山白峯寺と号し本尊は千手観音と安置に御廟の門の隨身爲義爲朝の立像なり一年遊歴の時う此小逗田にて寺記及び種々の説話と因り此時郭公の落文とりつらと里人より得らる其品極あつた栗たの葉の如きを以て堅く巻らるが何なる文の形なりゆて奇なり按らるる彼蓑虫の如き虫の木の葉と巻て中小蟄一巢とゆらる者ありんる余有と時鳥の餌と爲んとて吐て飛行過つて落らる者なるを思へども里人の云く往古崇徳天皇此国小左遷の時年毎の夏蜀菟来つて啼音つくと因り召頼る小都の夏と思ひ出ぬあひく歎くを余り啼びて因り都を慕ひ

此里を山杜鵑と御製ありたり子規音ととらる更と啼べ翌る年の夏より一々年毎に来ると雖も声と発るん音つて奉つて印ありて此文と落し置らる其例あり今も猶御廟の辺に必ず夏毎に許多ありと語らる御いふも最哀なる物語なり然れども此説は似る夏佐渡国あり順徳帝もあつて其是非と云らん因り云南都の二皓亭故松壽奈良人形師一年の夏の夜杜鵑一声発ると思ふと其向ふぬ蔵の壁の的に死し地ふ落らる壁白くして鳥の目不見紛ひるや不便なりと頰て其地

落文の圖



長サ一寸余アリ

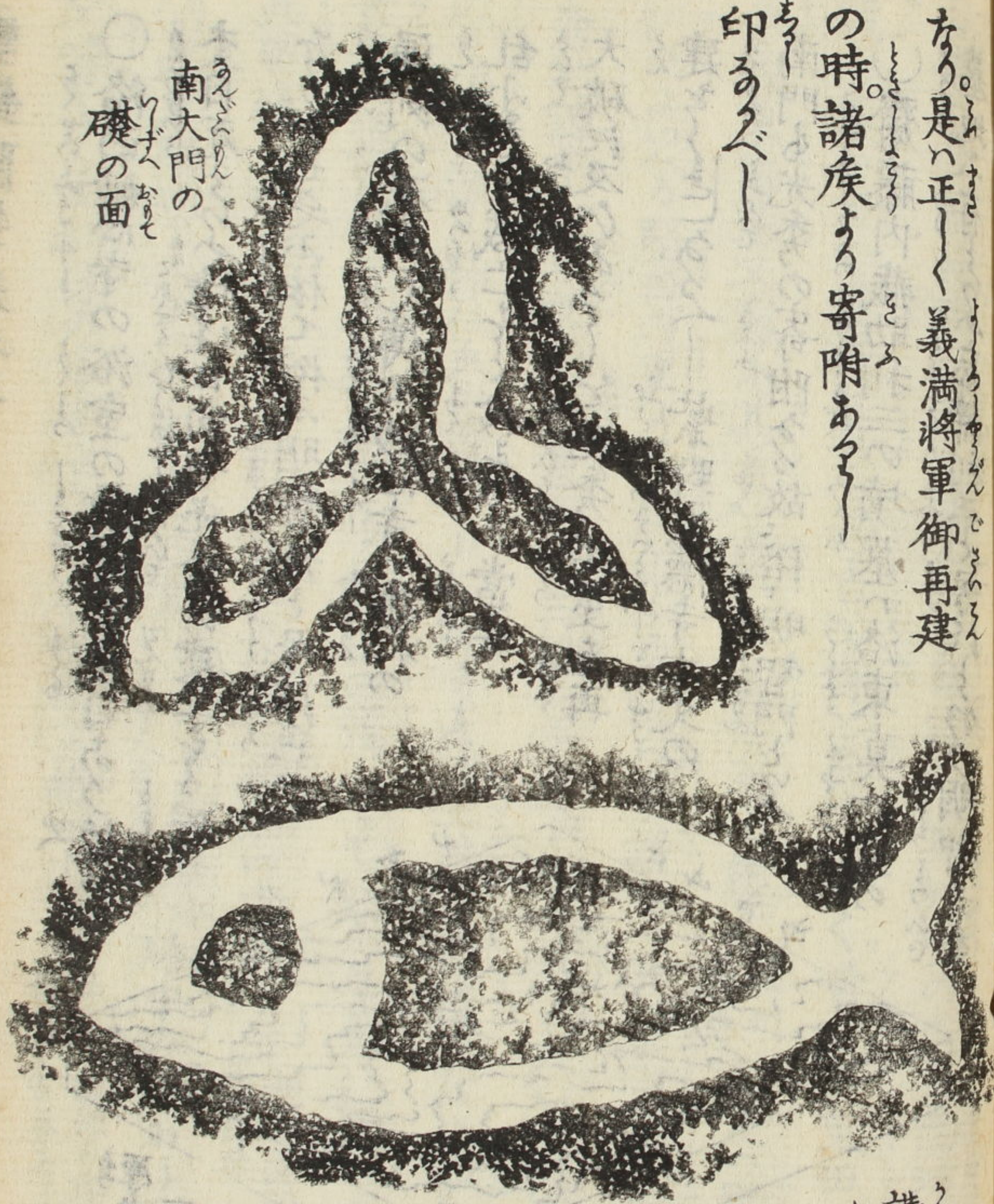
木の葉の巻るる

雲錦隨筆卷之三

至つと死ぎ鳥を携上見り小嘴を堅く閉り父ある人は是をひき見えし必ど血を含めりと有る此嘴を辛やと用とる小鮮血夥しく山て膝を汚き啼て血を吐とる是木の夏たんと語りし格物論云杜鵑三四月間夜鳴達旦其声哀而吻有血漬草木と云々実此語よく合つると言べし

○南都真福寺の兵火ありい雷火の爲小回祿もつ夏救度ありて再建故の如くなり今の伽藍は應永六年鹿菌院義満公足利三代將軍の建立也と和漢三才圖會小見へり然るふ又享保二年丁酉正月火災ふかき諸堂悉く炎上り其後再建ありて當時の如し又講堂南大門等の礎の色々の紋と彫刻あり今あらゆる小見ゆる魚の形三柏の如き者

なる是正しく義満將軍御再建の時諸侯より寄附ありし印あり



南大門の礎の面

講堂の礎の面

○洛西妙心寺の浴室の敷瓦も本目あり故に
本目瓦といふ惟任日向守光秀の建立する所
なりと云ふ依て俗に明智瓦と号し色は
通例の瓦色し傳云妙心寺の應仁の
乱小悉く滅亡せし按ざる本當寺

大破に及びありしと光秀浴室を再
建せしはありしと紫野大徳寺方丈の
南門も光秀の寄附あり故に俗に明智門といふ

○齋藤内藏助利三の墳墓は洛東真如堂の
墓地小有りしと忘諦利三と号しとあり明智光秀

山崎の合戦敗北の時大津に於て自殺し真如堂の中東陽坊の僧遺
骸と真如堂の墓地に葬る秀吉公塚と発するのく首と下栗田口は梟に

余後東陽坊又竊ふ其首と盗して再び之と葬る雍州府志然るに軍書講
釈より堅田の里に落行しとありしと妄説ありんが尤内藏助利三光
秀と諫めし軍配の良策を再三勸むといへども光秀これを用ひざるを
以て涙を流し惟任氏の運今日に究まらざる三諫めし聽ざれば則ち身退の
君子の道にして其難を避ざらば則ち士の道にして終小弟大八郎利次と俱不
此戦場討死と云大八郎生年廿五歳内藏助四十歳と云

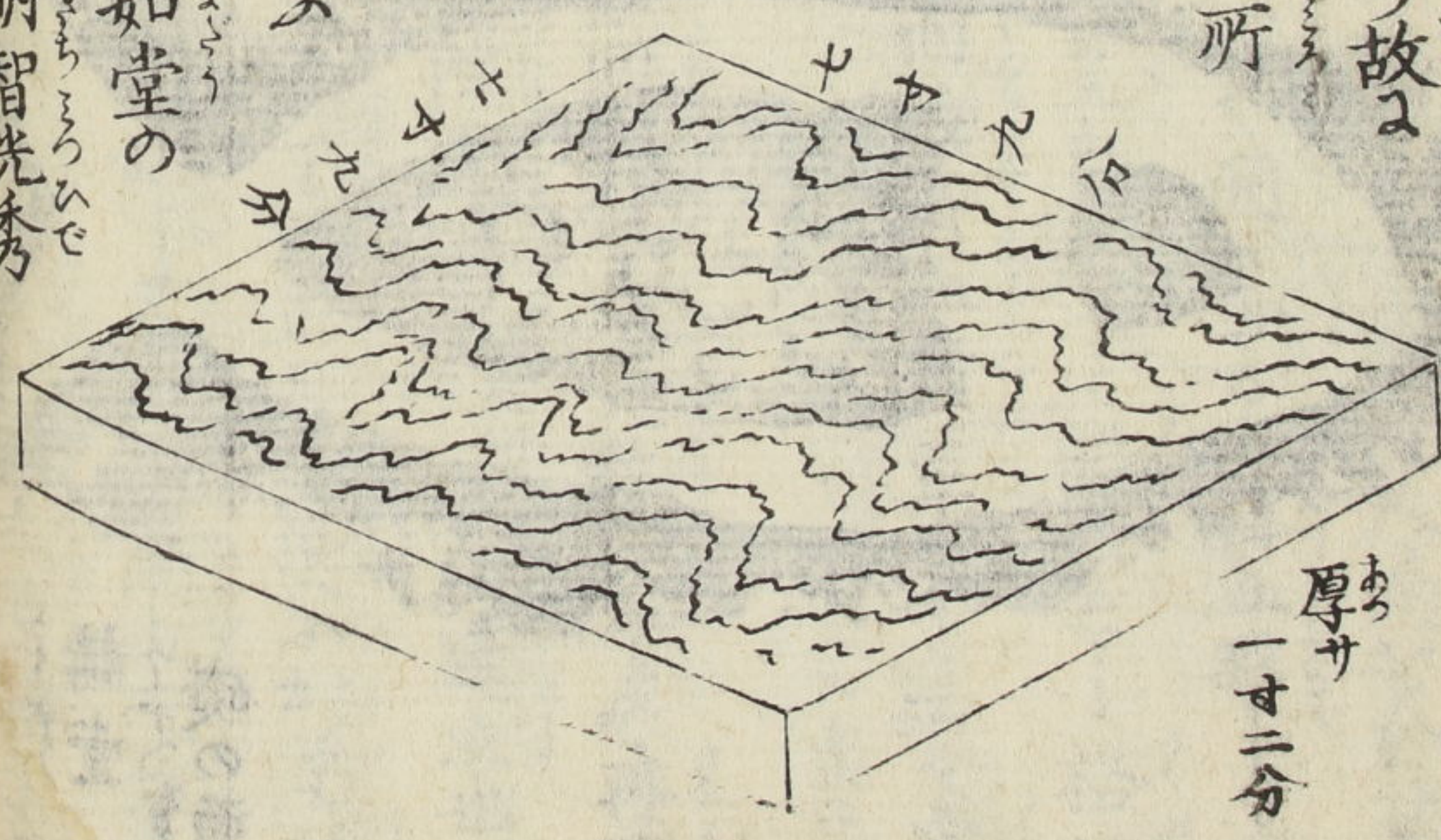
○此東陽坊といふ洛東真如堂鈴鹿山真正極樂寺塔中の僧ありて茶道
と嗜して千利休の弟子なり明智光秀の織田有樂名は長益源五郎と稱し信
長公の舎弟なりて茶道は

和州諸將軍傳抄要

此戰場討死と云大八郎生年廿五歳内藏助四十歳と云

○此東陽坊といふ洛東真如堂鈴鹿山真正極樂寺塔中の僧ありて茶道
と嗜して千利休の弟子なり明智光秀の織田有樂名は長益源五郎と稱し信
長公の舎弟なりて茶道は

和州諸將軍傳抄要



名と得 一ノ 後少く茶更と学び教奇と樂一ノ 曾て東陽坊と茶道の友
なり程内藏助利三一ノ 殊小親一ノ 此此僧住教奇の名誉あり
掛物一ノ 尊圓親王の六字の名號と利休が好一ノ 紙表具一ノ 是一幅
伊勢天目一器一ノ 一世の間炉小火と絶一ノ 或時秀次公の近臣と
請一ノ 茶湯をせ一ノ 薄茶と点て云一ノ 各々の暇一ノ 方々一ノ 薄茶
手間一ノ 大服一ノ 進一ノ 程一ノ 吸茶一ノ 成一ノ 点出一ノ
此趣向節小應一ノ 宜一ノ 利休も稱美一ノ 世人も數誉一ノ 其項
薄茶と吸茶一ノ 爲一ノ 大一ノ 流行一ノ 彼僧の名と假一ノ 大服一ノ 点一ノ
東陽小する一ノ 言一ノ

○京洛猪熊三條の南小舘速神社一ノ 是は往昔刑部省一ノ 断獄刑

刑部卿の下一ノ 刑部大輔一ノ 刑部丞一ノ 斯辺一ノ 獄と断一ノ 以て死罪
大判事一ノ 囚獄正一ノ 囚獄正一ノ 獄舎一ノ 掌一ノ 官人一ノ 獄と断一ノ 以て死罪
と行一ノ 故一ノ 刑死一ノ の人一ノ の爲一ノ 此社一ノ と建一ノ 祭祀一ノ と修一ノ 而一ノ 之一ノ 薦一ノ
毎年八月一ノ 小神一ノ 夏一ノ あり一ノ 死杖一ノ 祭一ノ と一ノ 或一ノ 又一ノ 活速一ノ 祭一ノ と一ノ 雍州府志一ノ
見一ノ 又一ノ 一説一ノ 小千本一ノ の閻魔堂一ノ 引接寺一ノ 元一ノ 壬生一ノ の地藏堂一ノ 浄光院一ノ 或一ノ 寶
懺寺一ノ 本一ノ 行一ノ 念一ノ 仏會一ノ の狂言一ノ 元一ノ 是一ノ 死刑人一ノ の爲一ノ 小執行一ノ 所一ノ と云
毎年閻魔堂一ノ の前一ノ なる普賢象一ノ の櫻花一ノ の開一ノ と期一ノ 寺僧一ノ 一枝折一ノ
京兆尹一ノ 小献一ノ 即一ノ ち米三斛一ノ 五斗一ノ と賜一ノ 之一ノ と以一ノ て七一ノ 日念佛一ノ の料一ノ 以
是一ノ 入一ノ 刑死一ノ の者一ノ の爲一ノ 小修一ノ 法事故一ノ 如斯一ノ 公一ノ 施米一ノ と下一ノ
○洛北一ノ 獄門寺一ノ 獄門町一ノ と一ノ 則一ノ 近衛通一ノ 出水一ノ 西洞院一ノ の西一ノ 入一ノ
獄門町一ノ と一ノ 往一ノ 古斯一ノ 所一ノ 獄舎一ノ あり一ノ 罪重一ノ と者一ノ 之一ノ と斬一ノ 首一ノ と獄屋一ノ 乃

京洛猪熊三條

門外小梟に倭俗るれり梟首と直小獄門と称を故に此町の号と
 近世に至るまで大なる槐の木あり罪重き者此樹下於て斬り此
 所は梟首に後世まで尚御即位改元亦赦を行く時五判官此所
 来つ粗其式ありし其獄舎ありしは西福寺といふあり本尊
 薬師仏に聖徳太子の御作と此寺刑戮の場は近きを以て結縁功德
 為に刑死の人と薦と之は依て俗に獄門寺と称を曾て豊臣秀吉朝
 鮮征伐のとき大仏殿の前小耳塚と築ぬ西福寺の僧と請て耳塚
 の供粮を遂しんと欲を然も寺僧之と背け秀吉大に怒り遂に寺
 産と没収し寺と洛北七野の社の辺に移し今小獄門寺と号本尊と
 出若菜師といふ獄舎の辺ありし時寺産百石ありしといふ

○朔旦冬至といふ霜月朔日小冬至の當り大内あり殊に祝つせ
 非常の大赦行る文化中は十月朔日の冬至ありし時罪人大赦
 の御式あり則檢非違使の官人以下役々馬上行列よく獄舎第へ赴
 き門外まで登元より罪人と引出し種々の式あり往古より例遺りて
 檢非違使を遣はる檢非違使は入王五十三代淳和天皇の御宇天長
 年中初め之と置る異朝は尤もんと重む唐虞の代は皋陶とす
 此と大理といふ周礼立官の日大司寇即ち此任也と云々但檢非違使は
 同別當人 唐名大理卿 同佐 左右あり唐名廷尉 同尉 左右大尉少尉あり 同志 左右大志少志あり 同
 府生 左右あり 往昔源平の武士諸大夫といへども多く之を補する源義經
 大夫尉より剩り昇殿の廷尉より

○逢坂の関の清水小影見えて今や引らん望月の駒と詠らるる駒牽
 駒迎の夏めて今無き夏も歌の題より近く出ると題林抄は曰
 駒迎とつる年毎小八月十五日東の方より駒を奉りて殿上人の逢坂へ行迎
 ひく是と牽て九重の中へゆく泰ると駒引も駒迎より望月きり
 原をどつる皆御牧の名と云々江次第小日本八月十五日し而して朱
 雀院御国忌不依て十六日は改め用の頭書 信濃勅旨の牧十五ヶ延喜
 式小載るゝの一也天皇南殿は出御御馬を分取し出御無の時建
 礼門の前大庭は於て之と牽分し裏書は云上野九牧延喜式廿八日云
 七日甲斐の勅旨の牧十七日甲斐の穂坂の牧廿三日信濃望月の牧廿五日
 武藏の勅旨の牧立野の牧又十五日信濃の勅旨の牧廿八日上野九牧以

上六ヶ日延喜式小見たり此外永平官府十三日武藏秩父の牧廿日同
 小野の牧の御馬と貢と云々 右の毎年奉る 今其古例より毎年
 七月中旬後小関東より京兆尹の御第へ御馬到着は則ち千本御第
 の内は御厩と修理しとんと飼ふ人馬より小別火もと不浄と堅く禁
 び八朔辰の尅禁裏は献とる 御馬は二疋忝り一疋進覧は供ふ 尤御馬百疋
 献上し九十九疋は御馬代も納めとる 二條御城御加番の中 実や治る御代の
 御式愛度りるる御夏なり

○京師の或縉紳家小藏しある騰黄と云る神獸の圖あり其形狐の如
 くめで異なり一説は此獸は神代より吾朝不在と二十年ありて唐山より
 渡る其時彼土は黃帝の代より帝とれ乗して天下を周旋始て馬小

乘りとりと衆小教へあり。

所謂黄帝八翼の龍り不り乗りとて

天下を遊ぶとりのこ此騰黄のまと

とて御即位の時に紫宸殿に張らせあり

獸形帽額の内に此騰黄の圖あり

軒轅本紀云有騰黄神獸

其色黄狀如狐背上有兩

角龍翼出日本國壽二千

歲黄帝得而乘之遂周旋

六合所謂乘八翼之龍遊

天下也故遷徙往來无常云

雲笈七籤卷之一百出

一本云龍翼馬身一名乘

黄一名飛黄或云古黄

又曰翠黄出日本國

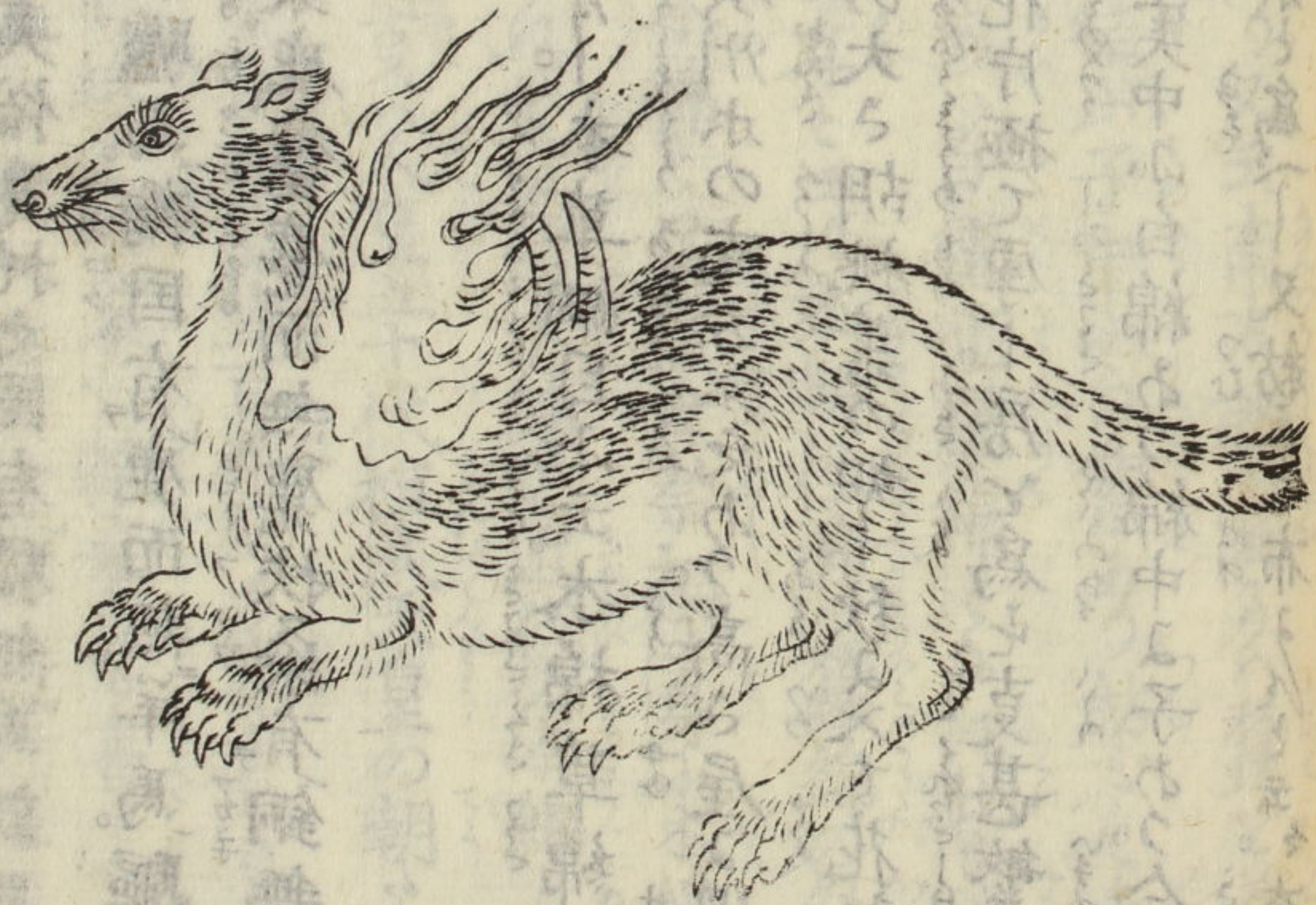
壽三千歲日行萬里

乘此令人壽二千歲云

六典曰宋齊梁陳皆

有車府乘黄之官今太

僕寺有乘黄署即其事



○劉氏鴻書卷之八地理部曰夷俗烏托之國有驢無馬新羅無羊勿吉無牛羊琉球無牛羊驢馬鞞國有鹿而無羊馬驅度寐有豕而無它畜朝鮮有麋鹿麇麇而無麕扶桑有銅無鐵

日本無木棉云云

按ア古コ説セツの如ニく本朝木棉キハなり。本草綱目キヤク小云木棉草綿キハの二種ニあり木キと古貝樹コクと名ナく交州廣州コウ木の南方ミナミふ之ノあり高タカさ屋ヤは過スぐ。大オホさ抱アりり其枝桐キ小侶コて其葉ハの大オホさ胡桃葉カの如シ。秋アキ入ルて花ハと用ユく紅ベニめて山茶花サの如シ。黄蘗ワウあり花片ハ極メて厚アツ。房ハと爲シと夏ナツ甚シ繁シ。短ミ側ソバ小相コ比ヒふ実ミと結ムぶ大オホさ拳コブのト。実中ミ小コ白綿シロあり綿中ワタ小コ子コあり今人イマ之ノ斑枝花ハとシ即チ木綿キハとシ縷イト絮ワタと爲スべし又紡イトとて布ヌメと云フ。木綿キハハ

梵書ハ小コ睽婆キヤ或シハ迦羅婆カ劫キヤクとシあり又云南方諸蠻ミナミの蠶カと養カじ惟タ娑羅木サあり高タカさ三五丈サウ子コと結ムぶ子中コ小コ白絮シロあり紡イトとて糸イトに織オリて幅ヒロとシ娑羅篋サ段ダンと名ナく或シハ白氈兜羅綿ハクとシ此コ亦モ古コ貝カの類ルハ各方カの称呼シヨウの同ドかシる耳ミミと云フ。本朝キヤク往昔コノハ蠶綿カの外ソトとシ穀コの皮カとシて衣服イとシ木綿キハとシハ後世コノ祭祀カヒハ身ミ小コ木綿手キハとシ彼カらシ上古コノの衣服イとシ象ゾウとシハ上古コノの木綿キハとシ近代コノの木綿キハとシ物モノとシハ尤モト本朝キヤクハ草綿カの始ハジり夏ナツハ人皇ニギ五イ十ジウ代ダイ桓武ヘン天皇テンの朝チヨウとシ唐タウ土チ宋ソウの末マツ世セ小コ始ハジり然シカハ唐タウ主シュより日本ニッハ九ク二ニ百ヒャク年ネンづク先マツづクり又マタ上古コノの穀コとシハ今俗イマ小云楮コとシ則スレバ紙カミ小造コる木キと穀コ桑カとも書キり往昔コノの布ヌメ小織コて木綿キハとシ稱ナヅケ今イマハ普フ紙カミ小造コる木綿キハ今イマの紙布カミの疎畧ソある者モノあり

〇九七

○文政四年辛巳六月下旬阿蘭陀国より駱駝牝牡と持渡る同五年浪花難波新地に於て観物と凡実小往昔より未だ渡らざる珍獣と一説に亞辣比亞国の内黒加の産ことのみ。牝五歳高九尺長二間其頭羊に似て項長く耳垂と脚は三の節ありと三小折は背小肉峯ありと痛のびに其声圓と曰其物喰くと一度小飽すと喰ひ四五日食と其性寒と喜び熱と惡む其糞烟直小上つと狼烟の如し其力よく重きを負ふと千五百斤に至る一日小百里行事最安し又よく土中の水脈を知るると小本草綱目云駱駝の西北番の界あり野駝家駝あり人家の中ありと家駝と山野にすむと野駝と其色蒼褐黄紫教品あり其性寒小耐熱と惡む故は夏至に毛と退く。冬小至つと毛と駝小作る。能泉源水脈

風候を知る凡伏流して人の知らざる所を駝泉脈を知て足と以て地小跑にこれと掘まば必ぞ水ありと云々。百品考云獨峯駝本草綱目云李時珍曰土番に獨峯駝あり西域傳云大月氏国は一峰駝出背上一峯あり隆く起つと封土の如し故は呼で封牛と爲亦牖牛と云。按ざるは文政五年観物と云々と聞か小形牛小似て大く高さ九尺許頸至て長く首羊に似て恰好より少く目の上は毛長く聚り眉毛の如し口は下唇微く長く前歯は下のより上の齧歯なり。奥歯は上下より小なり。草と食して牛のごとく齡の全身蒼褐色ありと格別長き毛は尾の豕小似て本は短毛ありて末小長毛あり。脚は三節あり他の獸小異なり背小肉峯一あり大なる痛のびに峰上小長毛ありと四方小垂る蹄は肉うして指頭小少き爪あり。牛馬の足小異り

駱駝之圖

首の落脊中の無^くは^りなる^り
子^こ孫^{そん}ら^んく^くて^て方^から^らい^いら^らん^ん



鳴駝出西域
衝尾足連々
漢驛凌雲去
胡兒踏草牽
當時識風候
過磧辨沙泉
老覺肉峯側
猶蒙錦帕鮮

右宋梅堯臣詩



性至つと柔和ありて能人よ馴る糞の最小く圓し枇杷の実の大きき是即
独峯駝の良し真の駝の脊上は肉峯兩隆起て鞍の形ありと言ひ

萬国新話云亞刺皮亞国へ都兒格は属は國中少數百里の郊原あり

何方を涯とも云ぬ沙漠多し云く沙場を行小駝を用る此獸百貫目

の荷を重しとき昼夜馳て勞多し支を知らず其脚長き故に沙漠を

行小足より一日小麥團子の大きき芋魁をどあつと五ッ六ッ食し又乾

草と齧む水の十日狹し程一度飲て腹中よ能水を貯りよ依る曠

野の中より水小乏しと時其腹を剖て水と掬む清冷めて飲り

堪らりと其骨肉皮毛悉く薬用小充つと云々

〇同時小駝駝の觀物小屋の傍辺ありと黒猿と見たり其形小く丸

長一尺二三寸許尾長く全身黒く腰の辺白し是亦奇とする不足り

和漢三才圖會小獬狽又魼魼とも書る獸あり全く是類ひあは云

魼魼は此乃ち猿雉の属より黒身白腰帶の如く手よ長き白毛

あり甚だ捷く樹上小ありと騰躍と飛鳥の如しと云々

〇年々歳々難波新地おひ所々の芝居よ於て種々の技藝珍奇の

獸類と觀物よ真行ととも流行あり流行らぬ有と真行人の損益

甚し就中近來介の賞と者ありて流行りて文政三年辰の春

浪花堀江荒木の芝居よ於て看々踊と号し清朝の出扮より異様成

踊と真行より其囃子の鳴りの踊の形勢と珍しとを救流行り前後

よ双あき大當なり其後時他所より真行今も猶其風色のりて諷ひを

看々踊打扮之圖

大鼓

蛇皮線

鼓弓

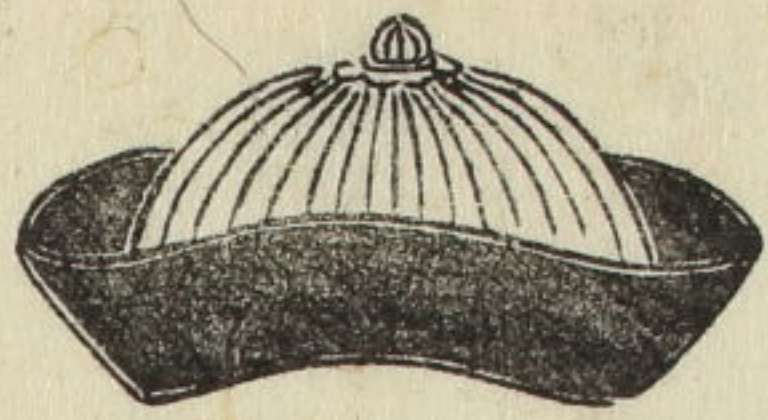


鏡鼓



是ハ踊の番ハ非比始めハ樂屋ハ
 発る所の形勢ナリ又踊終リテ樂
 屋ハ入リもくの如但踊の風色ハ
 世人専ラ知る所ハなごる界ハ
 装束ハ圖のて濃茶色の木綿
 の如若くハ唐木綿ハんり。
 優人ハつらまも崎陽の者の上。
 按ずるハ清人彼津ハ滯留中戯れハ
 踊躍ぬると見慣ハ者ハんり。
 鼓弓の弓ハ竹と用ゆ三絃ハ琉球風の
 蛇皮線ハ鏡鼓とよみの異なる器ナリ
 九八寸余の細鉄と三角ハ藪系ハ器ハ火著
 の如き器ハんと鼓ハ頗る其音ハ

大袷



暖帽



鞋子



踊り用ゆる服は是れ小異なり畧は是れ雜方の
装束と都て黒縹子襟袖口は花色なり

看々踊或ハ鉄鼓躍もつる。鐵鼓ハ南蠻鐵と以て作るもの小鼓弓と竹
まぐ措るど皆外夷の風俗なる也。太鼓ハ通例の器めて異なる也。又
此踊の次ハ蛇とつる。夏と爲り俗ハ蛇踊と云ふ。是ハ蛇の形と木綿の
作り彩色と也。杖と以て之れと動り遣ハ夏自在なり。珠と持るもの
前ハ進んで逃る是と目ぐやと蛇の追蒐る形勢最鍛練者ハ按ず
ハ蛇と遣ふ。清朝もく正月十三日より十八日まで六日の間燈夜と云ひ
町々家毎小門前小燈籠と燃ハ種々小飾り酒宴の夏あり。此間ハ
行燈と云く若輩籠あく龍馬獅々魚鳥の形を作り紙或ハ絹もく張
るハ彩色と着其中小火と燃ハ銅羅太鼓もく。雜ハ此燈籠を
つハ町條と歩行ハ就中龍燈ハ長と凡四五間をうり造り杖挺の蠟燭



とやぐりの
蛇躍之圖



と燈と。多人と數と。遣つ。清俗せいぞく紀き因いん小見せうけん。全まく是これ小慣せうかんひと
燈と篋けつと轉てん。木綿もめんみと作り彩色さいしきと着つけて是これとつらひ一曲いつくとち者ものあは

朝鮮国太鼓之圖 一名水鼓

。總て桶の作方なり

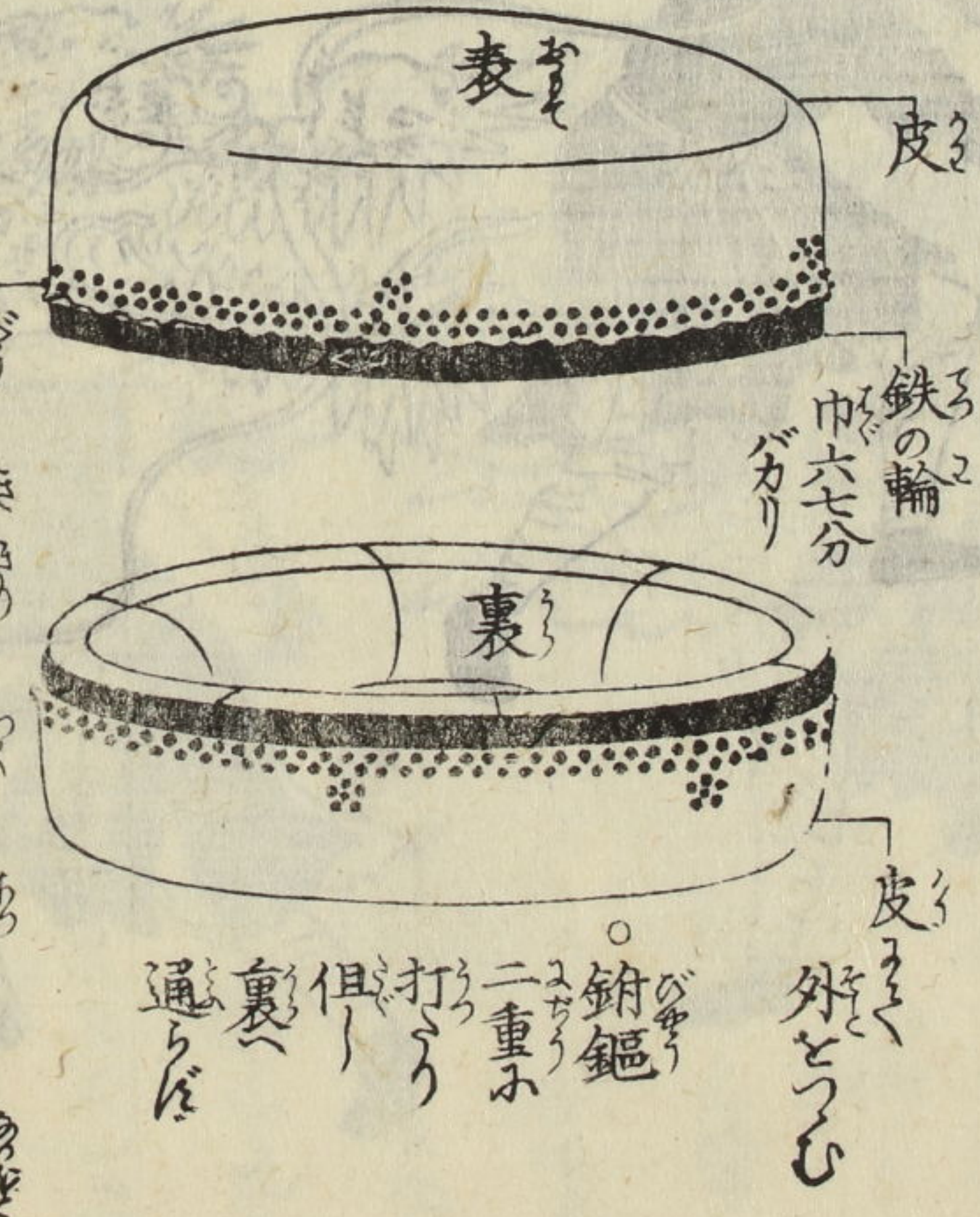
裏の方と少く窄め

つらひ音の籠るゝめの

仕法なるべし

。徑一表一尺四寸餘高さ四寸一分

又小たりも有く大と定りなり



。木き桐とうと作り厚あ六七分ろくしちぶん中程ちゆうぢやう
とく一い寸すん七しち分ぶんの教けう都と合が六ろく枚まい

〇片ぺん面めん鼓こ朝鮮ちやうせんの器きありて唐物たうぶつの骨董こつどう舗ぽのの間ま有あり珍ちん一いつく
どとどとも因いんよよりり此こ又また出いでで。其その製せい凡ぼん盥げんの底ぞの無なめめ如ごとし。
鉄てつととりり輪りんと。片ぺん面めん小皮せうひと張は彩色さいしきと蟠ばん龍りゆうと画え々々。尤な大小だいせう種しゆ
あり。又また水みづと一いつ杯はいとと後のち鼓こ必かならず其その音ねととらら。故ゆゑ小水鼓せうみづことも云

雲錦隨筆卷之四

浪花 曉 晴翁著

〇文政二年己卯の春聖德皇太子千二百回忌さうりうろきてんぎ攝州四天王寺
 〇於く佛會執行あつて并ふ靈佛靈寶亦開帳あり。此法會の時浪
 花の籃職市田庄七郎道頓堀上大和橋が籠細工の觀物與行こじんが古今稀代
 の大當りなり其品々の大畧ハ印度の僧の大像九丈天人一丈舍利弗同上
 大王同上金剛二王同上多門天同上阿修羅王同上賓頭盧同上此余羅
 漢諸天神救多長凡上同ト畧之大龍六丈獅子一丈牛同上馬同上
 熊同上矮狗六尺龜一丈鳳凰一丈孔雀同上四足鳥三尺緋音呼一尺
 鷄一尺烏三尺翠雀同上鶴四尺蝸牛一丈守宮九尺蜥蜴同上蚤五尺

雲錦隨筆卷之三

蝮蛇 一丈 蚯蚓 同上 螞蟻 九尺 蛤蜊 同上 白蛇 二丈 芋虫 九尺 蟻 五尺
 蝦蟆 六尺 蜘蛛 一丈 蜈蚣 二丈 金龜子 五尺 莎鷄 七尺 鬼 八尺 鉦 一丈二尺
 木魚 周廻一丈 右鬼 鉦と木魚と一荷小擔の形勢面白き趣向尚此余を畧ん

○時節の流行詞やど可笑い非ト前ふり駱駝の牝牡さうくさうあり。
 世人夫婦連うく通行さると駱駝といひ時花さう。余後何処の者さや
 知らん老人夫婦土瓶のひびき破るると直し漏れと止ると渡世と。夫
 婦連うく土瓶のいうけくと呼ぶうて浪花の市街と日毎廻り。
 又駱駝の名の廢りく夫婦連立行と土瓶のいうけと異名して言さや
 らる。夫も後まの略語して塗掛とのいひ或は土瓶とつり言て刺さる
 夫婦の中は小兒と連うると急焼と連る杯もつり言て其頃文政七年の

中村歌右門 梅五 角の芝居うく大切の所作更ふ此土瓶の塗掛と取組
 親仁の出扮うく團扇と携へ此うらふ老婆の顔と画き是れく兩人
 の所作とさう。最奇いと評判より。此時歌右門より此いうけ屋
 夫婦揃の単衣とと一程ふ其名世は高く岡へく益土瓶いうけの流
 言盛んなり。此狂言の所作は合を地唄あり 興又委く 但し其外題を
 莫怪踊化姿 是はさう文化十年小七化と勤め同十三年 其役々の傾城稻荷の
 修行者 白酒賣 奴僕 鐵五郎 土瓶塗掛 融大臣 瞽女 鷲娘 関
 羽 ともく坊主ホとさうく十二月小表を趣向なり 右土瓶いうけの所
 作の唱歌ふ云く

睦もや日の六月も厭ぬ。御存ぞ知らま。夫婦づき人ふ笑うま

あざりよが年不足も何のその昼もかまらん入て見く溢とぬ
 手際いけ屋と自慢雑り行過る待設る女房の夫と見ゆる
 胸づつ。こ何ぞのふ土瓶さんららん斯成る並大ていの夏ふア。
 初の御見の其ひう床へも入ぬ其前よりけの前も
 何のその翌あざりよと終

みく心で愚る床急ぎ。
 昔の私も投嶋田やうの
 下遣手へ干大根のどろ
 らへヤア吐く猫股ぞ。
 其手で是やぐくたのめさん儲ふ



乗地でそる節たでらふ出も好々とや土瓶いけが當りど

○浪花の顔見世狂言の外題と東都三座の道行所作夏の外題の
 附く所謂常盤津の祝ひの語と置き或は其一座の首領又は新泰俳優の
 表徳と組合とを趣向とて終る字義の論にうらうらる夏も間多
 中村歌右門梅玉が娘道成寺の外題の許給拙振袖とるを七変化を
 所作夏に慣らると七変化介後九化の時其九繪彩四季櫻と題す。
 莫怪踊化姿と附會の甚しと者あるべし。東武の作者瀬川如皋が
 瀬川仙女始菊之照後路孝又改仙女とりのが娘道成寺の所作夏小珍し
 りのが振袖と題す。娘道成寺の中村富十郎慶子が元祖とらる。その
 頃の江戸紫娘道成寺或は京鹿子娘道成寺又は似紫娘道成寺など

題きとぞ近來中村歌右門せんや 歌雀あど 東都より上り時とき 御目見狂言ごめけん とてとて 姫山姥ひめやまば のもやぶるの場たつ と勤めし時とき 七重膝希八重桐ななえひざのきよやち と題き。狂言綺語きげんぎご の作例しよれい を最面白さいおもしろ。

○歌舞妓うぶま の外題げだい 小傾城こせいじやう と置あ 夏なつ の宝永正徳ほうえいせいとく の頃ころ 京都より始り終はじまりはつひ 小京こきやう 撮と るも風かぜ のと成な まる。春はる の假名なま よくけいせの次つぎ 又傾城せいじやう 秋冬あきふゆ の契あひ 情せま と法則はふそく と定めしつゝ非ひ たり下した の文字もじ の續つづ けがふよるべし。又傾城せいじやう の文字もじ と外題げだい の中なか 小用せうりやう ゆる目出度めだて 傾城せいじやう の始はじ 国花こくはな 萬葉傾城まんやふせいじやう 櫻味さくらあじ 方原傾城はたはらせいじやう 容氣りやうき かと附つ たり。故名こめい 人の作者さしや の字義じぎ とよく穿鑿せんさく して聊しよ も誤あや たり。近來ちんらい の新外題しんげだい ちの拙つた きりの少すく づい。諺ことわざ 云い 流行りやう 行ぎやう 芝居しばい の外題げだい ちと云い 唯古ただふる と世よ のも暮く りと兼好けんこう の言こと ちも宜よろ かり

○淨瑠璃じやうるり と五段ごだん 小綴せうてい 夏なつ の能のう の番組ばんぐみ 小同せうどう 初段しよだん の腕能うでのう 二に 修羅しゆら 三さん の葛くわ 夏なつ 四し の腕うで 所作しよさく 第五ごだい の祝言しゆげん 尤まづ 重おも んどるの大序だいのち ありと大序だいのち の一座いざ の立物たちもの たる太夫たふ の勤つと むべき第一だいいち の大役だいのやく 先まづ 其その 日の祝義しゆぎ とし且かつ 諸見物しよけんぶつ への一礼いちれい の為ため たり則すなは ち一部いちぶ の始はじ める。末々まつまつ の輕かろ き太夫たふ 小任せうにん ととて夏なつ の非ひ だ。爾雅にんが の釈語しやくご 云い 序ち の叙じよ たり緒いと こと然しか らとれ其綱要そのかうやう と奉たが へ夏なつ 蠶さなぎ の糸いと と拙つた づるが如ごと くと云い 序ち とし字じ と糸口いとぐち と訓しん し其糸そのいと の口ぐち 乱らん まるべ始終しじゆう の乱らん まで感あ べ。其本そのほん 乱らん まる未ま 全ぜん くと云い 言こと ども然しか らる中古ちゆうこ 以来いらい の大序だいのち としとて輕かろ き太夫たふ 小語せうご らを置あ 置あ と風かぜ ととる。是これ の見物けんぶつ も未ま だ入揃いりぞろ がる間の役あひだのやく ゆへ斯ごと くの成な るべし。然しか らる老子らうじ 經きやう 云い 曰い く天下てんか の難なん 夏なつ を必かなら ず

雲錦隨筆卷之四

易たより作おこる天下の大おほ支しい必かならず細こまあるより作おこると云いふ。然しかまば何なにまの
 場ばとてと緩ゆるくせよ為なるにあらん就すな中大おほ序しよと大切たいせつと云いふ。尤なほ歌
 舞ぶ妓ぎううくも大おほ序しよハ輕かろき役やく者しやのとも勤つとめ立た物ぶつの役やくありても代
 役やくと以もつて勤つとめせ二に段だん目めの切きのろりは至いたつく立た物ぶつ役やく者しやハ顔かほ出いしらり
 支しゆゆ之の自みづから見み物ぶつの寄よりは遅おそく東あづま日ひ高たかく上うへろ未いまだ序しよの幕まくと始
 るはちち成なゆゆ支し全ぜんく戲げ場ばの表おもてへり予よ覚おぼへく芝しば居い繁はん昌しやうの時
 春はるの二に替かへり大おほ序しよ一いつ幕まくハ棧せき敷しき釣つりの提ち燈とうハ蠟ろう燭しやく一いつ挺ていとんを事
 定ぢやう例れいの中ちゆうろろりは且かつ序しよより立た物ぶつの役やく者しや出い勤つとめり故ゆゑハ市いち中ちゆうの見み物
 の婦め女子しよハ芝しば居い行ぎやうの前まへ夜よハ寝ねることなく夜よ通とほしら身み纏ぢひをぬ。
 未いま明ある芝しば居い至いたる支しあり夫おつと熱あつ明めいより場ばも棧せき敷しきも充み満まんして

其その盛さかる支し言ごん語ご小せう絶ぜつり。諸しよ藝ぎももに當あ時じハ衰おとろへりといふことも操
 芝しば居い歌か舞ぶ妓ぎ芝しば居いの兩りゆう藝ぎハと衰おとろへり有あることハ覺おぼゆへ往むか昔せき宝ほう曆りきの
 頃ころハ竹たけ本ほん豐ほう竹たけの兩りゆう座ざの淨じやう苗めう理り盛さかること流行りやうぎやう。歌か舞ぶ妓ぎ濱はま芝しば居い等
 軒けんとあらぶことの繁はん昌しやうハ竹たけ豐ほう故こ支しの序しよ文ぶんハ高たか臺たい小せう登のぼりと見みれば
 煙えん立た茶ちや屋やハいろはの四し十じゆ八はち槽さうハ八はちの定ぢやう芝しば居いと云いふ予よガ覺おぼえとくこと
 角かくの芝しば居いの東あづまの辻つじハ西南せいなん角かくハ角かく丸まるの芝しば居いと云いふ有あることハ六むの槽さうハ
 少すく或ある人ひとの狂きやう哥かり
 道みち頭かぶ堀ほり槽さうのくももゆることハ伊い達だつる男おとこガ守まもる大おほ木き戸ど
 其その角かく丸まるの芝しば居いも文ぶん政せい十じゆ年ねん二に月げつの出い火ひより廢いて今いまハ五ごの槽さうとあらまること
 〇名な談だん集しゆ小せう惣そうして音おん曲きやくと野の曲きやくとも俳はい優ゆうとも戲げ遊ゆうともいふことハ何なにまと

雲錦園筆卷之四

〇四

狂言綺語の戯と更くと云く狂言と物狂りき詞なり。法界次第
 小口綺の側し語の辞なりと云く心の道理ふと云く綺語と名づく
 云く周礼の註小曰発端と言と云く答へ述べを語ると云く毛詩
 の註小直小の言と云く論難と云く語と云く然る狂言綺
 語と云く堅と更と和らげ或い方便の爲小戯と言と云く愚なる
 人と善道小導く謀計の誠なり。白樂天の洛中集の記小曰く願
 今生世俗文字の業。狂言綺語の誤りを以て翻へくと當來世く讚
 佛乘の因轉法轉の縁と云く此文小依て觀る則し諸法実相の
 理顯然と云く峰の嵐谷の響鶉鳴鶉噪皆佛法と觀ど况や此淨田理
 の文句趣向表る世間の戯相と云く勸善懲惡の深理と

會と詞と當世の人氣と察して作文と云く神祇釈教幽玄戀慕
 哀傷兵戈君臣父子夫婦兄弟朋友ホの五倫の道と正し世の爲人
 の専ら賞翫と云く道と西沢一鳳 李叟狂言綺語の云く往古より
 歌舞妓狂言尽しと四番續とと定めし喜怒哀樂の四情小り
 き者と見えり。口明の多く若殿の遊興花見茶屋場とれ喜あり。
 中入謀反人国家と傾け忠義の家老切腹と怒し次小小幕と号
 け次幕への仕込と道外のちり更或い若殿と傾城姫君との道行
 と見せ引返すと世話場の愛子と身替り小殺し宝物の質請り女
 房と廓へ賣悲しと見えり。是哀と大切と悪人亡び宝の返
 つく家國治る則ち樂なり。人間鳥獸に及ぶと四情の外何と

慮らんや。又詩作の起兼轉合とも合と見ゆ。大序の起と二ツ目を
 兼く三幕目より一變して世話場の轉大切の合と見ゆ。是も元禄宝永正徳
 享保の頃の脚色の法則も定まらん。昔物語の假名本と讀が如く元禄
 寛保延享より追々ひけ。宝曆明和に至つては法則備りて益々よ
 成ぬ。右の四情の不易ありて實也。人氣と好むとんと計るの流行り
 て文花の一部の趣向。一日の狂言と仕組との詞書の流行り。花の實より入
 花と得ざる妙作とありて。花實相對する狂言の甚稀と古作の
 後世に残りて時々用ゆるを見て知るべし。流行りの泥とく不易乃
 實情と失ふ故に一旦の見物の心叶ひ繁昌するやうな事ども日數
 づからく永く保つてゐるとして知るべし。

〇世俗の詞小愚うとく色小泥と本心と失ふとのろけるよの愚
 痴なる者とのろま或いのろ松とのろ夏その始原は寛文延宝年間
 江戸和泉太夫座より野呂松勘兵衛とのろ人形つづひあり。頭平の
 ろとく青黒と顔色の賤氣なる人形つづひく是とのろま人形と
 ろのろまの野呂松の畧語と其頃の人愚鈍と者と賤しとく。
 のろまといふ異名と付痴漢と比し。此野呂松氏と祖と。京大
 坂の操芝居小野呂間。鹿呂間。鹿呂七。麥間。ホの名と附道外する
 詞色をゆる浄苗理段物の間の狂言とあり。近來に加様なる
 夏に捨り知る人も稀不成しと竹豊故夏。宝曆六丙子小見へり。
 按どろ小世り産業と廢し放蕩小身と持者とのろ。或いのろ松杯

ふふも呂と良と音通どひのらと轉語ぢりのあらん

狂歌浪花丸集中之画

明和八年辛卯出板印本
紫笛一好梅好ホ三十六歌仙おどけ画の合作也

あぢりそ
あぢりそ
あぢりそ
あぢりそ
あぢりそ



あぢりそ

あぢりそ

一好

雪縁齋一好の貞柳の門人
あぢりそ白縁齋梅好の父也

○操芝居の木偶も往昔の今の如く委うらん足るらん無うと山本
土佐掾角太夫の時代源氏烏帽子折の狂言小藤九郎盛長燕釜
王丸ホの二人形ふ初めく足と付し
夫の時世継曾我の浄苗理小朝比奈の二人形ふ足と付し
奉つて立者の木偶も足と付し
筑後掾義太夫の芝居もく用明天皇職人鑑
太夫筑後掾三絃竹澤権右門おやま二人形辰辰松八郎兵衛今度
出つくと仕始し正徳年中おどけ浄苗理短くして向の物よのろま
形の道外あるいかにうらみどを加へて勤めしが正徳五年乙未十月朔日より
近松門左門の作し国性爺合戦竹本座ふ於て真行ぢりよりろまの

道外機関（加）成（り）と（し）此国性爺（ハ）古今無双の大當

あ（く）未年十月より三年越十七ヶ月真行（し）と（し）享保六年辛丑八月

信州川中嶋合戦（竹本座）此時山簾と張ぬ（の）本山（ハ）作り始（む）是與（ハ）

山の段（ハ）と（し）小山（ハ）と（し）享保十八年四月車返合戦櫻大森彦七の木偶小指

先の動（く）と（し）仕（む）同十九年十月蘆屋道満大内鑑（ハ）と（し）勘平の

人形の腹（の）の（く）と（し）仕（む）初（む）延享二年乙丑七月夏祭浪花鑑（り）

木偶小帷子衣装（を）着せ（し）と（し）享保十九年甲寅正月豊竹越前少

掾若太夫の芝居（と）北條時頼記（西沢一鳳の作）此時正面（の）床と横床

と仕（む）元文五年九月武烈（ハ）天皇（ハ）艦小佐手彦（ハ）の木偶（を）眉毛（の）

動く（中）仕（む）斯（の）と（し）年々歳々（ハ）に（ハ）工夫（と）凝（り）今（ハ）眼中（の）

動き口（と）ひ（き）舌（と）出（し）髪逆立腹動き琴三絃と調（づ）指先（を）

働（き）○往昔（ハ）作者（ハ）も力（あ）と（し）烈（し）故寛延二年己の三月十八日天満

砂原（の）兄（と）殺（し）娼妓（が）と（し）引廻（し）有（と）長堀（の）材木屋（の）濱（に）

大（の）若輩（と）南新屋敷（の）娼妓（と）情死（と）と（し）神崎（の）渡口場（の）喧嘩

此三度（同）日（の）更（あ）り（し）と（し）直（小）作（し）と（し）廿日（ハ）八重霞浪花濱（に）外題

と出（し）廿六日（ハ）初日（と）出（し）所古今（の）大當（と）り同年七月下旬（まで）

打通（し）繁昌（と）と（し）此三（の）説話（ハ）別々（と）由縁（も）と（し）一緒（狂）言

小著（せ）作者（ハ）の手柄（と）と（し）並木丈（ハ）因（小）云（か）と（し）引廻（し）の時永（く）

の窄舎（と）色（ハ）透通（と）と（し）白（き）と（し）髪（の）艶（と）美（く）誠（小）胡国（ハ）

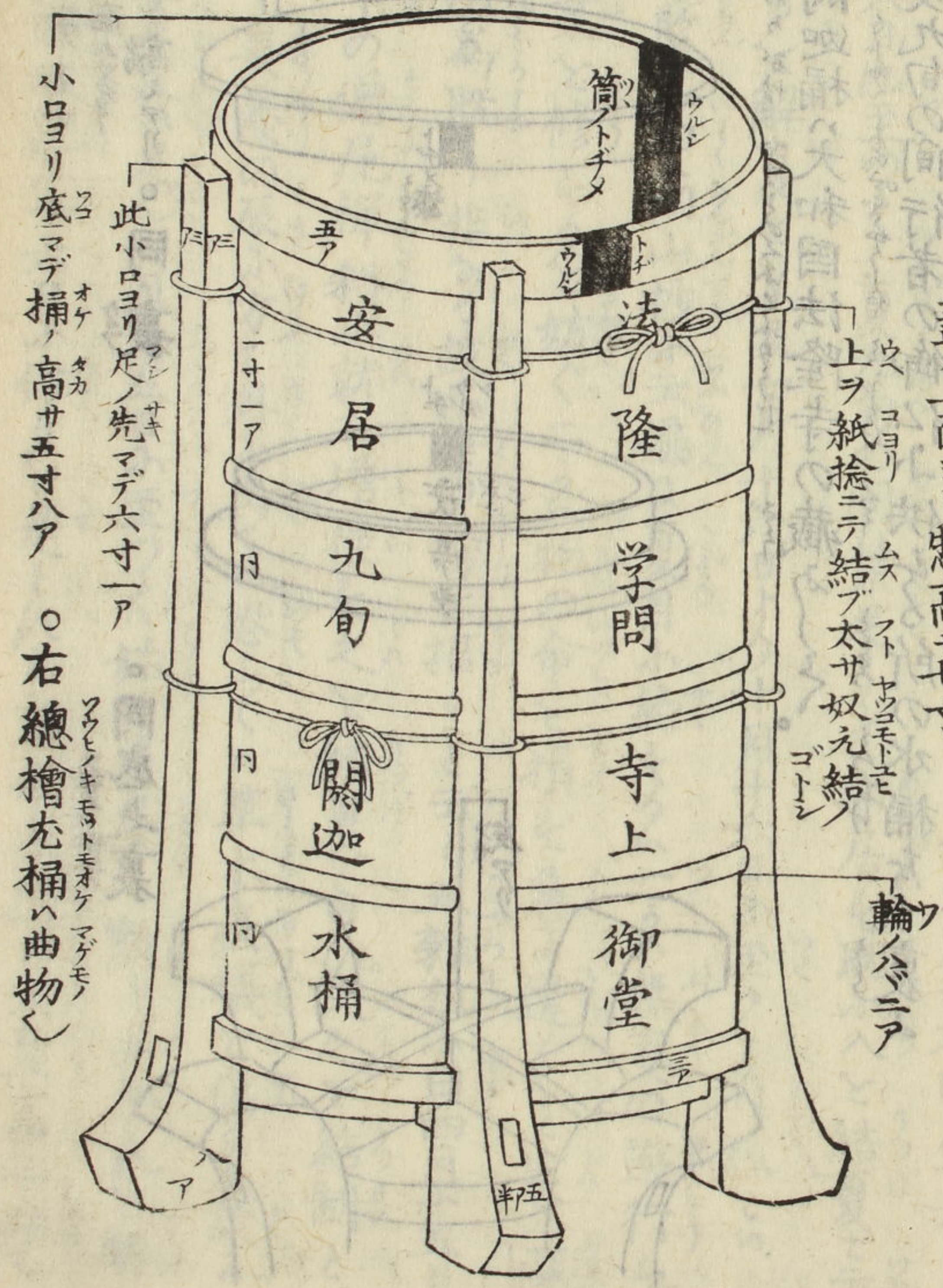
嫁ぎ王昭君の容も斯やと惜ぬ者もなりしとぞ。此頃科人落着
 の日一事の願ひを御厨届ある夏もく何よまき好むと有し時
 油揚と三枚許望の願ひく食らる夏と心得求め与へらまきと
 くい頂と取て梳上髪の上へ彼揚豆腐の油と絞り附く色光澤よく
 今死する身小いぬ夏なく女の身嗜となりとりのと同人も感せ
 又南新屋敷乃娼妓おのと大工の若者と馴染めく成て終ふ
 情死と故爰も流まの嶋の内花珍らしき新中きとの文句あり親
 福鳥屋の女房おらぐ異見の詞小病氣が本復し郡内嶋小紅結
 の一陽裏と着とく閑帳参らふ連て行むと尤價安き賣女といひ
 其頃の質素なりと當時とい大違ひる所あり此浄瑠理

限らば都て此頃異つ夏ある時一夜附とく日救十日も立へ操浄
 瑠理小仕組なり

○天命小福と与へぬと何もく幸ひのともく無者と見へる
 不幸ある時もあり幸ある時もあり布衣より身と起して天下と得る
 とひ程の福の類と夏あると漢高祖泗上の亭長なり時相人其
 邑小入て此所の人小皆王候の相ある夏と知り又高祖の難義小逢
 時小呂后雲氣と望とく尋ね求めありと然ま高祖の天子
 成めんと夏に豫め定まると天命なり。余程の命あり思小夏もな
 くて帝位を知り召とる者あり七十二度戦ひ負て父と囚り妻
 子を失ひと辛と目を見て諸其後り四海と知り召とる然ま今の

應^{オウ}ど^ズ善^{ゼン}と爲^ナる^ル福^{フク}あり^キ悪^{アク}と爲^ナる^ル禍^ワあり^キ。同^{ドウ}氣^キ相^{サウ}感^{カン}ず^ル自^ジ然^{ゼン}の理^リ。何^{ナニ}と以^モて善^{ゼン}と福^{フク}と同^{ドウ}類^{レイ}なり^キと^シりや。父^{チチ}よ孝^{コウ}ある^ルは父^{チチ}喜^{ヨシ}ぶ君^{キミ}不^フ忠^{チュウ}な^キと^シべ君^{キミ}悦^{エツ}ぶ善^{ゼン}人^{ニヒト}の喜^{ヨシ}ぶ所^{トコロ}あり^キ。是^{コト}同^{ドウ}類^{レイ}非^ヒぢや。何^{ナニ}と以^モて悪^{アク}と禍^ワと同^{ドウ}類^{レイ}あり^キや。父^{チチ}よ不^フ孝^{コウ}ある^ルは父^{チチ}を^シ惡^{アク}む君^{キミ}不^フ忠^{チュウ}ある^ルは君^{キミ}を^シ惡^{アク}む。是^{コト}同^{ドウ}類^{レイ}なり^キ。是^{コト}惡^{アク}む惡^{アク}人^{ニヒト}の惡^{アク}む所^{トコロ}禍^ワも亦^モ人^{ニヒト}の惡^{アク}むと^シり。是^{コト}同^{ドウ}類^{レイ}なり^キ。非^ヒ哉^カ。古^コ人^{ニヒト}吉^{キチ}凶^{キウ}の二^ニ字^ジと以^モて善^{ゼン}惡^{アク}と^シり。禍^ワ福^{フク}と^シり。其^{ソノ}一^{イツ}ある^ルと知^チる^ル不^フ足^{トク}まり^キ。然^{シカ}ら^ニ惡^{アク}とある^ルは福^{フク}と願^{ネガ}ふ火^ヒは就^スて冷^{ヒヤ}と求^{モト}め水^{ミヅ}は入^イる^ル煖^{ヌク}と索^{ソク}むる不^フ同^{トウ}じ必^{カナラ}ず無^ムの理^リ。此^{コノ}理^リと知^チる^ルは善^{ゼン}念^{ネン}の生^ナず。既^{スデ}に天^{テン}地^チの鬼^キ神^{シン}小^コ福^{フク}と^シり。最^{モト}も佛^{ブツ}者^{シャ}能^ノ妙^{ミョウ}理^リと解^ゲする^ル。仏^{ブツ}と有^{アル}難^{ナン}と帰^キ命^{メイ}頂^{テイ}礼^{レイ}する^ル。最^{モト}も佛^{ブツ}の光^{クワウ}明^{メイ}は迎^{ムカ}取^{トル}る^ル。

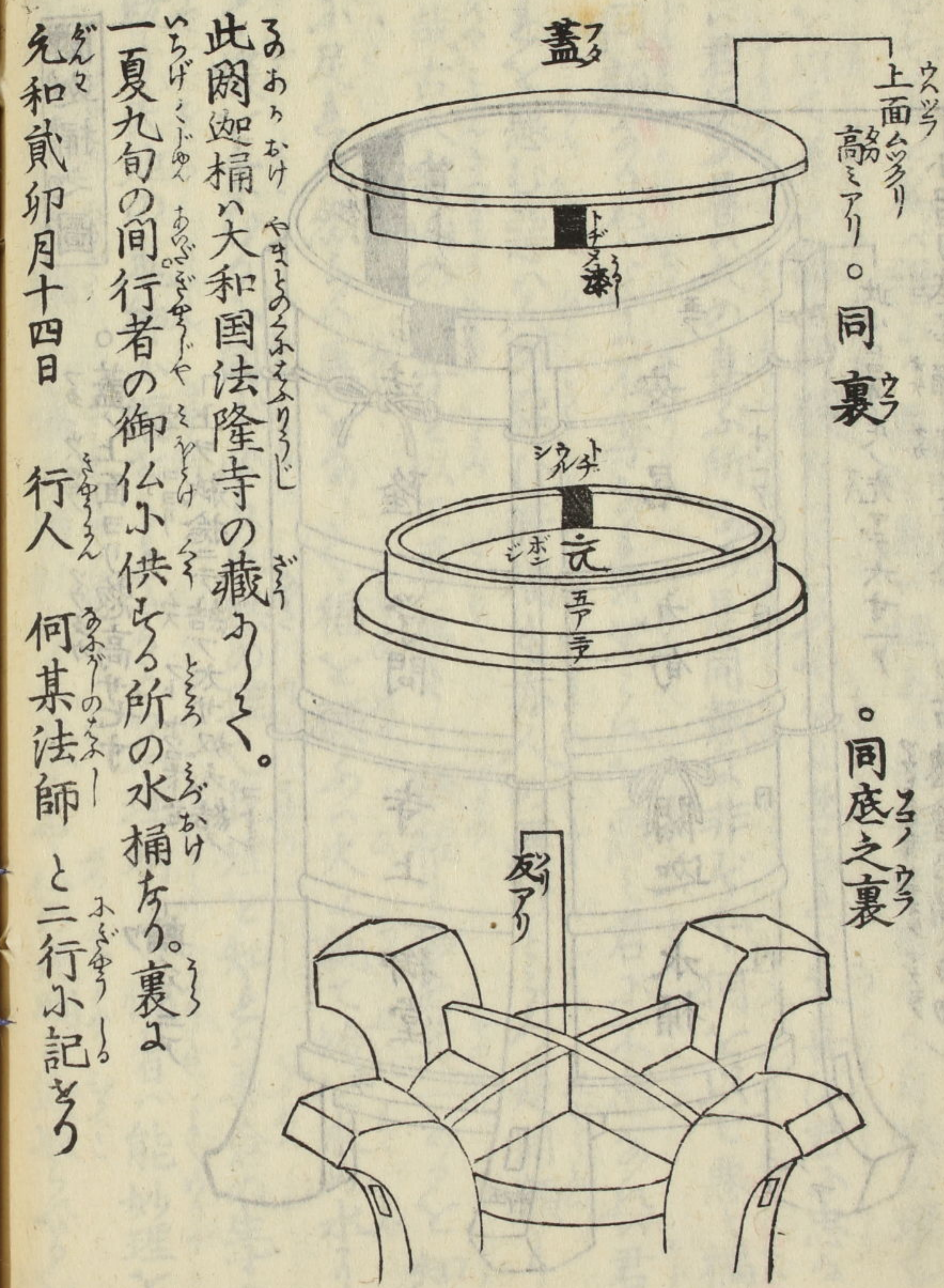
關迦桶之圖



此小ヨリ足ノ先マデ六寸一ア

小ヨリ底マデ桶ノ高サ五寸八ア

右總檜杓桶ハ曲物



此罎如桶大和国法隆寺の藏あり。

一夏九旬の間行者の御仏小供する所の水桶なり。裏より

先和貳卯月十四日 行人 何某法師と二行小記より

夏篋夏行夏断夏書夏経夏花など夏ハ佛者四月十六日

七月十六日に至つて一夏九旬の間禁足し安居を既小入と結夏と云

既小終つと解夏といふ又七月十六日より十月十六日小至るを自忍ら

釋氏要覽小曰南山抄小云偏夏月小約する一夏無夏の遊行を

出世の業と修するを妨ぐ二夏物の命と損を慈に違くと実ハ深

二夏所為既非有故小世の謗と招くと云く五雜俎小曰四月十五日

より天下の僧尼禪刹小就て塔挂を之と結夏といひ又之と結制と

り蓋長養の辰方外小出る恐らく草木虫蟻を傷ら故

九十日安居禁足七月十五日小至つて始めく尽く散り去るこれを解

夏といふ西域記小十六日小作ると是と云々本邦推古天皇十四年始て

寺毎小四月八日より七月十五日まで齋と設く是修夏の始と云。夏
 行へ即ち安居し安居へ出家修行の暇と得く私に任を故に安居の間他
 の化益と専つとめて三界萬靈に回向ホす。一夏九旬と十日と旬と云。九
 十日あり故に九旬といふ在家も又志ある輩は夏と修し九旬の間飲酒肉
 食と断ると夏断といふ又聖經と讀誦し書寫し花と供養し先祖の
 聖人有縁無縁の菩提の爲に勤む。是と夏書夏經夏花といふ盛
 衰記云九旬安居の供苑へ叡山の西塔親迦堂より始むと此故に西
 域記小曰菩提樹の南十余里聖迹に相隣り毎歲比丘結夏安居四
 方の法侶百十萬衆七日七夜香花と散し盛ん又音樂と鼓し禮拜供
 養と云。又梵網經曰若し子坐禅結夏安居常用乃至經律佛

像菩薩像云々

○安居の釈氏要覽小南山抄云形心静攝と安と曰要期此小住
 前中後と律小比丘あり四月十六日安居とんと欲し所在に至らば十七日
 方小到る佛言く後安居と聽に即五月十六日也云々寛卯抄小云く僧
 宣師云初四月十六日は前安居十七日己去五月十五日に至る中安居
 と名く六月十五日後安居と名くと云是も亦拠あり
 ○城州伏見深草の瑞光寺へ明曆元年元政上人 釈日政宗元政自號
 草創あり法華道場なり當寺の什物に宇治の三首と云元政
 目筆の横軸の掛物一幅ありて殊小秘藏なり

六六帛書卷之三

此の流すあまのく親流亭と
あつらひま

たゞん持くながまきまののちあつて流すはまきりつゝ人の跡 義祖

十六歳の月せうくさののち
たゞん持のりより舟よのり

舟よのりあつて舟よのり
舟よのりあつて舟よのり

舟よのりあつて舟よのり
舟よのりあつて舟よのり

あつて舟よのりあつて舟よのり
あつて舟よのりあつて舟よのり

議祖と則ち上人の名あり元政の其のりめ江州彦根族小仕とく石井元政とよ博學
多小あり忠節無双の士あり殊小至孝篤実あり其行状記はつたがううこころ小畧に

文覚上人姓藤原名盛遠父と持遠と名く禁裏武者所の官

人なる故小遠藤武者盛遠と号は年十八あり誤て婦の首と斬り蔡

因て薙髪して仏門に入天養元年三月中旬渡辺橋供養 此

時則ち十八歳 盛衰記 或は十九歳 人物故 事云 然る小人物故云 暮

治養年中文覚伊豆小在て頼朝小會し謀反とす心頼朝出世の後

覚と崇敬とる頼家の代小平氏の子孫と取立て世と覆さんとて隠岐

国へ流さん正治二年配所小於て愁死と云々按とる小正治二年八十四歳や

すんが永久五年の生じ然まば天養元年渡辺橋供養の時十五歳に賀裳

御前小懸想の直不審一十八歳十九歳の間あり七小永久年中の生とる

又治養三年勸進牒の産忽小依て文覚伊豆小配流とる此時六十六七

歳又小後謀反小依て隠岐小流とる正治元年あり當春正月十言

頼朝公薨どあり年正治二年配所小愁死とあり行年八十七八あり

下尤高雄山よ於て毎七月廿日文覚の墓小供養あり忌日とてとる

玉勝間小云。文覚法師が正治二年、鎌倉の將軍頼家朝臣小返り夏に送つて書小云く。熱きやいとうと念じて焼く病愈々しと云る言は。君とある人の臣の諫と受納せられたるよ言る語し。やいとうと言ふと珍らしく覺へて書出て置けり云々

〇灸。和名也。比。灼火の畧言乎。やいとい灸處あり。明堂灸經云。男子三十已上。みとく三里と灸せざらば。三里の氣と下を所以と云く。三里の灸は上中下の三焦の病ふらうと。人四十以後は陰氣衰へて上氣安し。三里と灼く氣と引下は。余も徒然草も四十以後の人身灸と加へて三里とやういふ上氣の事あり。必ず灸せざらばと云ふ。一説は年よりて灸せざらばと言ふ。推て灸のあと愈ふ終は血を以て

死しうと見く。其禁忌の年と習ひ傳へし。八歳十七歳。共六歳四十四歳。五十三歳。六十二歳。七十一歳。八十歳以上を禁む。然まども是木の夏へ心の明らめ次第あり

〇農夫満平が説く世人よく知る話あり。未だ不知人もあり。三里の因小く小出と。三河国宝飯郡水泉村百姓満平と云る者至て長壽あり。寛政八丙辰年百九十四歳に及べり。江府へ召さる。古例の髪と献らば。御米と若干賜ふ。享保年間にも召さる。古例の前後何きの時うや。吏人満平小問あり。汝が家何の術あり。長生斯のく。あや。答て言は。別は異ある夏は。僕が家先祖より相傳て三里に灸と。其灸方毎月朔日より八日に至て。輒む。年中月毎に

雲錦隨筆卷之四

間断ありとゆ。尤其數同ト云と左の如く言上ト云

⑧ 朔日 八社 二日 九社 三日 十社 四日 十社 五日 九社 六日 九社 七日 八社 八日 八社

⑨ 朔日 九社 二日 十社 三日 十社 四日 十社 五日 十社 六日 九社 七日 九社 八日 八社

寛政八年満平百九十四歳妻百七十三歳子百五十三歳孫百五歳曾孫以下尚百歳小満より者多くありといふ

○邵康節の詩曰其病後能菜と服せしより能自ら防ぐ小如くと云ら如し。病あり時豫て慎め病を易繫辞曰君子の安多れ共危きを忘る存せれども亡ん更と忘る治むざる乱んことを忘る是と以て身安くして国家保んぞと云。古文大宝箴云更に忽るせふとる所より起り禍に無妄より生ると云。又説苑曰官の

官の成より怠り病の少き愈るふ加小禍の懈惰より生ると云。又天端小平日と慎め横事有へん一説小権と馬小乗て渡を術や有と人の尋へる。或侍答て最安き更あるを教んとて馬小打乗出で橋の際小て閃々と馬より下て是を権の馬の乗やうと教へらばと云。又嶮岨ある山の阻つていよくの馬も用心せん怪我の稀ある者唯落馬の平地に乗ると有りのこと語らばと云。権約と小俗と云橋をさうら投渡の橋に○小児は月と指しむると云。兩耳の後小瘡と生じ月食瘡と号す。○醋は木小属を故小脾と煩ふ者多く酢と食せしむると云。多く食すれば筋骨と損じ亦胃と損じ男子は益あり顔色と損じ人酸と食べ則ち齒と軟くると云

○火傷より牡蠣の粉と水とをくると塗て。又燈油とぬり。

○其石と戯れ鼻の穴へ入て出さぬは紙捻として片方の孔へ入れ嘔吐。

○蕎麥と多く食して腹張るは荒海布とて服をきり忽ち。

○小蟲の耳へ入る時眼口鼻より堅く塞ぎて其入る方の耳より息と強く吹入。然らば片方の耳より虫息小吹まき飛出。

○山中へどくく溪水と飲べ。其谷小大蛇を住と毒氣中。

必も蛇の悪毒小中り成べ。其時何れも鉄の物を能。

煎し出しく服べ。其毒を解し平愈すべ。

○魚の毒小中り山梔子と煎し用ゆ。鰓小中り鳥賊の。

黒く飲ぶ。松茸の毒小中り蓼穂と服して解し茄子も又。

○反鼻の刺るは真綿と以て其より撫ま綿小針く。夫と早。

速抜るは患あり。又干鯛と濃煎し刺る痛所と洗へ。毒氣も針。

とらけく速小治と。又柿の澁或は白柿と塗も。

○漆をけら杉の青葉と煎し用ひ。又川蟹と叩き搥を塗。

○餅飯などの咽小詰り。大根おろしの絞汁と飲べ。忽ち小通。

○小兒過つて錢と吞く咽小滞り。鳥芋と多く喰ひ。又。

喰ま能は碎く。摺嵐し。其口多く入べ。錢とらけ下。

○蜂のさし。芋の莖と以て撫ま。忽ち愈て。あとは。

錢あがりも邪と便小通。

又萬金丹とて砕て塗もよし

○泡盛焼酎ホ小酔て手足冷らるゝひる水と決して飲しどく腹

中火小成て死とるゝ酔る人と裸あり惣身へ白豆腐とぬまむ暫く

して発熱とるゝ夫より全身とぬまむ。着物と着せ蒲團と被せて

寐るゝ。是妙法とくよし。唯の酒小悪酔して手足冷る者も右の

法最よし。宿酒小から汁湯豆腐と食するも酒毒と解して発表

する故快氣とるゝふ同理なり

○瘰癧の梅干と黒焼あり粘りと塗てよし。又海人草と菅と古き

茶袋とを黒焼あり粘り合とて塗もよし。又一年づりの干大根と

煎り教同指と漬てよし。又螢と粘飯あり練合せとて塗てよし

○鼻血と止るゝ紙と酢小浸し。鼻孔へ詰とて急ら治とる

○撲身の接骨木と甘草を加へ煎り服してよし

○鐵器の身小立て抜て。蟪螂の乾干と細末あり疵口塗を

鉄のうらすゝ出ると毛抜釘抜の類とて抜へ。是妙術とる

○疥瘡の内攻あり伊勢鰯と煮て食せ。又乾らるを煎り。のむもは

○蜈蚣のうらすゝの蛤蜊と摺つれ痛と直らふ治也。又酒と熱く煎

て疵とあへん忽ち熱氣とるゝ痛と止む

○麥の穂の咽ふ立ると時真綿と口小入稍く小取ると同り

○胡椒ふむと絶死とるゝ小口より油と流し入るゝ蕪生とて

○油と揚る餅と食して腹痛と甚とるゝ。乳柑子をくたて

絞汁と飲べし。総じて油氣の消解難者多し多く食をばらばら

〇大小咬まらるる干蕪と煎じ塗てよし。又杏仁と搗て付るよし

〇竹刀木刀韜ホろく目と突らるる鳴滝砒の粉と目に入れてよし。又砂糖

水あき洗ひくもよし。又川蝦を生く皮を肉とつぎ眼に入れてよし

〇強弓の肩入あとする時眼玉ぬき出さ四五寸も下る夏あり

其時掌小受て冷水と徐々とかき本の如く治る

〇漆小觸るふ蜀椒とかき鼻の先小塗生かすけとよし

〇萬虫耳へ入らるる半夏の粉と油あき解き耳の中へ入てよし。又

葱の白根と摺わらし絞汁と取て入るよし

〇凍瘡ある茄子の蒂の干らと煎じ夫らと數回洗てよし

〇毎夜臥ふ十分足と伸きくべし。所謂この字形臥時目の

たる時足と伸し寐返すく本の如くこの字臥べし

〇枕の高さの壽命三寸樂四寸と覺えくよし

〇三月節句小祝ふ草の餅とりぬ菖蒲草と以て餅小和する者

なり。今専ら蓬を用ひく母子草と和をこみ。然らば奥州會津の

辺に此鼠麴草と煎じ其汁と和し餅と其色黄あて美

し又蓬と以て和し餅と其色青くて佳し。則青黄の二色とて用

ゆらう。公隆子の語らば実古の風俗に田舎小存まるとは是ホの夏

とひるに三代実録小曰田野小草あり俗小母子草と名く。二月始

て生は莖葉白く脆し。三月三日婦女を採て蒸擣て糕と傳

聖金匱要略卷之四

歳夏と云く又荆楚歳時記云く

三月三日甬麴艸と取て蜜と和して料

とん之と龍舌料と謂以て時氣と厭

料の音板米既くと云々

○本草綱目小甬麴草の原野の間多

二月苗と生し莖葉柔軟し葉の長さ寸許

白茸あり角の耳の毛の如し小と黄花と開く

麴の色の如し穂と成し細と子と結ぶ花と取て

棒の皮小雑褐と染る破る不至つても猶鮮なりと云々

○糯米よく製する者と次食とつみ則ち通用のりら。既の雑穀の粉と

漉て蒸擣らるとりめ今云團子の類みく麥粉黍稷とらと

製も也團子の餌とつみく米粉と蒸て製するもの

○椿餅の最古き者ありて延喜式につま餅とつみ。其製法上吉

砂糖あり故米の粉と漉て柱枝の細末とて些入甘茶の煎

汁よく能煉圓く作らる。椿の葉と両方より合せ包とて蒸上る

今太白の砂糖と用い其製法も精々れ味は最美ありて暑

中とよとも損する夏也。京師一條室町東へ入町虎屋何某と

と製と。當家へ古来より御所御用の菓子司ありて蒸菓子干菓

子との小各上様の御銘とて御銘記録ありを右椿餅へ他と製

法とらる多く餡と中小包と椿の葉よく扱とらる。其本製



鼠麴草一名母子草

初春七草の一種

知る所業ごと。又當虎屋より例年六月十六日嘉定菓子と調
 進し。又俗家へも賣出たり。此東都より行りし此夏へ世諺問答曰
 人皇五十四代仁明天皇永和十四年五月豊後国より白亀と獻て以
 て吉兆と之を祝ひ改元有く嘉祥元年と六月十六日群臣小物と
 賜ふ差有く皆十六の救と以ては奴僕亦俱亦同し是よりして以来
 嘉祥の儀あり此事より本説なり。唯彼錢の銘小嘉定通宝也
 侍多勝といふ名詮と賞翫する由ごとく一説小續日本紀曰
 文武天皇大宝元年六月壬寅朔丁巳日王親及び侍臣を引て西
 高殿に宴し御器膳并ひ帛を賜ふ夏各差あり云々嘉定の儀
 ると濫觴とんといへども嘉定の夏も定められ世諺の御説り

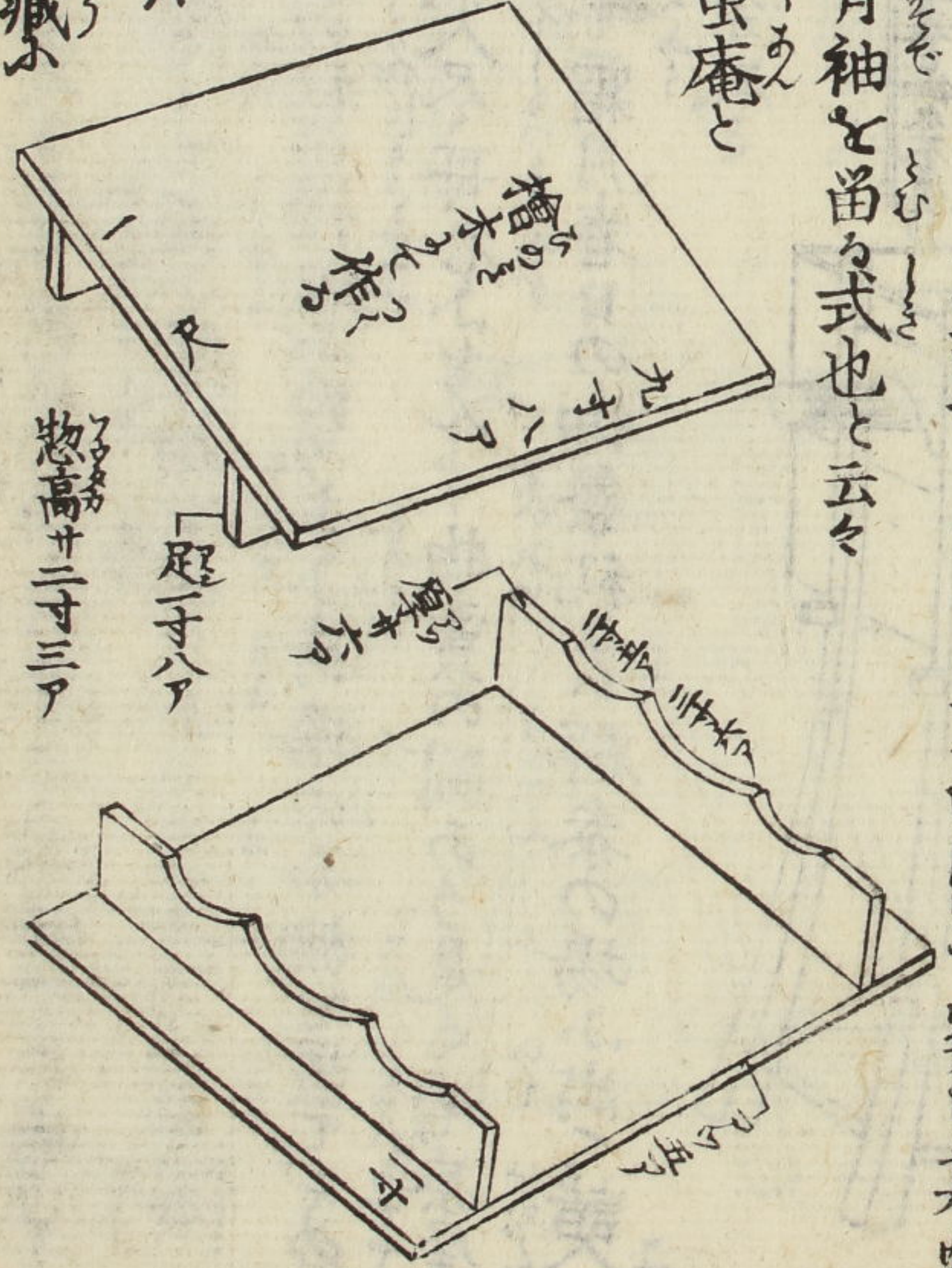
更ニ本説ありと由記しあり後之。又長明四季物語小曰仁明
 帝永和の頃御代榮るを祈らせぬ賀茂の上の社小奉りて御被
 といふあり六月あり六月あり吉日なりと御占の人々考申上るが
 其日行れ年号と嘉祥と改元ありると社司の日記あり又一説小
 嘉定といふ夏へ昔室町殿の大樹の時六月納涼の遊ひ揚弓と射ふ
 賭と負ふ者嘉定通宝の錢十六銅と出しく何とて喰物と
 買からる者と饗應すると故小嘉定喰と号するなり。此錢へ宋
 の寧宗の年号あり十七年あり其年毎小鑄せしる錢あり元年より
 十六年まづの印と揃て其日の饗應物の代不定ありは或は林道
 春の説小曰嵯峨帝未ご即位すまると時六月十六日に宋の嘉定

錢十六文と以て食物と調御膳と供する例と踐跣の後も用ひ
 めひく此日餅と奉ると云々。又御湯殿記に曰女房の詞をかつ
 と言ひ見たり。かつうとひの嘉定通宝と中略しての亥又紀事
 曰今日公家武家同じく嘉定の祝儀あり。所謂嘉定通宝十六枚を
 以て食物を買て而して之と服する其家福あり。故に今に至て其例
 倣ふ。又嘉通と軍小勝の勝と倭語相近し。故に武家吉兆錢と云。此日
 五色の團子并諸品の者と土器兩箇に盛各白紙を以て之と果を水引
 と以て之と結び群臣小賜ふホの儀是則十六錢と以て之と求め得るの遺
 意に諸家も又此儀あり。或は孔方穴十六枚あり。米一升六合家礼の
 者ふたぎふ其人々是と以て雑品諸物と調而して之と献む。又土器

杉葉と布き其上大饅頭三箇と威り杉原紙を以て之と包む。凡物毎
 十六の枚と用ふ。今夜諸家の中十六歳の人振袖と切て詰袖と云。是を月
 見と云。其謂土器小盛と云。の大饅頭と用てその真中に穴と穿ち其穴
 より月光と見る是今宵袖と云。式也と云々

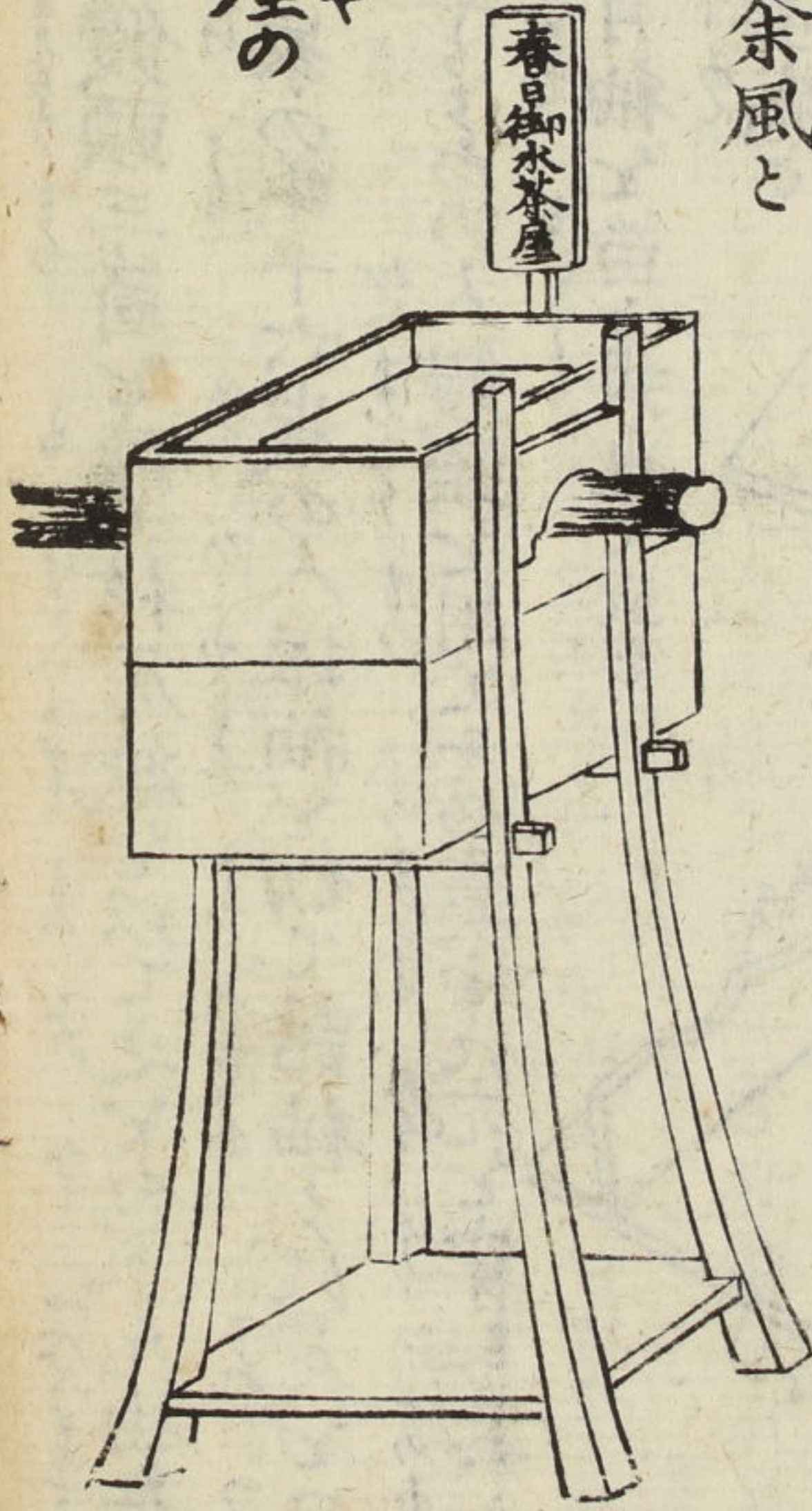
○伊賀国上野ある箕虫庵と

つひの俳師芭蕉翁の住
 まじ庵と云。箕虫の音と
 きら来よ草の菴と吟せ
 らま一翁が句けりて斯の
 号する處と云。酒井家の藏



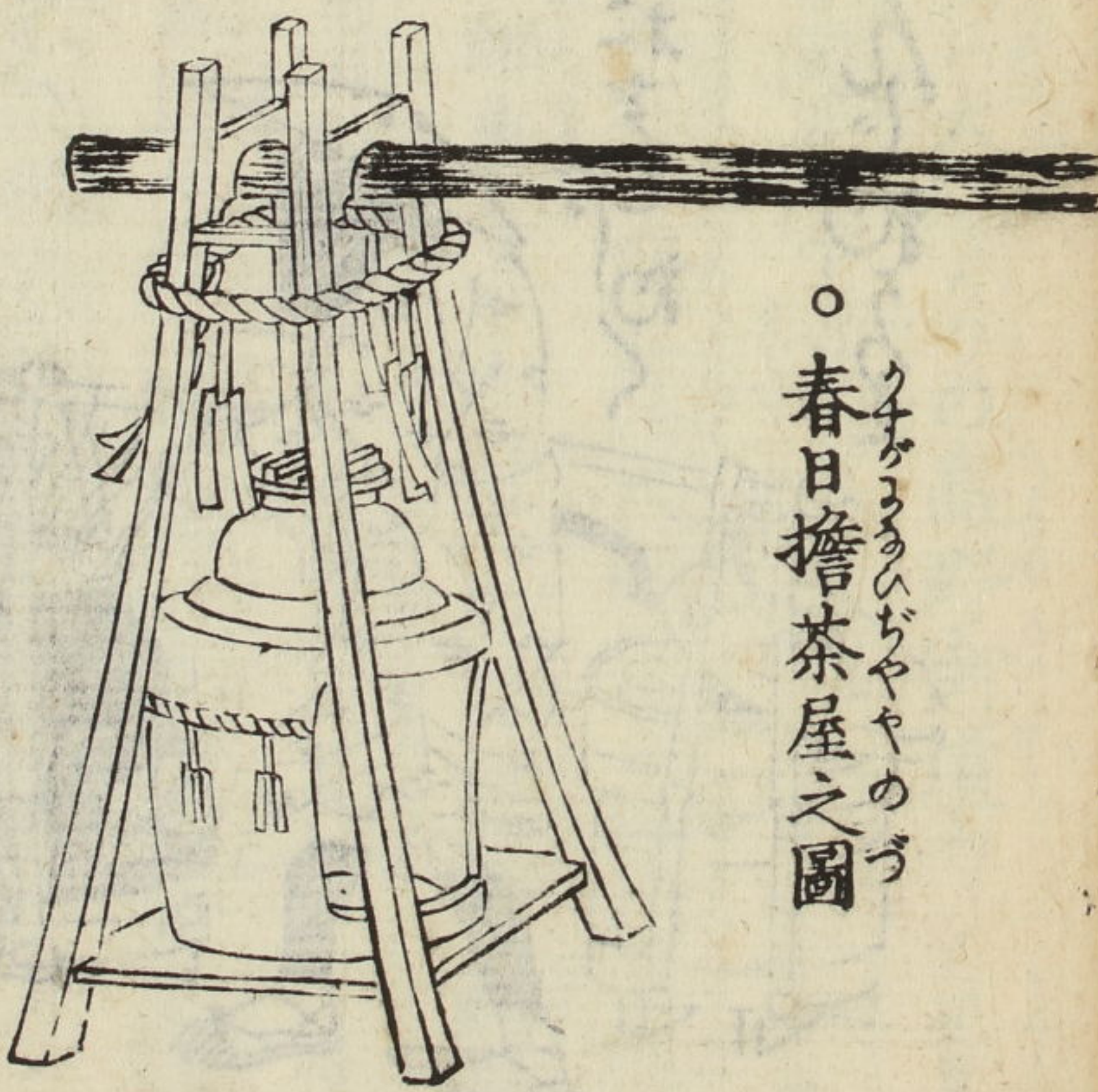
此叢虫庵の俳諧の膳とりあり。芭蕉翁貞享年年間俳諧の席にて
 用ゆる所といふ春慶塗みりて面ふ墨繪と画きありといふ寸法圖の如
 ○春日の水茶屋へ水屋の社の傍辺ふりり表ふ荷擔の茶棚を置てその
 なる尤古風く七十一番職人尽哥合ふとん物賣の圖あり是も擔茶屋
 あり粗あひ似たり例年霜月春日の御祭礼より群泰の場ふ出て讀
 茶と商ふと偏ふ古の余風と

今京師御所の
 の供待の溜へ出る檜
 垣の茶屋も此擔茶屋の
 風儀なるべし



春日擔茶屋之圖

又此水茶屋ふ古より火燧焼と
 といふ餅と賣て名物といふ此餅と
 盛て出と器物其始根来朱の
 木盤なりが好事の徒頻りふ
 是を懇望し終よを尽して
 今ハ陶器あり木盤の如くに
 製へ中ふ春日御水茶屋火より
 焼と記し旅客の土産ふを不任とる中ふ成しど面白く原
 火より三角ありと總て綱鉄と用て鍊り物あり三方とも何と
 あり切ても能火の出るやうに製しよりの尤正中に穴ありと紐杯



通と爲し予一人の持たんと見ふ三方とも

火と切ると速かれを至つと便利なり。介程

其形と象とよく饅頭製なり故

火うら焼とい名づけたりなり。

又紙衣小火うらと入ると云ふ

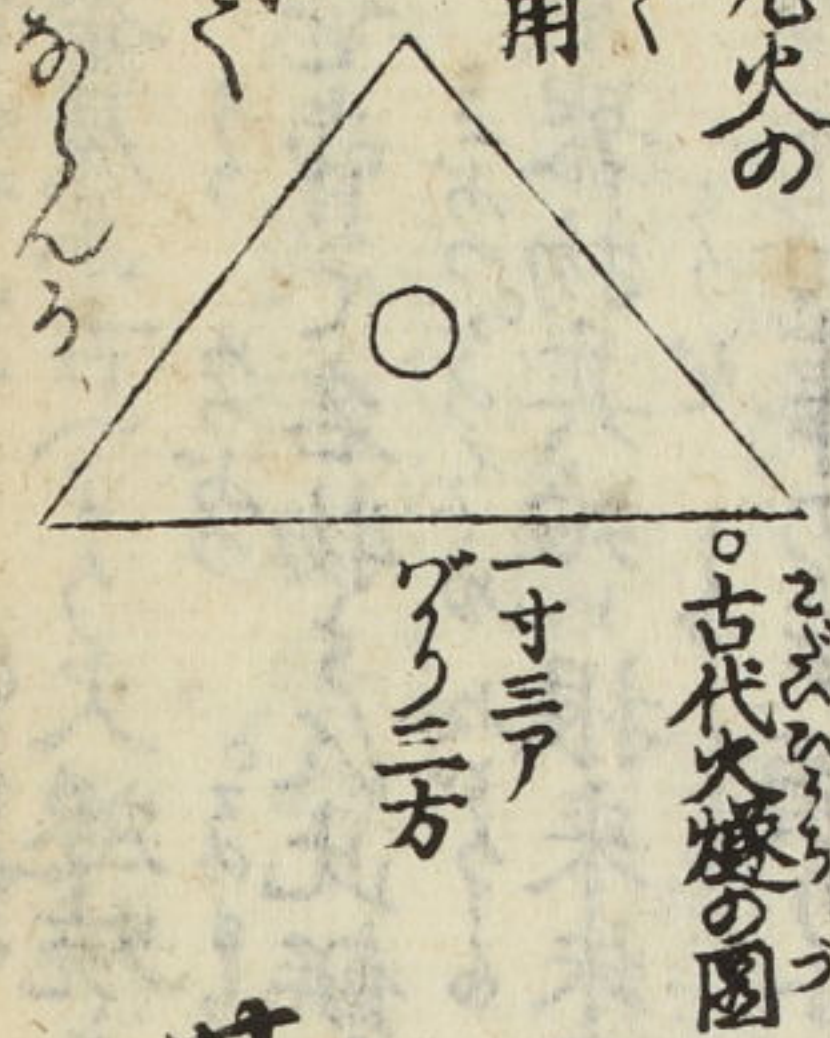
二角やうと云と象

あはれ丸火の

象の三角

あふ小丸

製なりあはれ



。七番職人冬哥合

○河内國錦部郡天見村といふ大坂よりの高野街道ありて三日市の

駅より紀州の国界紀見嶺不到る間あり。天見村より紀見嶺

にあり。其来由と尋ねる。往昔弘仁年間弘法大師のまじりて沙門空海は

時一箇の霊場を閉關せんと京師東寺より野山の守護神へ數回参

詣はくると折る。既小御祈念の日數も満じり日。此天見村より夜明

る。後者小携り炬火と消さぬ。道の傍の地小排りてをせめて御歌

暗るる。道も天見の里ありて明るの木とて地ふりてあん

斯詠いふ。此時ふ賤が伏家ありて主の老婆立のど。此頃見馴

奉る御僧ありて先暫く此に立休らせぬとて招きて内より伴ひ奉る

せ折る。五月五日の夜より出来ぬ。世粽と差上り。大師へ大

歡ぶをぬい。我の空海とらふ沙門に汝が志の程厚く受多依て永代不
満の加持とを置べ。以後の身と清め信心して粽を作り多。是其終
加持とあるま。末世に至る迄も教と背く者あるとて。御歌ふ

をくゆ茅卷の千世の後まぐも悪き病あり立去ぬべ

去程今小至りて此家小粽と製して参詣の旅人進む諸人は

と求む家土産とん此と所持する者厄病を傳染也且病者の

快氣ととりふ又其時地よりぬい炬火の木より根を生じ枝葉年

々小繁茂し今千歳の大樹と多と。大師の徳とありたり或人の歌

御佛の道のりりの木はこふ根をて残す枝葉茂りぬ

斯る由縁はりて古より炬火屋と号しと也

○御菩薩が池の幡枝村の南より傍に地藏堂あり。平相国清盛の代

西光法師が建営なりとて山城六地藏の其一也。七月廿三日廿四日

地藏巡りの老若羣衆して賑ひ六齋念佛とてく来りて手向を勤

む祭終りとて廿五日精進あげとて村中集會し。毎年彼池の桶を

上種々の魚と漁り酒肴とする。昔より仕来り然る小一年村

長の言く佛會とせり跡もく殺生とある。地藏尊への恐あり

自今以後を止む如何と村民一統小実所理ありと同心魚一

尾と漁り村中疫病大に流行せり程ふ是へ全く地藏尊の

御心より叶はる成べりとて翌年より又々以前より魚ととりて

精進上せり。何の祟もたりとて如何ある故由り知らず奇異

なる夏あり。又此御菩薩が池うの尊多く生うが故に村民を採
て市小出と所謂名産あり。此尊菜と採ふ後小類を船と造りて
乗まり号と尊菜舟と云ふ其造り板とあり至つて麗畧みて船
の盤觴の上古の斯も有ると思ひ申す。
所謂和漢船用集よもえと漏脱

○鞍馬の竹切と云ふ例歳

六月廿日未の刻不行る

由来は都名所園會ふ

時刻来ま毘沙門天の尊

前小おつと讀經あり。衆徒妻

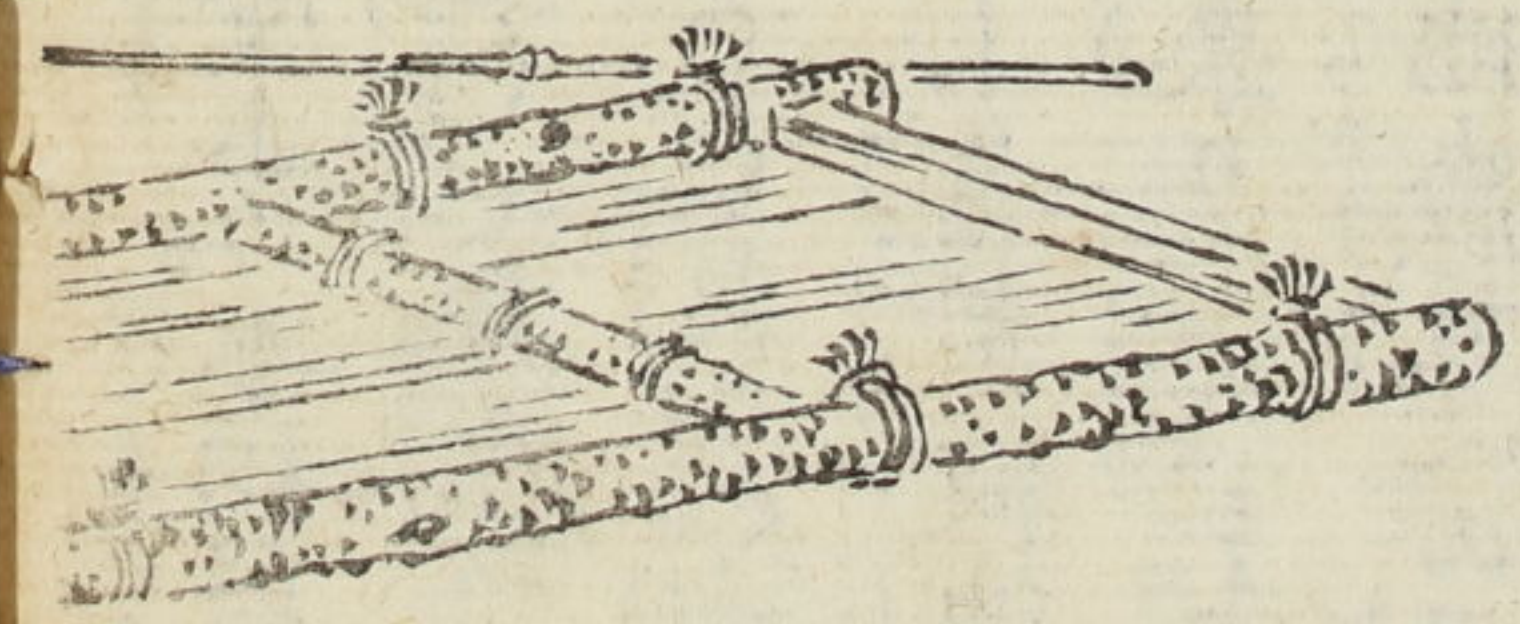
帯ありと鞍馬法師と号し晒布の

長廿
凡一間余

幅三尺余

大小不同

棹



白帷子小黒衣と着。後者小野刀と
赤地の金襴の袋に納て持し頓て堂
前小至り晒の袴禪とつけ裾高くかけ
野刀と持て待時小竹に二箇所は横み。

老人の法師左右うち中めめと持

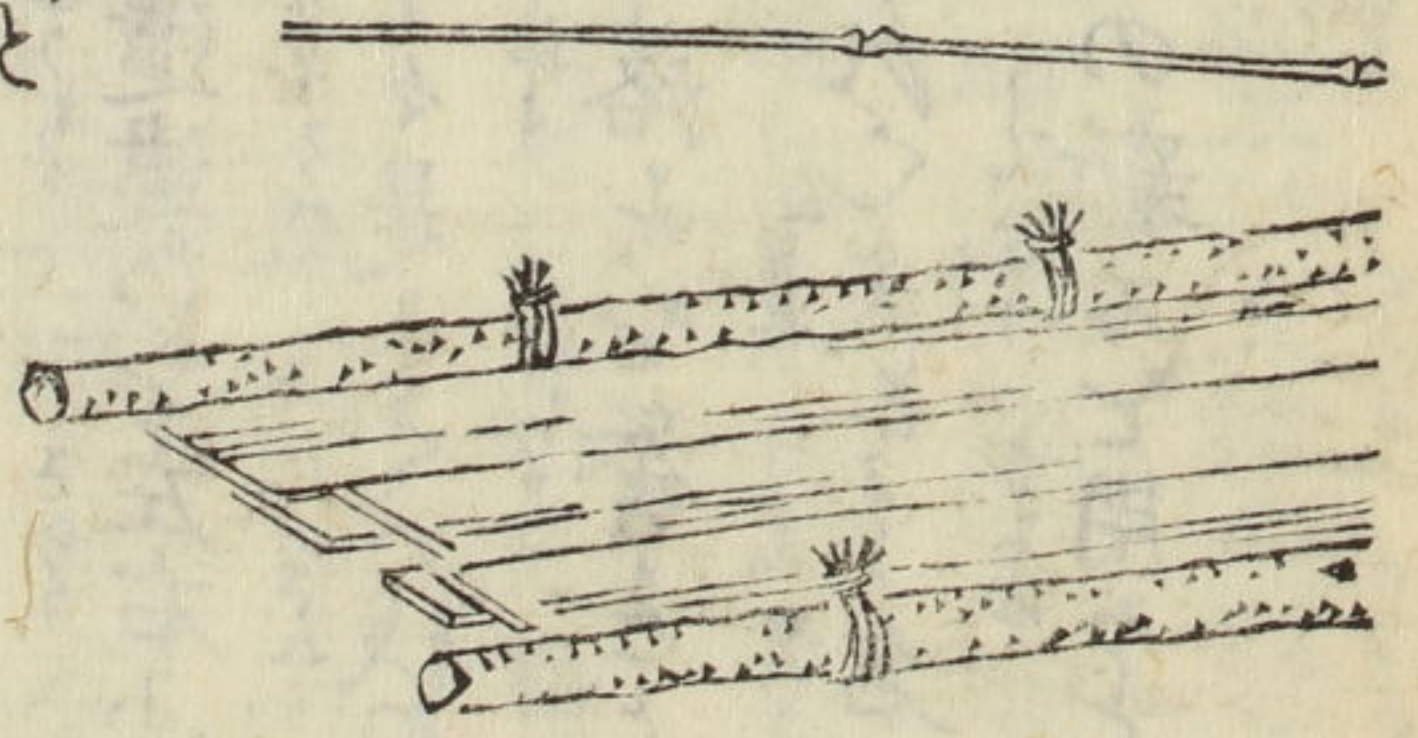
讀經終まば羣衆の者閑の声と上る是と相圖と

此間 彼兩所の竹と兩僧野刀と抜て二所伐る

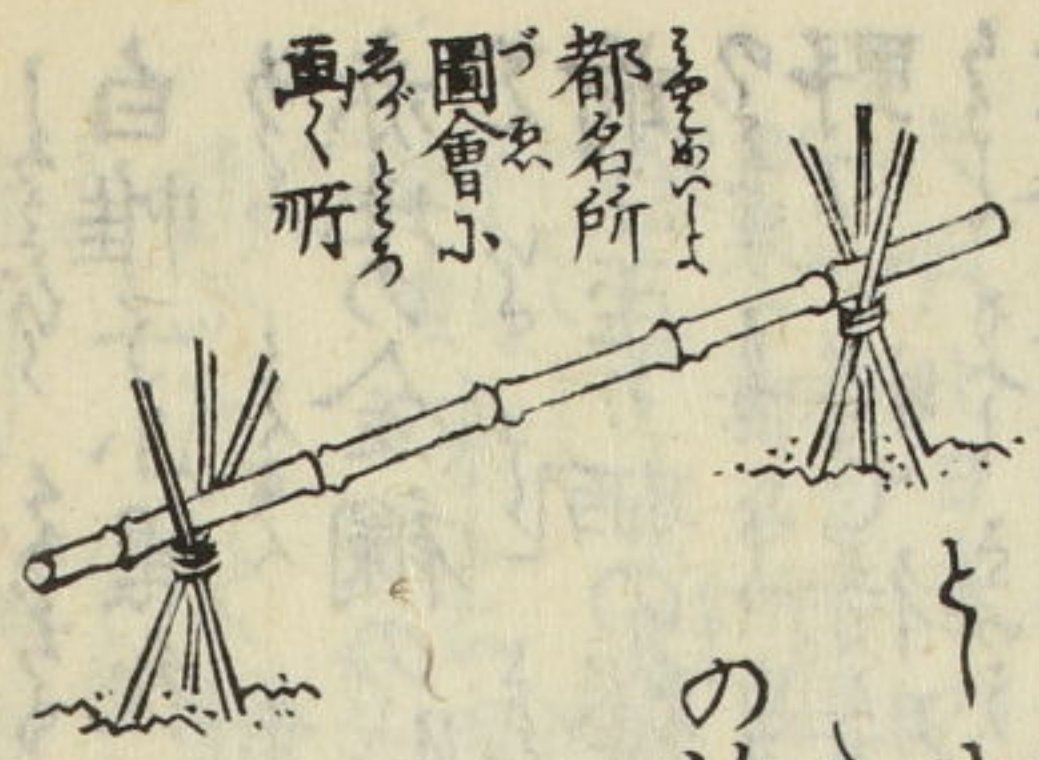
凡五尺 伐終まば野刀をさうして坂の下ちぎ走る左右兩僧の手練

の勝負と年々記録し残を故小吾劣らと伐る曠の勝負なり。

凡五組の勝負なり。伐り竹の中央を盗難除の守護小成とて。



衆人傳手と求めくろんと受る最潔き修法ありて野刀の衆徒の家々小傳ある名作あり。右竹伐の前以て是と京都の月番御奉行所へ持参し差上まじぶ則ち研師の年番へ仰付らる。研料と下され研めぬの出来の後鞍馬より参つて頂戴。當日の式小用ゆを例とて都名所圖會より太刀と以て伐ふと画くに竹の遣違ひと左右小植て臺



と其上小架して伐てふも中々是より伐ぬく左右の竹持一刀を廻し二刀目小切落とを譽まるとされ伐ぐ。多く三刀切て切おとす。夫より名作ありてい切まは。近来時々奇進の新刀と用るといふ。用小立りのなるといふ。

○賀茂の酸莖は京都の名産。上賀茂より製は大根の形を蕪。他所より種まの通例の蕪とあり。又他より漬る時酸薄し。賀茂より作りて賀茂より漬る名産。李鷹蜀山人小贈らるる。

都よりすのむおんをありて。吾妻男のさのまを。蜀山人

○山城国紀伊郡小佐比の里あり。三代実録貞観十三年国八月小制有て百姓葬送の地と定めぬ條下。下佐比上佐比と其地と定めぬ佐比寺は延喜式より九原送葬之輩更留棺於橋頭と見え。世小佐比河原と冥途あり。小児の集る所。且地藏尊を化益あり。あみといふ。此葬所小石の塔多く。或は石像の地藏尊も有。言出。ちんとすのむ余も有。と閑田耕筆より。余有。又一説あり。往

昔空也上人松尾明神（日泰）の礎西院の河原と往来ありあり里
 の児童ありて出て上人の衣の袖或いつとあり杖を以て携りて戯るる
 上人殊に憐れむと時々菓子など与へて愛しむの姿と写しと
 画しと後世地藏菩薩とて者ありて今西院村小浄土宗乃寺
 院ありて地藏尊と安置し種々縁起ありて小畧に西院の河原と
 仏家より塞の河原と轉じて西院村の四條通の西より壬生が
 して程遠く旧此地の賀茂の齋院の旧趾ありて齋院村ありて後世
 誤て齋と西小轉じて村中小住吉社四條通の南あり是則齋院の古跡あり
 當村生土の春日社と祭る又此辺の地名と車路町といふ按て
 いふの大路の三條と西へ封疆の外と直違に春日の森の東手へ出

但し御所より御車より通行ありて大路ありて車の路といふ古
 き跡ありて齋宮の旧趾の嵯峨天龍寺の北の方あり野々宮といふ
 齋宮へ入王十代崇神天皇の御代小神代遠ざりて内侍所と一處に
 帝の御座しと恐まあり御鏡といふ新しき鑄とせ大神宮の御影の
 移らせあり御鏡といふ皇女豊鋤入姫命と頂ありて大和国笠縫里
 より祭ありあり其後十一代垂仁天皇の時小皇女倭姫と託した
 り今伊勢へ移りありて祭りありて豊鋤倭姫といふ皇女
 故に依て後々帝の皇女と以て伊勢の神宮へ奉りて仕へせ
 り若帝は御女ありて時親王方の御女と立とあり例なり斯て代
 と經て後宇多院の皇女將子内親王七十四代の後斷絶あり此

齋宮の天皇位小即とあり内親王の未だ嫁しめざるを撰て卜定と
 て御占ありと其御占も當りあり皇女と西川ありと御禊せし奉り
 内裡の内左衛門の陣忌竹と立て二年目も又御禊ありと其八月
 より明年の八月まで野々宮も御座と三年目も伊勢へ御下りありと
 賀茂社も斯の如く夏ありと齋院と号し

三代實録第三云貞觀元年十二月廿五日丙午伊勢齋院于内親王
 於鴨水邊六条坊門末修禊賀茂齋院儀子内親王於同水邊待賢門
 末修禊並入初齋院云詞花集雜部小選子内親王賀茂の齋院
 ととき々々々時西に向ひて詠り
 思へども忌とて言ぬ夏あるまば其方にしむと音とのとぞあり

齋院の河原とりつる往昔へ掛川ありして大堰川東へ流き太秦廣隆
 寺の門前の邊より異方へ流き西院村と經て吉祥院村の辺とす
 鳥羽街道の西より鴨河と合流せしと見たり菅公左近の頃へ吉祥
 院村より御船も召させあり関り大堰川の洪水右京も溢き水入
 支救田あり廣隆寺の道昌僧都も勅しと止雨を祈らしめあり
 不日ありと雨止と水高低く減ぎとぞ余有る此河へ常へ水の流れも
 細くして河原あり故齋院の河原と稱しありとぞ

道昌の姓は秦氏讚州香河の人幼少して出家し三論と學んで弘仁
 九年東大寺小於て受戒し又空海小後めと灌頂壇小登る天長
 七年召まると弘名懺悔の導師とたり貞觀元年三會の講師と成

嘗て嵯峨法輪寺の開基なり。兼和年中大堰川溢る。道昌とんと
防ぎ過じ貞觀十六年僧都となり。同十七年二月卒し壽七十八法
華と講むる度五百七十座と云々。又清和帝御不豫の時廣隆寺
の道昌僧都と勅し之と祈らし願徳寺の薬師と廣隆寺
請迎しと勅許ありと之と祈る立ども平愈しぬと云々

○十王經より十齋日小念どき聖衆と奉る中ふ十八日あり地藏と念
ト廿四日あり觀音と念せよと云々今世俗より二十四日と地藏の縁日とん
何事の代りなり謬まらや。準提觀音の十八臂九界と度とる小折伏
撰受の二門あり故より二十九十八の教と頭より。十八日と觀音の縁日とする
といは是小本づく者ありなり一説より勝尾寺の觀音と比丘妙觀彫刻せ

小其徒十八人十八日と經て始て成り即ち八月十八日妙觀その日と以
て化し去る。これより十八日と觀音の會日とんといふ然まども地藏の廿四日
へはあり謂といふを云々

○南海四国遍礼の中阿波国海部郡比和佐村薬王寺 遍路二十
土佐国安藝郡の国境小至る行程十里此間より八坂坂中八濱ホの名あり。
山谷岩窟古跡多し此八坂より行基庵といふあり。此本尊より行基
僧正の像と安置し其影行基旅装あり左の手に数珠と持右の
手小鯖一尾と携へて立ちぬ異容なる像は是は往昔行基此地と遍
歴の折より塩鯖と多く馬小附て市小出を者より行合まると云々行基の
云く其鯖一尾とれぬ得るせよと乞ふなり小鯖の主とん因入と却て天

嘲り罵つて行過るゆへ行基是非なく別まぬ時

大坂や八坂坂中鯖ひと行基ふるまで馬の病

斯うして紙の ○行基僧正像

とに認め

渡りぬて

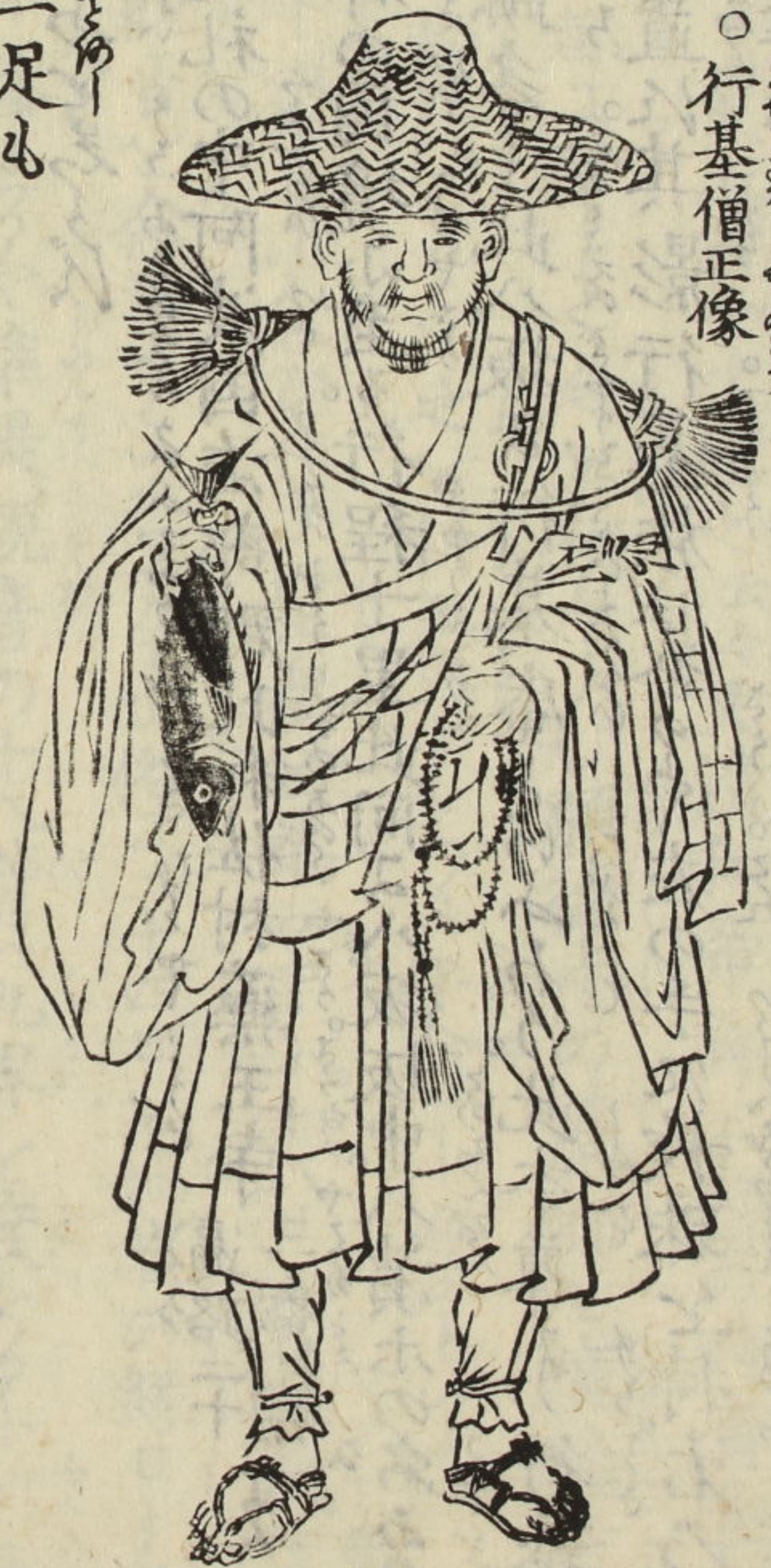
行過ぬ然

うふ忽ち馬

煩ひく苦し一足も

行と鯖主大ひの驚き儲の今の旅僧の凡人あり有べくんば急ぎて

先の無礼とてび其崇つて免ぐと僧正の跡とて漸小追付



前の疎忽と敷つて鯖と献じ其科を免ぐを願ふ行基僧正取あふ

大坂や八坂坂中鯖ひと行基ふる馬の病と止

と三句目の濁とてと轉じ落句の病と止と書くとて

しる直らぬ馬の病平愈せしと此夏世上小隱まぬ其徳と感嘆

終ふ其地小庵室といふ御影と摸くと本尊と今の代々も

尊信し遠近より諸人問断なりと因ゆ委しく本縁起を見たり

行基の泉州大鳥郡家原の里の産人王卅九代天智天皇七年に

生まぬ父の高志氏名い貞知百濟王の裔王仁の後母の蜂田首虎

身の女薬師姫といふ行基その胎内と出るとき胞衣纏ひて脱ぐ母之

行基の事

忌邊の樹枝ふくふ一夜と經て往く見らふ胞衣と出て頻々
 声と發を父母大に悦びて養育に稍成長くと真粹天挺德
 範夙く彰なり初め出家す時瑜伽の唯識論と讀て即其意と
 了らむ既ふく都鄙と周遊し衆生と教化し四方の要害の地
 橋と造り坡と築し百姓今ふ至つて其利と蒙る者多し聖
 武天皇甚ぞ敬重しあひく詔して大僧正の位と授く行基の靈
 異神驗多し時の人行基菩薩と稱を留止の所なる道場と建其
 畿内あり凡四十九院諸道あり亦多し和州藥師寺と以て在寺
 竟天平勝寶元年二月二日和州菅原寺に寂と時小年八十二
 幼名と法貴丸と号に按さる小弘法大師の宝龜五年小誕生あり行基僧正遷化の年
 光六年目小生まふとんどの行基庵の縁起の四國遍社の箇所定まらばり往昔なり

○京師の鴻儒松永昌三先生の俳諧の鼻祖貞徳翁の子息なり。
 後水尾院上皇儒道と昌三は學びぬ講習堂の額あり御朱と
 加へぬ書と賜ふ其家今尚連綿とく例年七月七日虫拂ひありて
 秘藏の付物と縦觀せむ孔子の書孔子の書石摺朱子の書自筆の
 惺窩先生の書今漢土小あり松永彈正久秀所持長刀同硯石川丈山より昌三先
 生へ贈る全唐紙の二幅對貞徳翁の書其餘教品あり畧之
 靈元院上皇の儒道と伊藤東涯小学ひぬ古義堂の額と賜ふ秘
 藏の付宝許多ありとて兩家とも小仕官と為ぐと永續の段
 公より御褒詞ありとて終年々京兆尹より白銀十枚づつ兩家へを
 実小名家と謂つど

按どるふ俳諧家譜小云。鼻祖貞徳へ松永氏幼名へ勝熊壯歳う薙
髪して号を松友と曰。軒と道遊と名く晩年復髻と束て而して童
服と着し自ら呼ぶ延陀丸と曰後改めく長頭丸と号は父へ永種

撰州高槻刺吏入江九郎盛重之男云々

五郎政重の長子なり後改て松永と称ス

和州諸將軍傳小云。撰州高槻の城主松永久秀が伯母婿入江左衛門

尉平盛重其子大五郎政重ト云々元龜二年辛未八月四日和州添下郡

龍市の東山より筒井松永の合戦より十市兵部少輔遠忠の爲入江

盛重肩先と深く切込高槻の城小歸入と後疵重くなりと遂り

六十一歳ありと死を大五郎へ信貴山小入て久秀小属と云天正五

年十月十日信貴山落城しと松永彈正少弼久秀六十八歳ありと自

殺と一子右衛門佐久通の行方知らず後生死も知まざり是名将死期

の一箇の謀反也入江大五郎政重五十一歳松永大次郎永種廿五歳父子

俱ふ指違へ死ふりト云々按どるふ大次郎永種の政重の子ありて松永

の養子とある者あり前小右門佐久通同大次郎永種入江貞徳の兼應

二年癸巳十一月十五日壽八十三ありと没を按どるふ元龜二年の誕生あり然

大次郎永種一子勝熊と連て戦場と脱しありあり永種の父政重と

俱ふ自殺し親父右衛門佐久通も助けらる落る者拾遺信長記

久通一方と切破り中国へ忍び下り長門國へ隠し其孫小永種

孫と云々然る貞徳入江の血脉ありと松永の胤あり非を養父の

人なりと云々

皇金屋集卷之四

氏と名のる者なり

辞世 露の命まゆり衣の玉うげ再びうけぬ御法ありし 貞徳
城南上鳥羽邑實相寺に葬る謚しく明心居士と号し家書ふ御傘
淀川 油糟の書とす 紅梅千句 百韻自註 逍遊集 歌林樸楸 和
歌宝珠 戴恩記 徒然草大意 同慰草 前車集 亦あり

雲錦隨筆卷之四大尾

叙見大政有平氏
赤志忠七東區本
街四丁目十二番地
忠雅堂

